



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語の対称表現の社会語用論的研究
Author(s)	都, 賢娥
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15213号
Issue Date	2022-09-26
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k15213
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93230
Type	doctoral thesis
File Information	Hyunah_To.h.pdf



博士学位論文

日本語の対称表現の
社会語用論的研究

北海道大学大学院文学研究科

都 賢 娥

博士学位論文

日本語の対称表現の社会語用論的研究

この論文を博士（文学）学位論文として提出する

提出：2022年08月31日

北海道大学大学院文学研究科

言語文学専攻

指導教員 加藤重広

氏 名 都賢娥

目 次

序論	1
1. 研究の背景と目的	1
2. 研究方法	2
3. 本論文の構成	3
第1部 予備的議論	5
第1章 日本語の対称表現	6
1.1. 本研究における対称表現	6
1.2. 対称表現の種類と特徴	11
1.2.1. 固有名詞	15
1.2.2. 普通名詞	16
1.2.3. 対称詞	22
1.2.4. その他の種類と呼びかけ表現	23
1.2.5. 対称表現が出現しない場合	26
1.3. 対称表現の選択可能範囲	29
1.4. 第1章のまとめ	32
第2章 対称表現と付属的成分	34
2.1. 対称表現における敬称の機能と位置づけ	34
2.2. 対称表現の複数形	40
2.3. 本研究における対称表現の分類	43
2.4. 第2章のまとめ	45

第2部 日本語の対称詞の選択動機に関する考察.....	47
第3章 対称詞の選択に関わる要素.....	48
3.1. 規範としての要素：外的要因.....	48
3.2. 話し手の表現意図に関わる要素：内的要因.....	53
3.3. 対称詞に見られる階層.....	58
3.4. 第3章のまとめ.....	59
第4章 対称詞の選択と文脈との関係.....	60
4.1. 発話解釈に関わる文脈の種類.....	60
4.2. 文脈から見た対称詞の指示プロセスの段階.....	63
4.3. 固有名詞と普通名詞の比較.....	66
4.4. 第4章のまとめ.....	69
第5章 対称詞の選択動機とスタンスの表示.....	71
5.1. 対称詞の特徴と使用実態.....	71
5.1.1. 「あなた」と「きみ」.....	73
5.1.2. 「あんた」と「おまえ」.....	78
5.1.3. 対称詞の意味的変遷と現代の使用実態.....	82
5.2. 対称詞の選択動機：スタンスの表示.....	85
5.3. スタンスと対人距離の調整.....	92
5.4. ポライトネスと対称詞.....	97
5.5. 第5章のまとめ.....	102
第3部 日本語の対称表現における発話効果の比較考察.....	104
第6章 対称詞の発話効果の比較—「あなた」を中心に—.....	105
6.1. 対称詞における「あなた」の特殊性.....	105
6.2. 「あんた」との比較：品位の観点から.....	111
6.3. 「あなた」とキャラクター性.....	116

6.4. 対称詞間の転換と発話効果	121
6.5. 第6章のまとめ	124
第7章 対称詞とインポライトネス	126
7.1. 本研究におけるインポライトネス	126
7.2. インポライトネスの解釈を確定する対称詞	130
7.3. 逸脱的インポライトネス	135
7.4. 第7章のまとめ	146
第8章 対称表現の選択に見られるカテゴリー転換	148
8.1. 対称表現のカテゴリー転換と発話効果	148
8.2. 固有名詞と対称詞における転換	153
8.3. カテゴリー転換の動機：対人距離の動的調整	159
8.4. 第8章のまとめ	162
結論と今後の課題	164
1. 結論	164
2. 今後の課題	166
参考文献	168
用例出典	173

序論

1. 研究の背景と目的

本研究では、日本語の中の聞き手を指す表現を「対称表現」と定義し、従来の用語（対称詞、人称名詞、人称代名詞など）との違いを検討してその妥当性を提示している。第1章で詳しく論じるが、人称名詞や人称代名詞は、その名称からわかるように「日本語」における聞き手を指す表現の特徴を反映しているとは言いにくい。日本語は文末との一致を求める性・数・格・人称などの文法範疇を持たず、人称においてはその意味役割を果たす語彙的なカテゴリーが存在するだけである。そのため、人称名詞や人称代名詞は、このような日本語の特徴が十分考慮された用語とは言いにくい。そこで、本研究では、日本語の発話や会話の中で話し手が聞き手となる相手を指示するために用いる指示的形式の総称を「対称表現」と定義している。さらに、この対称表現は「自分と相手との関係性を表せる」という特徴がある。ここでの関係性とは、話し手である自分が聞き手である相手を「どのように捉えているか」と言い換えることができる。例えば、ある人物が聞き手のことを「きみ」と呼ぶ場合、我々は一般的に話し手は聞き手より目上か同等の関係の人物であることを想定する。また、話し手自身も聞き手のことを同等または目下の相手として位置づけていることがその形式からわかる。「おまえ」の場合も「きみ」と似たような関係性が想定できるが、「きみ」を使った場合より話し手と聞き手における親疎関係に違いがあることがすぐに見えてくる（一般的に、「おまえ」を使用した方が話し手と聞き手との心的距離が近いと捉えやすい）。これは、数ある対称表現の中でどの形式を選択するのかによって、話し手は聞き手との関係を調整しているとも解釈できる。

このように、日本語の対称表現は、西洋言語の二人称代名詞とは違って、特に話し手と聞き手との関係（文脈）を知らなくても、形式だけで彼らの関係性（上下・親疎

など)をある程度把握することができる。言い換えれば、対称表現の形式から話し手と聞き手との関係性が読み取れるという特徴を持つと言える。さらに、話し手がどの形式を選択するのかによって、話し手と聞き手における対人距離の調整が可能となり、これは社会語用論的調整と見ることができる。しかし、従来の研究ではこのような部分について十分議論されていないようである。そこで、日本語の対称表現の種類(形式)とその特徴(どのような関係性を示すか)を整理することは一つの研究成果として考えられる。

また、日本語の対称表現は人間関係の数だけあるとも言えるほどその種類が豊富であり、我々は既知関係の人物に対して普段は無標の呼び方を用いるが、特殊な発話状況であったり、ある特定の文脈を伝達したいという強い動機があったりする場合には、無標の表現が他のものにシフトされることもある。日本語の対称表現の中には、聞き手の名前を表す固有名詞をはじめ、「先生・部長」のように聞き手の肩書を表すものや、「あなた」のような語類の表現など様々な種類の形式が見られる。そして、話し手は聞き手との関係や発話場面などの文脈を参照し、多様な選択肢の中で最も適切な表現を「選択」していると言える。表現の選択という言語行為には、話し手の意図や動機が反映されると言えるが、従来の研究の中でそれが解明されているとは言いにくい。そこで、本研究では、日本語の中の「既知関係の相手」に対する対称表現の選択とその発話効果を社会語用論的に考察し、対称表現の選択に見られる動機を明らかにすることを研究の目的とする。

2. 研究方法

日本語の対称表現の選択動機を明らかにするため、本研究では、主に既知関係の相手に対する対称表現の選択が見られる用例を中心に考察を行っている。分析対象となる用例は、映画やテレビドラマ・アニメ、バラエティー番組などからのものを収集し

た。既知関係の相手に対する対称表現の選択を考察する際には、話し手と聞き手との「普段」の対人関係や「無標」の呼び方を把握することが重要である。自然談話資料の用例は、実際に発言された用例ではあるものの、話し手と聞き手が初対面である場合も多く、既知関係の相手であったとしてもプライバシーの関係上、両者に関する詳しい情報を得ることが困難だと言える。そのため、本研究では話し手と聞き手との普段の関係や呼び方が比較的容易に観察できる映画やテレビドラマから得た用例を中心に考察を行っている。作品の選別は、ファンタジー的な要素のない、現代の日本社会をできるだけリアルに描いているものにした。以下に、本研究の分析資料を示す。

表 1 本研究の分析資料

	作品名	放送局	公開・放送時期
映画	告白	—	2010年
テレビ アニメ	あたしンち	テレビ朝日	2002年4月19日 ～2009年9月19日
	新あたしンち	アニマックス	2015年10月2日 ～2016年4月5日
テレビ ドラマ	半沢直樹	TBS	第1期：2013年7月7日 ～2013年9月22日
	地味にスゴイ！ 校閲ガール・河野悦子	日本テレビ	2016年10月5日 ～2016年12月7日
バラエティー 番組	水曜どうでしょう2019 —北海道で家、建てます—	HTB	2019年12月26日 ～2020年3月11日

3. 本論文の構成

今まで見てきた研究の目的を達成するため、本論文では以下のような構成で日本語

の対称表現の選択動機と発話効果について考察を行っている。

本論文は序論と結論を除いて大きく3部構成となっており、第1部の「予備的議論」では、本格的な考察に入る前に用語の定義や整理などを行っており、第1章から第2章までとなっている。第1章では、対称表現の種類による特徴を検討し、出現位置や出現有無による機能の違いについても触れている。第2章では、対称表現に付属する成分をいくつか取り上げ、各成分の特徴とその相違点について検討している。そして、これらの内容を踏まえ、本研究における対称表現の分類を行っている。

第2部「日本語の対称詞の選択動機に関する考察」では、主に「あなた・あんた・きみ・おまえ」のような語類（対称詞）に焦点を当ててその選択動機を考察しており、第3章から第5章までとなっている。第3章では、対称詞の選択に関わる要素を話し手のコントロールの可能有無によって外的要因と内的要因に分け、各要素が対称詞の選択にどのように影響するのかを整理している。第4章では、対称詞を含む日本語の対称表現が聞き手を指す表現として解釈されるまでのプロセスについて、文脈という観点から考察している。第5章では、現代日本語における対称詞の使用実態を検討し、ポライトネス理論や距離の理論に触れながら対称詞の選択動機としてスタンスの観点から考察を行っている。

第3部「日本語の対称表現における発話効果の比較考察」では、第6章で対称詞における「あなた」の特殊性について検討し、一つの文脈の中での対称詞間における転換とその発話効果を考察している。第7章では、第5章のポライトネス理論と関連するインポライトネスの観点から、インポライトネスの文脈における対称詞の位置づけとその発話効果を考察している。第8章では、一つの文脈の中で同じ人物を指す場合での、対称表現の中の異なるカテゴリーの表現における転換を考察し、その発話効果と転換の動機について、対人距離の動的調整という観点から論じている。

最後の「結論と今後の課題」では、本研究での主な研究成果と残された課題をまとめている。

第1部 予備的議論

第1章 日本語の対称表現

第1章では、本研究の考察対象である「対称表現」の定義を行う。そして、日本語の対称表現の種類と各特徴を検討し、その出現位置や出現有無による発話効果の違いを検討する。さらに、話し手と聞き手との関係による対称表現の選択可能範囲についても考察を行う。

1.1. 本研究における対称表現

日本語の発話や会話の中に見られる聞き手を指す表現としては、「山田・太郎」などのような個人の名前をはじめ、「先生・部長」などのような肩書、「あなた・きみ」または「そちら」のような（人称・指示）代名詞と呼ばれてきたものまで様々なものがあるが、これらを総括する用語に一貫性が見られるようになってからそれほど長くはない。また、人称代名詞という用語が日本語の品詞の種類として当てはまるのかについても検討の余地がある。ここでは、日本語の聞き手を指示する表現に関する用語を整理し、本研究における対称表現の定義を行う。

日本語の文法史において、名詞と代名詞の文法的・語法的違いを巡る議論の転換点となったのは、佐久間（1951）だと言える。佐久間（1951）では、「名詞の代わり」という従来の日本語の代名詞の定義について、もとはといえば外国文法の品詞分けにおける呼称を取り入れる際、代名詞という訳語が作られただけで、実際に日本語の語源にさかのぼると、本来の代名詞というべきものはごく少ないとしている。そして、代名詞の「指示」という機能に着目し、自己を中心として「もの・こと」がどのような位置・方向・有様などを呈しているかについての立言が話し手と聞き手との関係を表すものと、対象を指示するものとに分けられると説明する。その内、人を指す語類

を人代名詞¹と区別して取り上げる際の名称を「こそあど」体系としている。人代名詞というものに関しては、自称（話し手が自分自身を指す場合）・対称（話相手すなわち聞き手を指す場合）・他称（それ以外の人を指す場合）の三通りの「称・人称」を持っていて、その外に不定称があるとしている。また、人称はヨーロッパ語法から借用してきたものであって、ヨーロッパ語での主格になる語の人称が文の述部となる動詞の変化形と照応しなければならない点が日本語との相違点だと述べている。さらに、この人代名詞や、こそあど体系が指示するものについて、話し手と聞き手との対話の際に「話の場」が生じるが、その場は話し手と聞き手における「なわばり」となり、そこから話し手の「わ・こ」のなわばりと、聞き手の「な・そ」のなわばり、そしてそれ以外の範囲である「あ」のなわばりができると説明している。そしてこれが、日本語の指示詞の研究における大槻（1891）の「こ・そ・あ」の近称・中称・遠称という定義からの「距離説」に対する、話し手と聞き手がある「対立」をなしている場合の「領域説（なわばり説）」となったと言える。

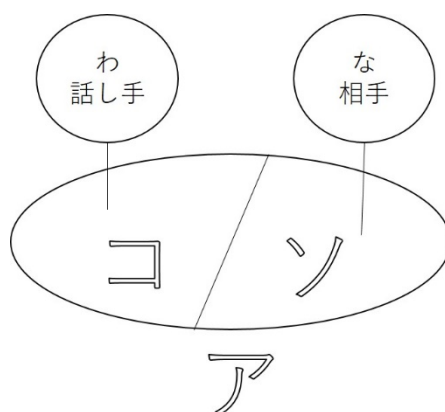


図 1 日本語の指示詞における「なわばり説」（佐久間1951：35）

¹ 佐久間（1951）による人代名詞には、「あなた・きみ・おまえ」などの語類に加え、「この人・このかた・こいつ・この男・この子・そちら・だれ・どなた」などの語類も含まれている。

さらに、佐久間（1951）は「こそあど」における近称・中称・遠称と、人称における自称・対称・他称との間の内面的な交渉が、単に外面的な区分を超えてある働きを示すことになる」と述べている。このような佐久間（1951）による考察は、西洋語法からの代名詞・人称と日本語との違いを指摘し、現代日本語の口語的運用から見た日本語における人を指す語類と、物事を指す語類の区分法を提示したものだと言える。

その後、現代日本語の人を表す語類の特徴と、その体系を整理したものとして鈴木（1973）がある。鈴木（1973）では、大槻文法を引き継ぐように見られる部分が多く見られ、その中でも日本語の対話の中の話し手と聞き手をどのように表すかという現象について、使用（運用）上の原則的部分を中心に触れている。鈴木（1973）によると、日本語の「わたし・あなた・かのじょ」などは、明治時代に西欧文法にならい一人称・二人称・三人称代名詞と名付けられたものである。しかし、西欧言語での人称は、佐久間（1951）でも指摘したように、動詞との一致（agreement）を求める文法範疇としてのものであり、日本語には人称としての役割を担うことばがあるだけで、それらに文法的規則が適用されるわけではない。そこから、人称代名詞という用語の使用に妥当性があるのかを考察する必要があると言える。鈴木（1973）では、日本語の「わたくし・ぼく」「あなた・きみ」などを人称代名詞とすることは、日本語と多くの点で構造の違う諸言語の研究から導かれた説明原理を無批判に鵜呑みして取り入れた結果であって、日本語に見られる言語的事実とは相容れない誤りであると指摘する。そして、人を表すことばとして、自称詞（話し手が自分自身に言及することば）、対称詞（話し手が話の相手に言及することば）、他称詞（話し手が話に登場する第三者に言及することば）という三つの分類を設けている。このような分類は、それまで用いられていた一人称・二人称・三人称という用語からわかるように、日本語の中で人を表すことばの観点を人称という文法範疇から話し手と聞き手、そして話題として登場する第三者という会話参加者としての役割の方に移したと言える。そこで、本研究では鈴木（1973）に従い、聞き手のことを指す表現を「対称詞」として扱うが、鈴

木（1973）では「そこのお兄さん」のような指示詞と対称詞の複合型や、「山田課長」や「山田さんあなた」などのような二つ以上の種類の表現の複合型、さらに「山田さん」、「山田部長」、「お客さま」などの敬称との組み合わせなど、対称詞の中のバリエーションについては特に言及していない。

また、聞き手を指す表現が発話の中でどのように現れるか、または現れないかを考えてみると、（1）のように発話の命題の中で助詞を伴う形で現れる場合もあれば、命題を超えた談話単位で助詞を伴わない呼びかけとしての出現、または表現自体が出現しないゼロ型となる場合も考えられる。

（1） a. 「山田さんも一緒に行く？」

b. 「山田さん、一緒に行く？」

c. 「（Ø）一緒に行く？」

鈴木（1973）では、これらに関連する対称詞の二つの用法について言及しており、（1a）のような場合に関しては、ある文の主語または目的語として用いられたことばが、内容的には相手を指している「代名詞的用法（*pronominal use*）」であり、（1b）は相手の注意を引きたいときや、相手に感情的に訴えたい場合などに用いられる呼びかけ語としての「呼格的用法（*vocative use*）」であると説明する。しかし、我々の発話の中では、（1c）のように対称表現が出現しない場合もよく見られ、むしろ最も多く見られるタイプではないかとも考えられる。そこで、本研究では、二つ以上の種類の表現の複合型や、呼びかけやゼロ型の場合など、日本語の聞き手を指す表現を幅広く網羅するため、聞き手を指す表現を対称詞という用語の代わりに「対称表現」と呼ぶことにする。そして、この対称表現が呼びかけ語として用いられた場合は「呼びかけ表現」と呼ぶことにする。以下に、本研究における対称表現の定義とその説明をまとめる。

(2)本研究における「対称表現」の定義と説明：日本語の発話や会話の中で、話し手が聞き手となる相手を指示するために用いる指示的形式の総称。命題の内部に現れ、助詞を伴う形の必須項としてのものから、命題の外側に現れる助詞を伴わない形の呼びかけとして機能するものまでを含むが、便宜上、後者は「呼びかけ表現」と呼ぶことにする。一般的に、命題の内部に現れる対称表現はそのまま呼びかけ表現にもなれるため、これらの間には連続性が見られると言える。なお、「すみません」、「あの…」、「おい！」などの表現も人を呼ぶときに使えるが、これらを助詞を伴う形として用いることはできず、指示的な成分とも言いにくいいため、本研究の主な考察対象からは外すことにする。

一方、田窪（1997）では、人称代名詞という範疇は性数格の一致のある言語において、その一致特性のみを担う範疇であるため、名詞と区別された統語範疇としての代名詞は閉じられた語類であるのに対して、日本語の「わたし・あなた」などの人称を表す語類は、一致を求めず、必要であれば「ミー・ユー」などのように外来語からの流入も許す点から開かれた語類であり、他の名詞類と区別する文法的理由はないと述べている。また、鈴木（1973）での自称詞・対称詞・他称詞の中で、「わたし・あなた・かれ」などの語類を「人称名詞」としており、田窪（1997）では直接的に言及していないが、それを引き継ぐ以降の研究では「わたし・ぼく」などの自称詞は「自称人称名詞」、「あなた・きみ・おまえ」などの対称詞は「対称人称名詞」、「かれ・かのじょ」などの他称詞に関しては「他称人称名詞」という用語が見られる。

これらから、従来の人称代名詞という用語から「対称詞・人称詞」や「対称人称名詞」などと言った用語が使われるようになったことがわかる。ただし、今まで見てきた通り日本語には人称という文法範疇がないため、「わたし・あなた・かのじょ」のような語類を指す表現として人称詞や人称名詞という用語を使用することに妥当性が

あるのかについては検討の余地がある。加藤（2006）では、日本語における自称・対称・他称は、多くの表現の中から場面にふさわしいものが選択される「語彙的な要素」であり、その選択には社会言語学的な制約（性別・年齢・地域など）がかかり、運用上の判断（場面・人間関係・表現意図など）が関わると述べている。従来の「人称詞」や「人称名詞」がこの語彙的な要素としてのものを指しているのであれば特に問題はないように思われるが、本研究ではそのような誤解を避けるため、対称表現の中の「あなた・きみ・おまえ」などの語類を人称詞や人称名詞という用語の代わりに、鈴木（1973）での対称詞の意味を狭めて用いることにする。念のため、以下に本研究での対称表現と対称詞の違いについて整理しておく。

(3)対称表現：日本語の発話や会話の中で、話し手が聞き手となる相手を指示するために用いる指示的形式の総称。

(4)対称詞：対称表現の中の「あなた・あんた・きみ・おまえ・おめえ・てめえ・きさま」などの語類を指す名称。

1.2. 対称表現の種類と特徴

次に、日本語の対称表現にはどのようなものがあるのかを確認し、各表現の特徴について検討する。日本語の対称表現の種類は、話し手と聞き手の人間関係の数だけあると言っても良いほど他の言語に比べてそのバリエーションが豊富な方であると言える。現代日本語研究会（2011・2016）では、職場と日常生活といった場から得られた自然談話資料²を基に、日本語の中の様々な側面について考察している。その中でも、

² 「職場」における談話資料は、同僚や顧客など仕事関係の人々の間で行われたものであり、「日常生活」の場合は、職場での談話も多少含まれるものの、ほとんどは家庭や外出先で家

小林（2011・2016a）は談話の中の「呼称³」について社会言語学的考察を行っており、特に小林（2016a）では職場と日常生活での談話から得られた呼称の中で、発話の中で発話者が直接目の前にいる聞き手を指したり、呼んだりする語のみを取り上げた結果、①「あなた・きみ・おなえ」などの対称代名詞（小林による用語である）、②「先生・社長・マスター」などの役職地位名、③「おばあちゃん・お父さん・おばさん・ママ」などの親族呼称、④姓・名を含む呼び名（姓・名の一部や変形、敬称を付けた場合をすべて含む）、⑤いわゆるニックネームとされる愛称などの、大きく五つの種類が見られたとしており、職場と日常での呼称の出現数について以下のように示している。

表 2 日本語の呼称の出現数（小林2016a：15）

	あなた	あんた	きみ	おまえ	役職 地位	親族 呼称	姓 ⁴ を 含む	名 ⁵ を 含む	その 他 ⁶	合計
日常	22	28	8	8	22	48	53	99	10	298
職場	18	7	1	22	96	0	273	13	17	447

族や比較的親しい友人などとの間で行われたものとされている。

³ 小林（2011・2016a）では、発話の相手と呼んだり、指したりする言い方を「呼称」としており、対称であっても、発話者が他者ないし自分のことばを引用し、その中に呼称を交える場合に関しては、考察の対象外としている。この「呼称」は、本研究での対称表現と呼びかけ表現をすべて含む用語として考えられる。ただし、「そこのお兄さん」などの指示詞と複合した形や、敬称の扱いなどに関しては特に言及していない。

⁴ 「姓＋さま・さん・くん・ちゃん・呼び捨て」の形をすべて含む（小林2016a）。

⁵ 「名＋さん・くん・ちゃん・呼び捨て」の形に加え、ニックネームなどの愛称までを含む（小林2016a）。

⁶ 「そちら」「そっち」などを含む（小林2016a）。

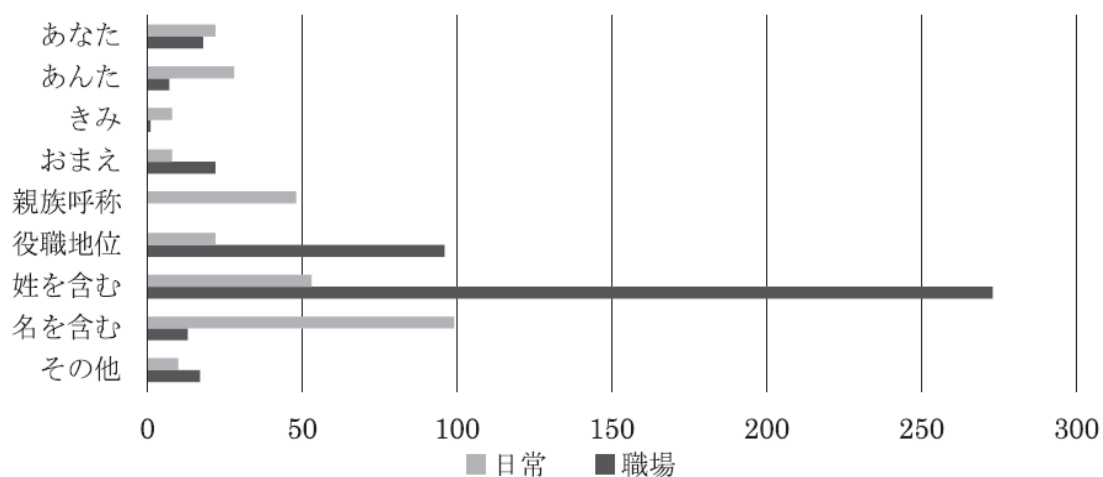


図 2 日本語の呼称の出現数（小林2016a : 15）

一方、文化庁（2017）の「国語に関する世論調査」では、相手の呼び方について「改まった場で、それほど親しくない相手と呼ぶときどのようなことばを使うか」という調査を行っている。その結果を示したものが図3であり、図2と合わせて見てみると小林（2016a）での呼称の種類と概ね同じものが見られることがわかる。

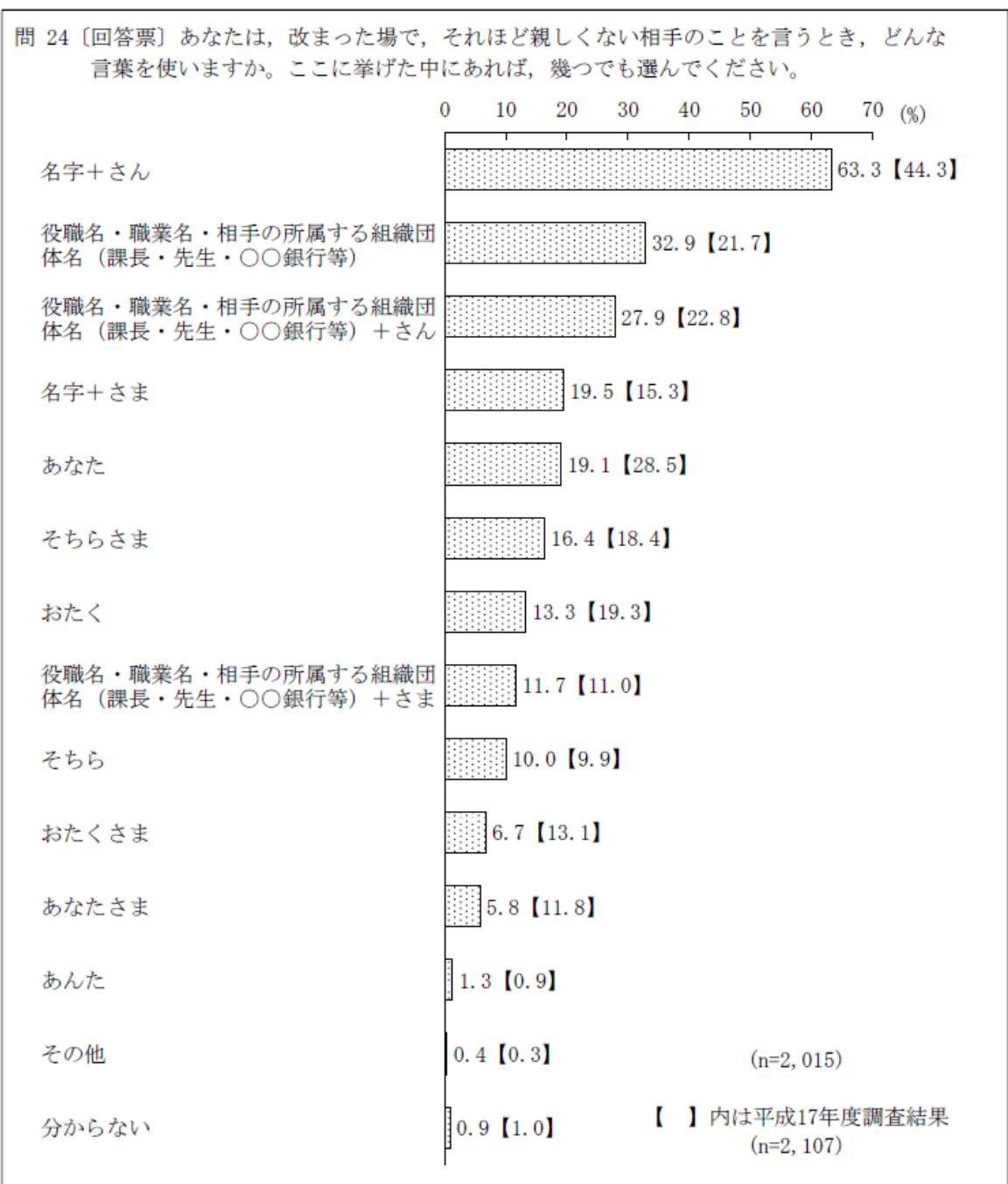


図 3 平成28年度「国語に関する世論調査」問24の調査結果

これらから、職場と日常生活と言った場による違いはあるものの、我々が一般的に用いる対称表現としては、1) 個人の姓名を表す「固有名詞」、2) 親族関係や仕事関係などの話し手と聞き手との社会的関係、または肩書のような聞き手の社会的属性を

表す「普通名詞」、3)「あなた・きみ・おまえ」などの「対称詞」の、大きく三つが見られると言える。また、この三つに加えてそれらが複合された形や、敬称や指示詞と組み合わせた形などが二次的に見られると言える。以下では、各表現の種類とその特徴について検討する。

1.2.1. 固有名詞

個人の姓名を表す固有名詞は、定（definite）または定記述（definite description）としての性質を持つと言われており、これは個人または個々の物事を「特定」できるかどうかということである。加藤（2006）では、固有名詞は語形と指示対象の間に一対一の対応関係が成立し、ソシュールによるシニフィエ⁷としての意味を持たないと見ることができると説明する。また、一人の人物が実名以外に筆名を持つ場合は、一対多の対応に見えるが、固有名詞の語形に対して指示対象が唯一の特定物として存在すれば、固有名詞の要件を満たすことになり、この場合一つの指示対象物をめぐって固有名詞間で対立が生じ、価値の差が生まれると述べている。さらに、商品名の場合は、商品の抽象的な存在（＝ブランド）と一対一の対応が成立すると考えることができ、個々の商品は、商品名の表す「商品（としての存在）」が実体化されたものであって、固有名詞の直接の指示対象と見なさず、そこには範疇化の作用は見られないと述べている。それに対して、例えば「猫」という表現は、そこに含まれる指示物が個別に異なっており、異なる個体を取りまとめて範疇を設定し、意味化する作用が見られる点から、固有名詞と普通名詞の違いは「範疇化の有無」といえると説明する。このことから、対称表現の種類によって、聞き手（指示対象）の特定までのプロセスに違いが見られることが考えられる。これに関しては、他の対称表現の特徴も検討し

⁷ ソシュールは、記号としての言語をシニフィアンとシニフィエに分けており、前者は「表すもの」としての音声、後者は「表されるもの」としての意味に当たる。そしてこれらが一つの記号としての言語になると言える。

た上で、発話解釈と関わる「文脈」と関連付けて第4章で詳しく論じることにする。

一方、他の対称表現と比べて、固有名詞は「ちゃん・くん・さん・さま」などのような敬称が付く場合が多い。敬称の中からは「待遇度」の違いが見られるため、敬称との共起によって話し手は聞き手への待遇度を調節できることになり、それは(5)のように文体(style)の調整にもつながると言える。

- (5) a. 「山田／山田(ちゃん)／山田くん／山田さんは、どっちにする？」
b. 「太郎／太郎ちゃん／太郎くん／(太郎さん)は、どっちにする？」
c. 「山田さん／山田さまは、どちらにします／なさいます？」
d. 「(太郎さん)／(太郎さま)は、どちらにします／なさいます？」

また、主に書き言葉で見られるものとして、「殿／様／氏」のようなものもあり、これらからも待遇度の違いが見られると言える。一方、「山田先生・山田部長」または「山田お兄さん／お姉さん」などのように、固有名詞に肩書や親族名としての普通名詞を付ける場合もあるが、これらは使用対象が(地位または年齢が)目上の人物に限られる場合が多いため、一般的には敬称としての機能を帯びることになると言える。敬称のように対称表現に付属する成分については、第2章でその特徴を検討する。

1.2.2. 普通名詞

対称表現としての普通名詞は、先ほどの表2での役職地位(名)と親族呼称という名称からわかるように、大きく家族関係を表す「お父さん・お姉さん」などの親族名詞と、社会的地位・肩書を表す「部長・先生・お巡りさん」などの役職名詞に分けられる。そして、この親族・役職名詞という用語からわかるように、普通名詞の最も大きい特徴は、ある「役割」を表す点にあると言える。滝浦(2008)では、(6)のように目上の人物は他者から見たときの親族名称をそのまま自称に用いることができる

が、自分より下であることを意味する語は用いられないと説明する。そのことから、親族名詞や地位・職業名詞での呼称はその人を呼んでいるのではなく、その人に付与された「役割」を呼んでいるため上位者に対しても使うことができ、聞き手自体ではない「役割性」を表す点から「間接性」と緊密に関係すると述べている。

(6) 「お母さんはね、お前のことを思って…」

(滝浦2008 : 80)

鈴木(1973)では、(6)の「お母さん」のような話し手の普通名詞の自称的使用にはある制約があり、それは普段聞き手が話し手のことをその形で呼んでいる場合に限られると説明する。つまり、親族名詞の中でも「お母さん・母ちゃん・ママ」などは自称として自然に用いることができるが、「母・母親」などを使うと違和感を覚える者が多いだろう。

ここで、自称詞や他称詞の対称詞化について触れておく。我々の日常の中で、男児に対して「ぼく」という自称詞を、女性に対して「(そのの)かのじょ」という他称詞を対称表現と呼びかけ表現として用いる場合がよく見られる。頻度としては、両方とも呼びかけ表現としての使用が多いと言える。「ぼく」に関しては、相手にとっての自分自身を呼ぶ「反転自称」の用法であり、これは相手に近づく近接化的呼称として考えられる(滝浦2008 : 79)。「かのじょ」の場合は、「ぼく」と同じく見ず知らずの相手に対する臨時的な呼びかけとして考えられるが、相手が子供ではなく大人の女性であることが一般的であるため、固有名詞を使って相手を指すための社会的儀礼や手続きを省略して話し手が直接聞き手を「かのじょ」と名付けして呼んでいることからくる失礼さ、あるいはなれなれしさが読み取れる(田窪1997 : 37-38)。

また、親族名詞は見ず知らずの相手に対しても使うことができるという特徴がある。中年男女に対する「お父さん・お母さん」や、若い男女に対する「お兄さん・お姉さ

ん」の使用が代表的な例だと言えて、鈴木（1973）では、これについて「虚構的用法（fictive use）」と説明する。これは、実際には血縁関係のない他人に対して親族名称を使って呼びかけることであり、一般的な用法としては、話し手が自分自身を原点として、相手がもし親族だったら自分の何に相当するかを考え、その関係にふさわしい親族名称を対称または自称として選ぶことである。それに対して、大人が迷子の子供を「お兄ちゃん・お姉ちゃん」と呼ぶこともあるが、この場合、子供が話し手より年上であるわけではない。鈴木（1973）ではこれを第2の用法としており、親が長男の子供に対して「お兄ちゃん、弟にはやさしくしなきゃ。」と言うように、その共同体の最年少者を基準点にとり、呼びかけられる人あるいは言及される人物が、その最年少者から見て何であるかを表す用語で示されると説明する。滝浦（2008）でもこれについて言及しており、この場合の「お兄ちゃん」は聞き手の役割を強調していると述べている。

一方、我々の日常での固有名詞と普通名詞の対称表現的な使用を考えてみると、実は、「同じ人物」に対してこの両方を違和感なく使える場合はあまり多くないことがわかる。一般的には、（7）のように固有名詞と普通名詞のどちらかをを用いることが多いと言える。

(7) a. 「山田さんは、この件についてどう思います？」

b. 「（山田）部長は、この件についてどう思います？」

さらに、後に検討する「あなた」などの対称詞まで加えると、この三つは同一人物に対して使用する際、範例関係にならない場合が多いことが見えてくる。これは、鈴木（1973）でも指摘するように、日本語の対称表現の使用には、話し手と聞き手における上下関係が緊密に影響し、社会的上下関係においては、目上の人物を役職名詞で表すことが一般的であり、その際、固有名詞のみの形や対称詞の使用は許されない場

合が多いため、目上の人物には（7b）のように普通名詞の使用によって聞き手を間接的に表していることが考えられる。それに対して、目下の人物を普通名詞で表す場合はやや特殊な場面である可能性が高く、一般的には（7a）のように固有名詞や固有名詞に敬称を付けた形、または「あなた」などの対称詞を用いることが多いと言える。そのため、（8）と（9）のような例文が同一人物に使われるには文脈の説明が必要となる。

（8） a. 「山田（さん）は、この件についてどう思う？」

b. 「（山田）主任は、この件についてどう思う？」

（9） a. 「花子は、週末に外食するの、どう思う？」

b. 「お姉さん・お姉ちゃんは、週末に外食するの、どう思う？」

まず（8）について、ある話し手（目上）が、職場で主任の職位を持つ山田という目下の聞き手に対して、固有名詞と普通名詞を用いる場面だと想定してみる。この時の固有名詞と普通名詞の使用による発話効果を比較してみると、同じ命題において普通名詞を用いた場合は、組織内の主任としての意見を聞いており、固有名詞を用いた場合は、特定の個人としての意見を聞きたいという意図が考えられる。ただし、この中では目下への固有名詞の使用の方がより一般的（無標）であるため、普通名詞を選択すると有標性が際立つことが考えられる。

（9）は、固有名詞と親族関係を表す普通名詞の使用であるが、これは（8）に比べると同一人物に両方を使うことに対する容認度がやや高いと思われる。（9）の例が母による姉妹の中の姉への発話だとすると、ここでの固有名詞の使用は「花子」という個人に対して意見を聞いており、普通名詞の使用は「姉」という家族の中の役割としての意見を聞いていることが考えられる。このことから、固有名詞は固有の個体と

しての人物を表すことに対して、普通名詞はその人物の社会的役割を表すという違いがあると言える。

一方、ここまで「山田先生・山田主任」または「山田お兄さん／お姉さん」など、固有名詞に肩書や親族名詞の普通名詞を付ける場合を見てきたが、この普通名詞が敬称として機能するのかについて考える必要がある。先述のように、「固有名詞＋普通名詞（役職名詞）」の形は目上に対する使用が一般的であるため、基本的には敬称としての機能を帯びていると捉えられるが、それが目下に使われた場合に関しては検討の余地がある。

(10) 浅野：随分と勝手なことをしてくれたものですね、半沢融資課長。

半沢：どういう意味でしょうか？

江島：東田の海外不動産差し押さえの件だ！

浅野：私はそんな報告聞いていませんし、許可した覚えもありませんよ。

半沢：一刻を争う事態でしたので、ご報告が遅れたことはお詫びします。

浅野：結局、国税に持っていかれたら元も子もないですね。

半沢君、そんなに好き勝手やりたいなら、

どこか田舎の小さな会社に出向をお勧めするよ。

そこで自由に伸び伸びやりたまえ。

半沢：せっかくですが、私はこの銀行に骨を埋める所存でおります。

浅野：それを決めるのはきみではない！まあ、明後日の臨店ではせいぜい...

半沢：臨店？ 何の話です？！

江島：寝ぼけるな、半沢！明後日裁量臨店があると言ったろう！

半沢：聞いておりません！しかも明後日とは！

通常、裁量臨店が行われる場合、1週間前後の準備期間があるはずです。

浅野：私はだいぶ前に伝えたはずですよ。

半沢：何かの間違いでは？

浅野：間違えているのはあなたです！

そうやって自分のミスを他人のせいにするのはよくないですねえ、

半沢融資課長！

『半沢直樹』3話

(10) は、銀行が主な舞台となっている日本のテレビドラマの中の発話であり、銀行の支店長である浅野（50代男性）と副支店長の江島（50代男性）が、融資部の課長である半沢（40代男性）に対して上から目線で強圧的な言い方をしている場面である。ここでの固有名詞の「半沢」への「融資課長」の普通名詞の付加は、目下である聞き手の職位を強調して聞き手にそれを自覚させているだけで、敬称の最も基本的な機能である敬意を示しているとは言いにくい。つまり、固有名詞に普通名詞が付く場合、目上への敬称としての使用と、目下への（話し手と聞き手との）社会的上下関係・（聞き手の）社会的役割の強調としての使用が考えられる。鈴木（1973）では、例えば先生が学生を「学生さん」と呼ぶように、目上の人物が目下や同等な人物に対して普通名詞が使えることは、その普通名詞が一種の職業（または資格）名として考えられるためだと述べている。すなわち、目下の聞き手に対して「固有名詞＋普通名詞」の形を用いるのは、聞き手への敬意を示すというよりは、聞き手の社会的役割（属性）を指しているだけだと考えられる。(10) のような場合は、聞き手の職責を強調および認識させるだけの普通名詞の使用であると言える。ただし、(10) の「半沢融資課長」が会議などのような場面で使われた場合には、フォーマリティー（formality）が関与するため、目下の人物への普通名詞の使用による有標性がそれほど際立たない可能性が高い。それに対して、職場での目上の人物への場合はその人物の肩書を敬称として付加し、その人物の社会的役割を表すことによって目上の存在に間接的に触れていると言える。

そこで、敬称のような日本語の対称表現に付加される付属的な成分が、対称表現の中でどのように位置づけられており、その種類にはどのようなものがあるのかを整理する必要がある。また、普通名詞も敬称のように使われることから、「さん・さま」のような形との違いについても検討する余地がある。これらについては、第2章で詳しく論じることにする。なお、「先生」や「議員」という役職名詞は、主に教師と政治家という職業の中で見られる場合が多いが、経歴の差などによる上下関係はあるものの、他の職場に比べてほとんどの構成員が教師や議員という同じ職責を持つため、同僚や目下の人物に対しても比較的自然的に用いることができる普通名詞であり、これらを目下の人物に使っても他の役職名詞に比べて有標性が際立たないと言える。

1.2.3. 対称詞

日本語の対称詞は、相手を指さすことができる点から、直示 (deixis) または現場指示としての性質を持つと言われる。田窪 (1997) では、話し手・聞き手という対話の役割だけが指定されている直示的な語 (その場にあるのを指すこと) であると述べており、そこから固有名詞・普通名詞が記述によってたまたまその発話場面で「田中・課長」に当たる特定の人物を指示対象として決めているのに対し、「わたし・あんた」などは直示行為によって「話し手自身・聞き手」を指示対象として決めているという違いがあると述べている。

- (11) a. 「山田さんは、この件についてどう思う？」
b. 「(山田) 主任は、この件についてどう思う？」
c. 「あなたは、この件についてどう思う？」

上記の (8) の例に対称詞の項目を加えた (11) の例を見ると、同じ人物にこの三つの表現をすべて使用できる場合は先述のように極少なく、学校の教師や政治家

同士における使用の場合でもその中には無標と有標の呼び方があるため、これらは同一人物に対する使用の際、範例関係にはならないと言える。また（11）の対称詞「あなた」の使用は、聞き手の個体としての情報内容を含んでいたり、社会的役割（属性）を表したりするものではなく、会話参加者としての「聞き手性」のみを表すと言える。現代でも使われる対称詞としては「あなた・あんた・きみ・おまえ・（おめえ・てめえ・きさま⁸）・おたく」などが考えられるが、他の言語に比べてその種類が多いため、話し手が聞き手との社会的上下関係、または心理的距離を考慮して適切な表現を選択するということが日本語の対称詞の大きい特徴だと言える。これら以外にも、使用頻度は低い「あなたさま」や、方言差はあるようだが「おまえさん」などの、対称詞に敬称が付いた形も見られる。そこで、敬称の中の「さん・さま」は対称表現の中の主な3種類だといえる固有名詞、普通名詞、対称詞にすべて付加できると言える。

1.2.4. その他の種類と呼びかけ表現

今まで見てきた対称表現以外に、「そちら」などの指示詞が対称表現として使われた場合と、呼びかけ表現としての使用を見ていく。

佐久間（1951）で指摘するように、日本語の対称表現の中には、元々場所を表す空間指示（現場指示）の用法からきたものがよく見られ、代表的には「あなた・そちら」などがある。「そちら」は、現代では指示詞のカテゴリーに含まれており、歴史的には「中称」の「ソ」から由来したと言われている。以下の（12）にあるように、指示詞が単独で対称表現的に使われる場合もあれば、「そちらさま」のように敬称が付いた形や、「そこのお兄さん」、「そのきみ」のように指示詞の「そこ」と普通名詞や対称詞が複合した形も見られる。また、「そっち・そちら・そちらさま」からは待

⁸ 「おめえ・てめえ・きさま」は、対立関係にある者に対して喧嘩や非難をする場合に用いられる場合が多いため、日常で一般的に使用される「あなた・あんた・きみ・おまえ」などとは区別して考える必要があると思われる。これらに関しては、第7章の方で詳しく論じる。

遇度の違いが見られる。「そのの+普通名詞・対称詞」系の表現は、呼びかけ表現として用いられる場合が多く、この場合も「そこ」と「そちら」から待遇度の違いが見られる。

- (12) a. 「そっち・そちら・そちらさま」
b. 「そのの・そっちの・そちらの+普通名詞」
c. 「そのの・そっちの・（そちらの）+対称詞」

呼びかけ表現に関しては、今まで見てきた対称表現が命題の外部に助詞を伴わない形で現れることによって、そのまま呼びかけとして機能する場合が多く、そこから両者からは連続性が見られると言える。なお、先述の「すみません」や「おい」などのように、すべての対称表現と呼びかけ表現が双方に転換可能であるわけではない。本研究では対称表現が主な考察対象となるため、これらの関係については言及に留めるが、今後両者の転換可能有無を整理する必要があると考えている。

一方、呼びかけ表現は先述した鈴木（1973）での「呼格的用法（vocative use）」を持つと言えて、相手の注意を引きたいときや、相手に感情的に訴えたい場合などに用いられるとされている。Leech（1999）では、呼びかけ表現について以下の3つの語用論的機能を持つと述べている⁹。

(13) 呼びかけ表現の語用論的機能（Leech 1999：108）

- (a) to appeal for attention, i.e., making it clear to *H* that he/she is being

⁹ さらに、呼びかけ語の種類として、親愛語（endearments: (my) darling, love, sweetieなど）、親族語（family [kinship] terms: mum(my), dad(dy), ma, pa, grandma, granny, grandpa, granddadなど）、友好語（familiarisers: guys, mate, folks, broなど）、ファーストネーム（first names）、肩書+名字（titles and surname）、敬称（honorifics: sir, madam, ma'amなど）などを挙げている（Leech1999：109－113）。

addressed

(b) to single out the addressee, i.e., making it clear that *H*, and not some other person within earshot, is being addressed

(c) to establish and/or maintain a social relationship with *H*

(a) 注意を引く、すなわち聞き手に、自分が話しかけられていることをはっきりさせる

(b) 発話の受けてを特定する、すなわち話しかけられているのは、話が聞こえている範囲の他の誰でもなく、*H*であることをはっきりさせる

(c) *H*との社会的関係を確立および／または維持する

日本語訳：田中他訳（2020）

先述のように、対称表現はそのまま呼びかけ表現になり得る場合が多いと言えるが、実際の使用を考えてみると、表現の種類によって使用頻度に違いがあると思われる。

(14) a. 「山田さん、この件についてどう思う？」

b. 「（山田）主任、この件についてどう思う？」

c. 「あなた、この件についてどう思う？」

(14) は、(11) の対称表現を呼びかけ表現に変えたものであり、三つとも日常でよく耳にするものと言える。しかし、その中でも頻繁に使われるものは固有名詞と普通名詞である可能性が高く、先ほどの (10) の用例からもそれが確認できる。

(15) 浅野：結局、国税に持っていかれたら元も子もないですね。

半沢君、そんなに好き勝手やりたいなら、

どこか田舎の小さな会社に出向をお勧めするよ。

そこで自由に伸び伸びやりたまえ。

半沢：せっかくですが、私はこの銀行に骨を埋める所存であります。

浅野：それを決めるのはきみではない！まあ、明後日の臨店ではせいぜい…

半沢：臨店？ 何の話です？！

江島：寝ぼけるな、半沢！明後日裁量臨店があると言ったろう！

『半沢直樹』3話（用例（10）一部再掲）

実際の傾向を確認するためには社会言語学的な調査が必要だと思われるものの、（10）と（15）の用例から我々は既知関係の相手に呼びかける場合、まずは個体としての情報内容を表す固有名詞を使って自分が聞き手であることを認識・自覚させて、聞き手の特定が完了してからは命題の中で対称表現として普通名詞や対称詞を用いることが一般的だと考えられる。一方、職場などでの目上の人物を呼ぶ場合には、「部長」などその人物の役職名（普通名詞）を用いる可能性が高い。（10）と（15）の固有名詞による呼びかけが目下の人物への場合であったことを踏まえると、話し手と聞き手における上下関係の中でどの立場にあるのかによって選択できる対称表現の種類が違ってくることが考えられる。これについては、後に詳しく論じることにする。

なお、日本語では「あ、山田さん。」や「あ、先生。」などのように、対称表現を使った呼びかけ自体が一種の挨拶になる場合もよく見られるが、これは広く取って先ほどのLeechによる（13a）の機能に当たると言える。

1.2.5. 対称表現が出現しない場合

以上から、対称表現は命題の中で助詞を伴う形で、命題の文脈と関わる聞き手を指示する（代名詞的用法）場合と、命題の外側に助詞を伴わない形で現れ、主に聞き手を注意を引く呼びかけ（呼格的用法）として機能する場合があると言える。ここでは（1）でも言及した対称表現が出現しない場合について検討する。

「出現しない」こととは、対称表現が形式上は存在するがそれが表には出ない場合と、対称表現を意図的に出現させない場合を両方とも含んでいる。生成文法では、前者を「ゼロ化」、後者を「省略」として区別しているが、ここでは話し手の「意図」と深く関わる場合を中心に検討する。

日本語記述文法研究会（2009）では、省略を「文法上必要とされる格成分を発話から省くことで指示が行われること」と定義する。さらに、省略には、一定の条件を満たすものがほぼ義務的に省略される義務的省略と、前後の言語文脈から復元可能な格成分が省略される言語文脈による省略があると述べている。そして、会話参加者である聞き手が省略されるのは義務的省略の場合が多く、（16）から（18）の例文に見られるように命令・禁止といった聞き手に働きかける行為要求表現や、授受表現、敬語の尊敬表現などがあり、文脈が特定されていなければ省略された格成分の指示対象は聞き手と解釈されると説明する。つまり、日本語の対称表現の義務的省略は、その条件下では省略された形が無標であると言える。一方、我々の日常のやり取りの中では、（19）のように文脈によって省略された内容が復元きでる場合での聞き手の省略もよく見られる。

（16）「（Øは）夏休みの宿題は早めに終わらせなさい。」（命令）

（17）「（Øが）ケーキ買ってきてくれて、ありがとう。」（授受）

（18）「（Øは）何時ごろ我が家にいらっしゃいますか。」（尊敬）

（日本語記述文法研究会2009：44）

（19）出版社の編集部を希望していた聞き手が校閲部に採用された理由を説明しながら、
聞き手の採用を決めたのは校閲部の部長である自分だと説明する場面
「私が、（Øを）取ったんです。」

『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子』1話

澤田（2020：155）では、類型論学的に日本語は代名詞脱落言語（pro-drop language, Fillmore1986：65）に部類され、省略（ゼロ代名詞化）の多い言語として知られているが、日本語の中には、指示追跡機能を果たす様々な言語装置が組み込まれており、省略された参加者を特定する手がかりが用意されていると説明する。対称表現が出現しないことによってどのような機能があるのかを確認するため、以下には上記の例文の対称表現を復元してみる。

(20) 「#¹⁰あなたは夏休みの宿題は早めに終わらせなさい。」

(21) 「*山田さんがケーキ買ってきてくれて、ありがとう。」

(22) 「先生は何時ごろ我が家にいらっしゃいますか。」

(23) 「私が、あなたを取ったんです。」

(20) から (22) までは、元々省略された方が無標である対称表現を一々使っていて、くどい感じを与える。特に (22) に関しては、鈴木（1973）や滝浦（2013）などでも説明するように、聞き手（特に目上）について触れることに対するタブーの文化が過去からあり、それが現代でも残存している日本語の敬語システムでは、間接性が欠けることになって失礼になる可能性が高い。ただし (21) の場合は、省略された部分が顕在すると非文になるため、対称表現を用いるとするならば「山田さん、ケーキ買ってきてくれて、ありがとう。」のように命題の外側に現れることになる。一方、(23) での対称表現の使用は義務的省略ではないため、他の場合に比べてそれほどしつこい感じはしないが、命題の内容自体がすでに恩着せがましく感じられる可能性が高く、そこにわざわざ対称表現を明示することによって、聞き手の採用に自分の社会的地位を使ったことを述べるのは、自分側の方に地位と恩恵があると解釈される可能

¹⁰ 文法的に間違っていないが、語用論的に不自然だと判断されるものは「#」の記号で示している。

性が高い。そこで、(19)での省略は、文脈上対称表現の出現が必須ではないという理由もあれば、聞き手への恩恵による負担を軽減するため、対称表現を意図的に省略しているとも考えられる。これは、聞き手に遠慮した間接化の戦略として考えられる。

このことから、日本語の対称表現が出現しない一つの理由として、特に文脈上の省略の場合、対称表現の使用による有標性を避け、聞き手に直接触れない間接化の機能を持つと言える。また、このように対称表現が出現しない場合には、対称表現の種類による違いが著しく見られるとは言いにくくなる。

1.3. 対称表現の選択可能範囲

最後に、話し手と聞き手との関係による対称表現の選択可能範囲について考察する。対称表現の選択可能範囲とは、話し手が聞き手に対して「実際に」使用できる対称表現の選択肢だと考えることができる。1.2.4節で、呼びかけ表現として主に固有名詞を用いるのは目上から目下へ、普通名詞を用いるのは目下から目上への場合が見られると言及した。そこで、教師と生徒、上司と部下のような「社会的上下関係」の観点から、規範として選択できる対称表現がどのように異なるのかを考察する。もちろん、人間関係の中には社会的上下関係だけではなく、親疎関係や恩恵関係など考慮すべき要素は数多くあるが、「選択できる」対称表現がどのように違うのかを考察するためには、それが一般的な選択、すなわち「規範」に基づいたものである必要がある。したがって、ここではまず日本社会の規範に基づいた対称表現の選択可能なパターンを整理すると理解されたい。なお、社会的上下関係には親子といった家族関係における上下もあるが、家族という集団は対称表現の選択に個体差が見られることが予想されるため、ここでは除外することにする。上記の目上と目下における固有名詞と普通名詞の選択に対称詞を加えると、一般的には以下のような対称表現の選択肢が考えられ

る。

(24) 社会的上下関係から見た日本語の対称表現の選択可能範囲

- a. 目上が目下に使用できる対称表現：固有名詞（＋敬称）、対称詞、（普通名詞）
- b. 目下が目上に使用できる対称表現：普通名詞、固有名詞＋敬称・肩書
- c. 同等者の間で使用できる対称表現：固有名詞（＋敬称）、対称詞、（普通名詞）

まず、(24a) の目上は目下の人物に対して固有名詞、対称詞が選択できる。固有名詞の場合、名字と名前の部分を区別したり、敬称が付加された形などをすべて区別することになると、選択肢がより膨大になると言えるが、ここではとりあえず固有名詞という同じカテゴリーとして考える。なお、もし家族関係を考慮するのであれば先述の「お兄ちゃん、弟には優しくしなきゃ」の例のように、目上（親）による目下（子供）への普通名詞の使用が可能になるが、職場の場合では「先生・議員」のような特殊な例を除けば目下に対して普通名詞を単独で用いることが考えにくいと言える。

それに対して、(24b) の目下が目上に対称表現を使うときには、目上の役職名を表す普通名詞を用いることが最も一般的で、固有名詞を使うことになると敬称の付加が義務付けられると言える。対称詞は直示の用法を持つため、一般的には目上の人物には用いられないことが考えられる。

(24c) は同僚や友人のような同等者間における対称表現の使用であり、お互い固有名詞または対称詞が選択できる。もし、職場での同僚や似たような職級を持つ者同士であったらお互いを役職名の普通名詞で呼ぶことも可能であるかもしれないが、一般的な使用ではないと言える。このように整理してみると、対称表現の主な種類である固有名詞、普通名詞、対称詞を同じ人物に対してすべて使える場合は考えにくく、社会的上下関係のどの位置にあるのかによって選択肢が違ってくることが見られる。

関連する先行研究として、日本語の聞き手指示方法の選択ストラテジーを考察した

大高（1999）がある。大高（1999）では、聞き手指示方法の選択における第一次的な判断基準として、話し手と聞き手との人間関係を挙げている。さらに、人間関係を友好関係か対敵関係かに分けているが、この友好関係に未知の相手も含まれている点から、「親しい間柄」を指すよりは、常識や規範としての言葉遣いが適用される関係だと言える。この友好関係はさらに私的組織（家族）と公的組織（学校・会社など）に分けられて、私的組織内では、相手が目上の場合「お父さん」のような親族名を使って、目下の場合には名前を呼び捨てにするか対称詞の「あなた・おまえ」を使うとしている。公的組織内では、相手が目上の場合「社長」のような役職名を使って、目下の場合には基本的に「名前＋さん」を使って、親愛表現として「名前＋くん」または対称詞の「あなた・きみ」を使うとしている。また、組織外関係の場合には相手の名前を知っているかいないかを判断し、知らない場合のみ対称詞を使うようにしている。最後に、対敵関係では意図的に「きさま・てめえ・あんた」が選択されるとしており、対称表現の選択戦略として、以下のように示している。

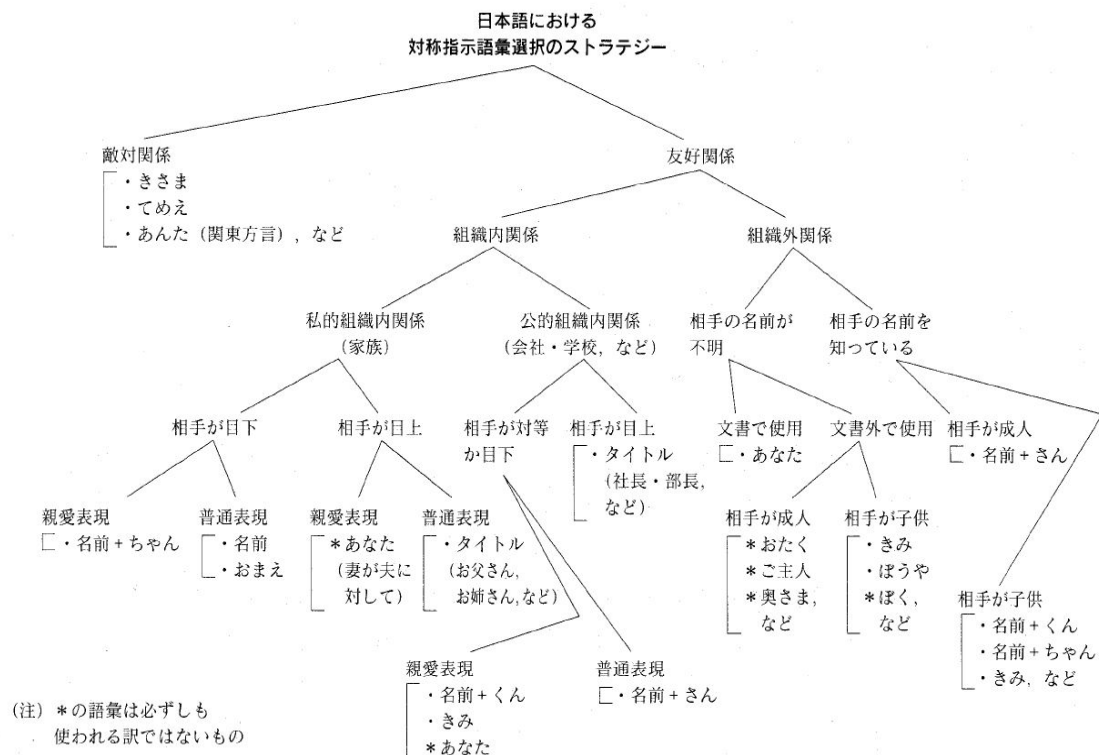


図 4 大高 (1999) による聞き手指示方法選択のストラテジー

図4からも、規範的な対称表現の選択を行うという前提から見ると、日本語の対称表現を選択する際に大きく関わる要素は上下関係であることが確認できて、上下のどの立場に置かれているのかによって、選択できる対称表現の範囲の違いが生じることになる。そして、この選択可能範囲は、日本語の対称表現の選択における規範のようなものであるため、もし話し手が選択可能範囲に属しない表現を選択する場合には、有標の言葉遣いをするることになり、そこには何らかの意図があると言える。

1.4. 第1章のまとめ

本章では、発話の中の聞き手を指す指示的形式を「対称表現」と定義し、従来の用

語との違いに触れながら用語の適切性について論じた。また、日本語には人称という文法範疇がないことから、「あなた」などの語類を指す用語として従来の人称代名詞の代わりに「対称詞」を使用している。一方、日本語の対称表現の主な種類として、固有名詞、普通名詞、対称詞が見られることを確認し、以下のように各表現の特徴を検討した。

- 1) 固有名詞：個体としての聞き手の「情報内容」を表す。
- 2) 普通名詞（親族&役職名詞）：聞き手の「役割性」を間接的に表す。
- 3) 対称詞：会話参加者としての「聞き手性（直示）」を表す。
- 4) 指示詞：空間指示が対称指示的に使われたもの。
- 5) 呼びかけ表現：対称表現が呼びかけとして機能する場合。

発話の外側に現れ、談話単位の文脈と関わる。

対称詞に関して一つ追記しておく、日本語の対称詞の中には「きさま・てめえ・おめえ」のように形式自体が相手への攻撃となるインポライトネスとしてのものもあれば、「あんた・おまえ」のように形式自体がインポライトネスとはいえないが、そのような文脈での使用によって相手への攻撃を表す発話内容をより「強化」させるものもあると言える。後者は対称詞におけるインポライトネスの文脈でのアドホック（ad hoc）の用法として考えることが合理的だと言えて、これらについては第7章で詳しく論じたいと思う。

さらに、呼びかけ表現と関連するものとして、対称表現の出現位置や出現有無による機能の違いについても考察を行った。最後に、使用者の属性（社会的上下関係）による対称表現の選択可能範囲を整理し、固有名詞と普通名詞、そして対称詞が同じ聞き手に対して使える範例関係にはならないことが確認できた。

第2章 対称表現と付属的成分

第2章では、日本語の対称表現と関わる諸要素について検討を行う。主に、対称表現の付属成分として付加される敬称と複数形成分を中心に各特徴を検討し、日本語の対称表現における各成分の位置づけを明らかにする。敬称の中には、「さん・さま」のような形のものと、「先生」のように普通名詞（肩書）が敬称の機能を帯びるものが見られるが、それらの違いについても考察を行う。そして、第1章で検討した対称表現の種類に、この付属的成分を加えて日本語の対称表現の分類を試みる。

2.1. 対称表現における敬称の機能と位置づけ

ここでは、対称表現に「ちゃん・くん・さん・さま」などの敬称が付く場合と、普通名詞が肩書として付く場合を比較検討し、対称表現における敬称の位置づけを考える。

まず、対称表現の種類による敬称と普通名詞（肩書）の付加可能有無を比較する。固有名詞には、敬称と肩書としての普通名詞の両方を付けることができる。これらは主に名字の方に付く場合が多いが、敬称の中の「ちゃん・くん・さん」は、名前の方にも付くことができ、特に「ちゃん」においては、子供に対して親しみを込めて付ける場合が多いため名前の方に付く場合が多い。「くん」の場合も男児に対して親しみを表す場合に使うことができるが、最近はジェンダーとの関わりもあって子供に対しては使用を避ける傾向も見られるようである。固有名詞と敬称・普通名詞との組み合わせの種類を以下のように整理できる。

(25) 固有名詞＋敬称：「山田（ちゃん）・くん・さん・さま」

「薫ちゃん・くん・さん」など

(26) 固有名詞＋親族名詞：「山田お兄さん・お姉さん」

「薫お兄さん・お姉さん」など

(27) 固有名詞＋役職名詞：「山田先生・先輩・部長」

「薫先生・先輩・（部長）」など

ここで、敬称と普通名詞の品詞的違いを確認すると、敬称が自立性がない付属語としての振る舞いを見せるのに対して、普通名詞は単独でも付属的にも使えるという相違点がある。また、使用対象と待遇度という側面から見ると、敬称は形式から待遇度の違いが見られ、「ちゃん」においては聞き手への親しみを表すのに対して、「さん・さま」からは聞き手への敬意が読み取れると言える。ただし、「さん」に関しては「さま」と比べると親しみが感じられるとも考えられる。一方、「くん」は「ちゃん」と比べてフォーマリティと関わるため、公的な場面や改まった場でも多用されるが、「さん・さま」のように相手に敬意を示すとは言いにくい。

また、両者の使用様相を考えると、目上と目下がお互いを「固有名詞＋敬称」の形で呼び合う場合もある。その一方、「先輩・課長」などの普通名詞は、目上の人物に対する使用が一般的であり、固有名詞が省略された単独の形でもよく使われる。以下の文化庁（2016）による調査結果（図5）からも、対称表現としての普通名詞の使用は目上の人物への無標の呼び方であることが確認できる。そして、無標の呼び方であるからこそ高い敬意を示すとは言いにくが、使用の際に話し手が聞き手の（自分より上だという）社会的位置を認識しており、両者における社会的上下関係を明示していると考えられる。

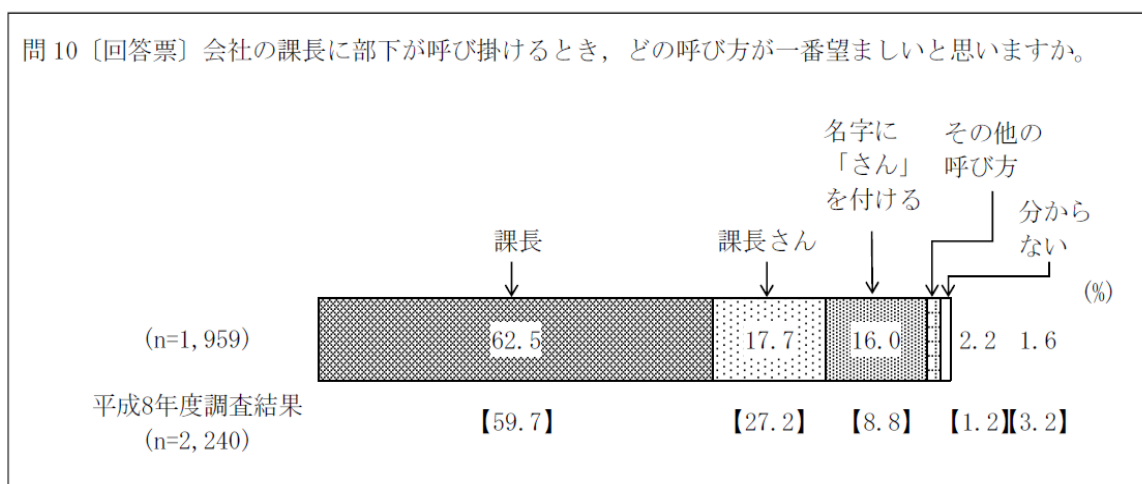


図 5 平成27年度「国語に関する世論調査」問10の調査結果

小林（2016a）では、固有名詞に敬称が付いた形の呼称についても触れており、以下の表3のようにまとめている。表3から、日常と職場という場の違いがある場合、固有名詞に敬称が付くバリエーションは日常の方が豊富であり、職場では「名字＋さん」の形が無標であることがわかる。

表 3 日本語の呼称の出現数：「固有名詞＋敬称」（小林2016a：27）

	姓 さま	姓 さん	姓 くん	姓 ちゃん	姓 呼捨	名 さん	名 くん	名 ちゃん	名 呼捨	愛称	合計
日常	1 ¹¹	40	1	3	8	9	5	43	41	9	161
職場	0	229	16	20	8	5	1	7	0	6	292

一方、普通名詞の中でも先ほどの（26）のように親族名詞が付く場合は、話し手と実際に親族関係にある年上の人物だけではなく、既知関係にある年上の人物への使用も可能である。ただし、どの関係であれ、固有名詞が含まれているため「おじいさ

¹¹ 店の店員の顧客に対する呼称である（小林2016）。

ん・おばあさん」や「お父さん・お母さん」は使いにくく、兄と姉のことを表す親族名詞に限られる場合が多いと考えられる。そして、兄と姉のことを表す親族名詞のバリエーションとしては、「お兄さん・兄さん・お兄ちゃん・兄ちゃん」と「お姉さん・姉さん・お姉ちゃん・姉ちゃん」などが考えられるが、これらの形から親族名詞にも接頭辞の「お」と、敬称の「さん」と「ちゃん」が付いていることがわかる。現代ではこの形が一つのまとまりとなっているため、複数の敬語的要素に比例して高い敬意を示すとは言いにくい。(27)のような役職名詞が付く場合は、主に名字に付き、第1章でも触れたように先生から見た「学生・生徒」や社長から見た「課長・主任」などの目下の肩書を付けることは一般的ではないと言える。

次に、(28)と(29)のような、普通名詞に敬称が付く場合を見てみる。これらの例からもわかるように、この組み合わせは一つのまとまりとしての使用が多く、慣習化された形として扱うことができる。そのため、日常のやり取りの中では以下の形が無標の選択になり、そこから「さん」の敬称を取ってしまうと有標の形になるため、失礼な呼び方になる可能性が高い。

(28) 「お巡りさん・お医者さん・看護師さん・患者さん／患者さま

店員さん・お客さん／お客さま・奥さん／奥さま」など

(29) 「おじいさん・おばあさん・お父さん・お母さん・お兄さん・お姉さん」など

また、敬称だけではなく、接頭語の「お」が付いた形までが無標である場合も多い。これは、敬意を示す要素が複数見られるとも言えるが、そのような要素の数と敬意が比例するとは言いにくく、先述のように一つの慣習化された形だと考えた方が実際の使用にも当てはまる。(28)と(29)の使用対象を考えると、見ず知らずの相手や店員と顧客のような一時的に形成された関係での使用が想定される。特に(28)においては、医者と患者、店員と顧客という関係は長期的に見ると関係が発展して既知

関係になる可能性もあるが、(29)の場合は、見ず知らずの相手に道を尋ねたり、不特定多数の人に対してインタビューをしたりする、(28)よりは関係の持続・発展可能性が低い相手に対して用いる場合が多いと考えられる。(29)は、第1章の普通名詞の方でも触れたように、実の血縁関係ではない相手に対する親族名詞の「虚構的用法」として使われた場合だと言える。この場合も敬称を付けることによって敬意を示すというよりは、自分の目線からみた家族関係の名称を使うことによって、相手に親しく話しかけるという意図が考えられる。また、これは話し手が聞き手のことを自分から見てどの「属性」で位置づけているのかが確認できるとも言える。

最後に、「あなた・あんた・きみ・おまえ」などの対称詞に敬称が付く場合であるが、(30)のようにその数は極少なく、使用頻度も乏しい方であり、使用においても地域差や年齢差が見られる。ただし、そのように対称詞はどちらかというとき単独の形で使用が無標であるため、普通名詞の場合に比べて敬称を付加することによって有標性が高まり、相手への敬意表示がより明確になると言える。

(30) 「あなたさま・あんたさん・おまえさん」など

第1章の図3では、聞き手に対する表現として「あなたさま・おたくさま」が見られたが、指示詞に敬称が付いた「そちらさま」まで一緒に見ると、主に6～70代以上の年代で使用率が高いと報告されている(文化庁2016: 70)。興味深いことは、「あなたさま」においては20代による使用が70代以上よりも多く見られる(文化庁2016: 71)。これは、一種の「過剰な丁寧化」として考えることができ、二重敬語・過剰敬語がよく見られる近年の社会的な流れが反映されたとも考えられる。似たようなものとして、近頃「患者さん」より「患者さま」が多用される現象も関連して考えられる。

一方、野元(2019)では、McCready(2019)による代名詞代用語(pronoun sub

stitute, 話し手・聞き手を指示する人称代名詞以外の語：野元2019) の分析を参考し、以下のように代名詞代用語になりやすい階層があることを指摘する。

(31) 代名詞代用語になりやすさの階層 (野元2019 : 488)

①固有名詞, ②固有名詞+敬称 > ③普通名詞, ④普通名詞+敬称 > ⑤敬称

そして、日本語の普通名詞には「先生」のように敬称の意味が内在しているもの(③)があり、「店員」のように普通名詞だけでは代名詞代用語になれない語(④)でも、敬称の「さん」を付ければ代名詞代用語になれると説明する¹²。このことから、本研究では敬称には「敬意を示す」という機能に加え、付属語として聞き手という役割を与える「直示性(指示性)の付与(または強化)」の機能があると考えられる。そこで、敬称と肩書としての普通名詞との違いについて、以下のようにまとめることができる。

表 4 敬称と肩書としての普通名詞の比較

	敬称	普通名詞(肩書)
自律性	×	○
敬意の表示	○	○
待遇度の調整	○	×
直示性(指示性)の付与	○	×

以上、対称表現に敬称と普通名詞が付く場合を比較した。そこから、本研究での対称表現において、敬称は付属成分として聞き手への敬意を示す機能を持つ一方、「ち

¹² ただし、「教師」のように「さん」を付けても代名詞代用語として使えないものもある。野元(2019)では、これについて類義語の「先生」の存在による阻止効果の可能性もあると述べている。

ゃん・くん・さん・さま」のようなバリエーションからの選択ができるため、待遇度を調整することもできると言える。さらに、普通名詞を対称表現化できる点（例：店員 → 店員さん）から、直示性（指示性）を付与する役割を担うと位置付けることができる。

なお、敬称と関わる付属成分として、「なんか・ごとき」などの表現がある。「さん・さま」の敬称が聞き手への敬意を示すポライトネスとしての使用であるのに対して、これらは相手への攻撃となるインポライトネスを強化するための使用であると考えられる。ここでは言及の段階に留めるが、（イン）ポライトネス理論の観点から対称表現を考察する際にまた触れることにする（第5・7章）。

2.2. 対称表現の複数形

次に、対称表現に付属して複数の意味を表す成分について検討する。田窪（1997）では、聞き手を指す表現の中で複数形を持つのは対称詞のみであり、固有名詞や普通名詞に「たち」などの複数の意味を表す成分を付けたものは、対称表現としては機能しないとしている。その場合の「たち」の意味解釈として、それが付いた固有名詞や普通名詞の指示対象を代表とするグループを表すのみであるため、それが聞き手に直接話しかける対称表現としては機能しにくいと説明する。それに対して、対称詞は「たち」を付けることで複数性を表すことができるとしており、例えば「きみたち」は、特定の聞き手である「きみ」に代表されるグループではなく、複数の聞き手を表すことも可能であると説明する。これは、2.1節で考察した敬称と比べて、聞き手を表すという直示性（指示性）を弱めているとも言える。また、「たち」以外に「ら」「方」などの形式もあり、以下の（32）のように共起する文体の違いが考えられるため、「たり・ら」と「方」においては待遇度の違いがあると言える。

(32) a. 「きみらはどこから来たの？／（来たんですか？）／

（どちらからいらっしゃいましたか？）」

b. 「きみたちはどこから来たの？／来たんですか？／

（どちらからいらっしゃいましたか？）」

c. 「あなた方はどこから来たんですか？／

どちらからいらっしゃいましたか？／（どこから来たの？）」

この「待遇度」と関連するものとして、本章での論点と完全に一致するとは言いきれないが、「T・V代名詞」にも触れておく。T・V代名詞は、文法範疇としての人称を持つ言語の中の人称代名詞において、二人称単数の形が二つ見られる言語現象であり、フランス語の「tu」と「vous」、ドイツ語の「du」と「Sie」が代表的な例だと言える。二人称単数の二つの形とは、親称と尊称としての形の対立であり、フランス語の「tu」と「vous」の頭文字をとって、T・V代名詞と呼ばれる。尊称としてのV代名詞は、本来二人称単数の形ではない、二人称複数形や三人称(単数・複数)からの転用であり、Brown&Levinson (1987) では、なぜ複数形が敬称としての形になったのかについて、ポライトネス理論の観点から二人称による呼称が直示という強い指示性を持つことにより、親密ではない相手や目上の人物などに対する場合には、失礼になる可能性が高いため、そのような場合での間接的な指示を求めた結果、V代名詞が発達したと解釈する。加藤 (2001) では、聞き手に対して二人称複数形を使うことで丁寧な言い方になり、ここで重要なことは、敬意のある言い方は「距離を置く¹³言い方」になることであると説明する。それに対して、フランス語の「tu」などのようなT代名詞は、敬意のない言い方である一方、「親しみを込めた言い方」になる

¹³ 「距離を置く」こととは、ポライトネス理論での「表敬：Give deference」として考えられる。

と述べている。つまり、これらは単数と複数の対立によって、「距離を置く」または「距離を縮める」といった対人距離の調整が見られると言える。

現代の日本語の中では、単数の対称を表す対称表現からTとVの対立が著しく見られるものがあるとは言いきれないが、似たようなものとして、「あなた」と「お宅」の対立が考えられる。両方とも単数の聞き手を指すが、「お宅」は家を丁寧に表した「あなたの家」という意味を含んでいる。そのため、「あなた」に比べて間接性を帯びることになり、より敬意を表すことができる。また、「お宅」に対応する自称として「うち」が考えられる。「お宅」が「あなたの家」という意味を含む対称であるのに対して、「うち」は「私の家」の意味を含む単数の自称だと言える。両方とも「家」という意味を含むことから、これらは単数を指すものの、「集団vs集団」という対立が見られることになる。そしてこれは、異なる集団としての自分と相手（聞き手）を指すとも言えて、V代名詞と関連する自称と対称の対立として考えられる。また、「うち」と「お宅」はそれぞれ複数を表す成分の「ら」を付加することができる。小林（2016b：54－55）では、「うちら」の使用について、もともと人ではなく場所（「家」「内」）を表した「うち」を自称とする曖昧さと、「ら」に含まれる謙遜によって、自分を含む複数者の中で自分を代表として取り立てる意が弱いと解釈している。「お宅ら」も関連付けて考えてみると、相手の家という集団の意味にさらに「ら」で複数の意味を与えることによって、特定の聞き手を取り立てないという意図が考えられる。

もちろん、「うち」と「お宅」の使用実態から、使用者の性別や年齢、フォーマリティーなどの差が見られるため（例えば、「うち」は比較的若い世代による使用が見られる一方、「お宅」は中年以上の世代による使用が見られるという傾向がある）、これらを完全なるペアとは言いきれないかもしれないが、このような言語現象は、日本語でも複数形を使った単数の指示ができることと、それによる対人距離の調整が見られることを示唆していると言える。

2.3. 本研究における対称表現の分類

本章と第1章で考察した内容を踏まえ、本研究における日本語の対称表現の種類とその特徴をまとめる。

(33) 本研究における対称表現の種類と特徴

- 1) 固有名詞：個体としての聞き手の「情報内容」を表す。
- 2) 普通名詞（親族&役職名詞）：聞き手の「社会的役割性」を間接的に表す。
- 3) 対称詞：会話参加者としての「聞き手性」を表す。
- 4) 指示詞：空間指示が対称指示的に使われたもの。
- 5) 呼びかけ表現：対称表現が呼びかけとして機能する場合。

助詞を伴わない形で発話の外側に現れ、談話単位の文脈と関わる。

6) 付属成分

- ①敬称：対称表現に付属され、聞き手に対する敬意を示す。

直示性（指示性）を付与・強化する。

- ②普通名詞（肩書）：固有名詞に付属され、話し手と聞き手との社会的関係を表す。

目上の人物への使用では、敬称としての機能が見られる。

- ③複数の意味を表す成分（「たち・ら・方」など）：対称表現に付属され、複数の意味を表す。直示性（指示性）を弱める。

これらを参考に日本語の対称表現を分類すると、以下の表5のように示すことができる。

表 5 本研究における日本語の対称表現の分類と特徴

日本語の 対称表現	対称表現の種類	特徴
	固有名詞	個体としての聞き手の情報内容を表す
	普通名詞 (親族名詞・役職名詞)	聞き手の社会的役割性を間接的に指示
	対称詞	会話参加者としての聞き手性の指示
	指示詞	空間指示の対称表現的使用
	呼びかけ表現	対称表現との連続性が見られる 談話単位の文脈と関わる
	付属成分 (敬称, 普通名詞, 複数の意味を表す成分)	敬称：聞き手に対する敬意の表示 直示性を付与・強化する 普通名詞：話し手と聞き手の社会的関係の表示 敬称としての機能も見られる 複数の意味を表す成分：複数の意味を表示 直示性を弱化する

日本語の対称表現には固有名詞、普通名詞、対称詞という主な種類の形式が存在し、それぞれ固有名詞は個体としての聞き手の情報内容を表すため聞き手が特定できるという特徴がある。普通名詞は、形式だけで個人を特定することはできないが、家族名や役職名という名称からわかるように聞き手の社会的役割を表していると言える。対称詞は、発話や会話の中で聞き手としての役割を表す直示の表現として理解できる。これら以外には、場所や方向を指す指示詞が対称表現的に使われる場合が考えられる。そして、これらの対称表現が命題の外部に助詞を伴わない形で出現すると、呼びかけとして機能すると言える。

一方、本章の主な考察対象であった対称表現に付加される付属的成分としては、「さん・さま」のような敬称、肩書としての普通名詞、対称表現の複数形を作る「た

ち・ら・方」などの成分が見られる。敬称と付属成分としての普通名詞は、上向的に使われると聞き手への敬意を示す機能を帯びるが、下降的に使われると敬意を示す機能が薄くなり、敬称の場合は聞き手としての直示性（指示性）をより強化させて、普通名詞の場合は聞き手の職級という情報内容を示すため、聞き手において自分が指示対象であることを認識・自覚させる機能があると言える。最後に、対称表現の複数形は単数形に比べて聞き手の特定が難しくなるため、敬称とは反対に聞き手としての直示性（指示性）が弱化すると言える。

2.4. 第2章のまとめ

本章では、日本語の対称表現に付属する成分を中心に検討し、以下のように本研究における対称表現の分類を試みた。

- 1) 固有名詞：個体としての聞き手の「情報内容」を表す。
- 2) 普通名詞（親族&役職名詞）：聞き手の「社会的役割性」を間接的に表す。
- 3) 対称詞：会話参加者としての「聞き手性」を表す。
- 4) 指示詞：空間指示が対称指示的に使われたもの。
- 5) 呼びかけ表現：対称表現が呼びかけとして機能する場合。

助詞を伴わない形で発話の外側に現れ、談話単位の文脈と関わる。

6) 付属成分

- ①敬称：対称表現に付属され、聞き手に対する敬意を示す。

直示性（指示性）を付与・強化する。

- ②普通名詞（肩書）：固有名詞に付属され、話し手と聞き手との社会的関係を表す。

目上の人物への使用では、敬称としての機能が見られる。

- ③複数の意味を表す成分（「たち・ら・方」など）：対称表現に付属され、複数の

意味を表す。直示性（指示性）を弱める。

この分類が日本語の対称表現のすべてを反映しているとは言いにくいかもしれないが、日本語の対称表現の使用実態に基づき、その使用頻度が最も高い固有名詞、普通名詞、対称詞の特徴を整理し、従来の研究ではあまり言及されなかった付属的成分の特徴の違いに関する考察が反映されているところが、この分類の意義として考えられる。

付属的成分としては、「さん・くん」のような敬称と肩書としての普通名詞における違いを比較考察し、対称表現において敬称は付属成分として聞き手への敬意を示す機能を持つ一方、「ちゃん・くん・さん・さま」のようなバリエーションからの選択ができるため、待遇度が調整できることを確認した。さらに、普通名詞を対称表現化できる点（例：店員 → 店員さん）から、直示性（指示性）を付与する役割を担うと位置づけている。それに対して、普通名詞は目上の人物に対する使用が一般的であり、使用の際に話し手が聞き手の（自分より上だという）社会的位置を認識しており、両者における社会的上下関係を明示するという特徴がある。

また、複数の意味を表す成分を整理し、関連する現象としてT・V代名詞に触れ、日本語の「うち」と「お宅」などの形式から、日本語も複数形を使った単数の指示ができることと、それによる対人距離の調整が見られることを指摘した。

第2部 日本語の対称詞の 選択動機に関する考察

第3章 対称詞の選択に関わる要素

第3章では、日本語の対称詞の選択に関わる社会語用論的要素を検討する。日本語は他の言語に比べて対称詞の種類が多い方であるため、各表現の選択動機を明らかにする必要があるが、本格的な考察に先立ち、ここでは対称詞の各表現を選択する際に考慮すべき要素をまとめる。また、対称詞の種類によって選択に関わる要素がどのように違ってくるのかを検討し、対称詞の中に見られる階層を考察する。

3.1. 規範としての要素：外的要因

まず、対称詞の選択に関わる要素のうち、話し手と聞き手が属する社会や集団の中の構成員が、規範として共有しているものについて検討する。加藤（2006）では、日本語における自称・対称・他称は、多くの表現の中から場面にふさわしいものが選択される「語彙的な要素」であり、その選択には社会言語学的な制約（性別・年齢・地域など）がかかり、また、運用上の判断（場面・人間関係・表現意図など）が関わると説明している。前者は、表現の使用や選択における規則までとは言えないが、言葉遣いにおける一種の「規範（norm）」として働くものだと言える。対称詞の選択と関連付けて考えてみると、第1章でも見てきた小林（2016a）では、対称詞の使用におけるステレオタイプを表6のように示しているが、これらは対称詞を選択する際に考慮すべき要素、つまり対称詞の使用における「規範」として理解することができる。

表 6 小林（2016a：18）による日本語の対称詞のステレオタイプ

対称	話者	対者	共起話体	対応する自称	語（を含む文）のイメージ
あなた	女・男	同等以下	敬・常体	わたし・ぼく	やや親しい／あらたまり
あんた	女・男	同等以下	常体	あたし・おれ	親しい／ぞんざい・気軽
おまえ	男・ (女)	同等以下	常体	おれ・(わたし)	親しい／上から下へ
きみ	男	同等以下	敬・常体	ぼく	やや親しい／とりすまし

これらの先行研究で挙げている規範的要素としては、話し手の性別、年齢、地域、そして話し手と聞き手における人間関係（社会的関係）が確認できる。これらの特徴としては、話し手自身がその要素を自由にコントロールすることが容易ではないという点がある。話し手の物理的性別や年齢、地域（出身地・居住地など）は、話し手自身の属性ではあるものの、生まれた時から話し手が属する社会の基準によって「固定」される要素だと言える。そこで、話し手によるコントロールの可能性が低く、すでに固定されている規範的な要素を対称詞の選択に関わる「外的要因」と呼ぶことにする。

外的要因のうち、性別に関する説明を少し加えたいが、近年は物理的な性を超えて社会的に学習していく性（性役割）としての「ジェンダー」が言葉遣いに大きく影響するようになっている。その代表的な現象が女性による自称詞「おれ」や対称詞「おまえ」の使用だと言えて、日本語の言葉遣いにおける規範やステレオタイプの観点から見ると、女性による「おれ」や「おまえ」の使用は男性による使用に比べてその有標性が際立つことになる。しかし、このような使用からは、有標な言葉遣いをするこ
とによるリスク（例えば、集団の中で目立ってしまう）や、話し手が物理的に固定されている自分の属性（性別）より、「おれ」や「おまえ」を使うことによって表現できる自分のアイデンティティーやキャラクターの方を強調したいという、強い「表現意図」が読み取れる。つまり、ジェンダーと言言葉遣いとの関係においては、話し手の

表現意図が規範より強く作用している可能性が高いと言える。そのため、ここでは物理的性別のみを規範的要素として扱い、ジェンダーは話し手の表現意図と関わる要素として考えることにする。

一方、表6では年齢に関する言及がないが、対称詞の使用に年齢の制約が全くないとは言いにくい。表6の対称詞すべてを違和感なく使用できる話し手の年齢を考えてみると、こどもや10代の学生よりは、「大人」が使う形式であることが思い浮かんでくる。また、そのようなステレオタイプが強く働くのは「あなた」だと言える。「あんた・おまえ」は10代が友人に対して使っても珍しい方ではないが、「あなた・きみ」の場合「あんた・おまえ」に比べると使用頻度が著しく下がることが予想できる。これは、日本語の対称詞の使用対象が目下の人物であることからその理由が見えてくる。10代は主に学校での生活が中心となるが、そこでは同等な立場である学生同士の関係や生活がメインとなって、自分より目下の人物となると後輩や年下の人物程度に限られる。そのため、対称詞を使う機会自体が大人に比べて少ないと言える。

また、表6の「語（を含む文）のイメージ」から確認できるように、「あんた・おまえ」は親しい間柄の人物に使うことができる点から、遠慮の要らない友人に対して使えることになる。しかし、「あなた・きみ」は親しい友人に使うには距離感を与えることになる。さらに、敬体と共起する点から、「あんた・おまえ」に比べるとフォーマルな形式であるとも言える。そのため、学校のクラスメイトに使うには硬い形式であるという制約が生じるため、10代における使用は一般的ではないと言える。それに対して、大学に進学したり社会人になった場合には、疎の関係にある人物やビジネスの相手など、形式的でお互い遠慮しなければならない関係の人物が増えてくる。さらに、社会人になってからは自分より目下の人物の存在が徐々に増えることになるため、同等以下の相手に対してすべての対称詞が使えるようになる。つまり、年齢の増加とともに人間関係が広がり、自然に使用できる対称詞の範囲が増えていくと言えるため、性別に加えて対称詞の選択に関わる重要な外的要因として位置づけることができる。

一方、社会の中で形成される話し手と聞き手における人間関係は、大きく上下関係と親疎関係に分けられる。その中で話し手によるコントロールが容易ではない、社会的に固定されている方は上下関係だと言える。上下関係の中には、親子のような家族における上下関係と、教師と生徒、職場の先輩と後輩、上司と部下などのような社会的な組織における上下関係、年齢による上下関係などが考えられるが、これらは一度その上下の関係が形成されると、全く不可能だとは言えないが、その関係を反転させたり断絶したりすることがそう簡単ではないと言える。

菊地（1997：42－76）では、敬語を中心とした待遇表現の観点から、待遇表現の使い分けに関係する重要なファクターとして、社会的・心理的ファクターがあり、社会的ファクターの中に「上下・立場・親疎・内外」の人間関係が含まれるとしている。そして、社会的ファクターとしての人間関係を詳しくみると、以下のような類型があることが確認できる。

（34）待遇表現の使い分けに関係する社会的ファクター：人間関係の類型（菊地1997）

①上下の関係

社会的通念上の身分や地位（いわゆる社会的地位）の上下

同一タテ社会内部での地位などの上下

同じ方面での先輩・後輩（経験の長短）

親族関係における上下

年齢の上下

②立場の関係

恩恵を与える立場／受ける立場（恩恵授受関係）

権限を持つ立場／相手の権限に委ねなければならない立場（権限／従属関係）

強い（優位にある）立場／弱い（劣位にある）立場（強弱関係）

社会／心理的に、強い立場／弱い立場（社会／心理的優劣関係）

恩恵を与える立場／受ける立場と見立てる場合（擬似優劣関係）

③親疎の関係

④内／外の関係

日本語の聞き手待遇表現に関して社会語用論的考察を行っている呉（2013）では、菊地（1997）の分類の中で「上下関係」と「立場の関係」が切り離されていることを指摘し、両者は相互に無関係で完全に分離しているわけではなく、社会的身分関係や地位、先輩／後輩、家族関係、年齢などのようなものに伴う上下関係が発生するのであれば、その中から強い立場と弱い立場という強弱関係の対立が生じることが当然であり、さらに、立場というものを単純に強弱・優劣関係を前面に出して捉えると、やはり社会構造的に優位にある者が権限を持っていることが多いということから、権限／受益や強弱／優劣といった立場の関係は、上下の関係と切り離すことはできない、連続的な関係にあると説明している。そこから、菊地（1997）による分類を修正し、（広義の）社会生活を営む上で発生する上下の関係や立場の関係のようなものを社会的・心理的な力関係と捉え、それらの上位概念として「社会的力関係」を立てており、その中には力関係が固定的に持続する「永続的力関係」と、その都度状況によって可変的な関係が発生する「一時的力関係」があるとしている¹⁴。さらに、永続的力関係においては、固定的かつ社会構造が背景となっている「客観的力関係」と固定的かつ個人間の関係が背景となっている「主観的力関係」に区別できると述べている¹⁵。呉

¹⁴ 各関係に当たる例として、「永続的力関係」においては、上司／部下、先輩／後輩、年上／年下、家族関係などのような「上下の関係」や、教える側／教わる側、雇う側／雇われる側などといった「立場の関係」のような固定的なものがあり、「一時的力関係」の中には、頼む側／頼まれる側、貸す側／借りる側などの「立場の関係」のような可変的なものがあると説明している。

¹⁵ 各関係に当たる例として、「客観的力関係」からは、「上下の関係」のような社会的に決まっているもの、すなわち社会的構造に基づく力関係が見られて、「主観的力関係」では、友人関係の中で、相手によって強く言えるかどうかなどのような心理的強弱・優劣関係が見

(2013)の「社会的力関係」という観点では、上下や立場の関係がはっきり読み取れない関係の説明が容易になり、様々な待遇表現としての言語現象に適用できると言える。また、永続的力関係の中の永続的・一時的力関係に関しては、対人関係における静的（static）関係と動的（dynamic）関係として捉えることができる。さらに、対称詞の選択に関わる人間関係のうち、外的要因として固定されているものは、主に永続的力関係の中の客観的力関係が該当すると言える。

第1章で対称表現の選択可能範囲を整理したが、それらが一般的（規範的）な選択であることを踏まえると、今まで見てきた外的要因が対称表現の選択にも大きく関わると言える。また、先述の菊地（1997）や呉（2013）を参考し、本研究での上下関係とは、話し手と聞き手における年齢の上下や社会的地位や組織内の上下といった、「事実的な上下関係」を指すことを示しておく。上下関係の中には、聞き手が年齢的には上だが組織内では後輩である場合のように、上下を判断する要素たちが合致しない場合も存在する。この場合、話し手が聞き手に対してどの側面を優先して認識するかという、「認識的な上下関係」も想定できるが、そこには社会的な規範に加えて話し手（個人）による判断や話し手のスタイルが関わる可能性が高いため、一般的な対称表現や対称詞の選択により強く影響するのは、やはり事実的な上下関係の方が優先されると言える。

3.2. 話し手の表現意図と関わる要素：内的要因

次に、対称詞を選択する際、外的要因に比べて話し手自身がコントロールできる要因を「内的要因」と呼ぶことにする。先ほどの加藤（2006）では、対称を運用する際に判断する要素として、「場面・人間関係・表現意図」を上げており、表現意図とい

られると説明している。

う要素からもわかるように、外的要因が対称詞の使用における規範としてのものであるのに対して、これらは話し手の意図と深く関わるものだと考えられる。そのため、対称詞の選択動機や選択による発話効果などを考える際にはこの内的要因の解明が必要となる。

先ほど触れたジェンダーの場合、話し手は社会の中でそれを自覚または学習し、社会が望む性役割と自分の物理的性別を一致させるか、それとも自分が表したいジェンダーに合わせて振る舞うかを決めることになる。宮崎（2016）では、日本の中学生の自称表現（宮崎2016では、一人称またはジェンダー一人称とされている）の使用から見えてくるジェンダー意識について調査を行っており、1)多くの女子生徒たちが「あたし」を女っぽい一人称として解釈して、「うち」をより中性的でカジュアルな表現として好んでいたこと、2)「ぼく・おれ」を女子が使用できる一人称として解釈していること、3)男子の場合、クラスにおける力関係が一人称の選択に強く影響していること（力と人気がある男子は「おれ」、周辺的な位置に置かれる者は「ぼく」を選択する傾向が強い）など、興味深い結果を報告している。関連する現象として、10・20代の女性による「おまえ」の使用が考えられる。先ほどの表6に見るように、「おまえ」の話者は男性であることがステレオタイプだと言えるが、近頃女性による「ぼく・おれ・おまえ」の使用が見られるようになったのは、話し手が自分の性別に期待される言葉遣いを選択しないことによって、自分が目指すジェンダー相やキャラクターを表出していると考えられる。つまり、日本語の対称詞を選択する際に、話し手の表現意図が反映されている内的要因が強く作用する場合、規範としての外的要因よりそれが優先的に反映される場合があると言える。

ここで、日本語の自称と対称に関しても少し触れておく。自称詞と対称詞はある一貫性を持つ組み合わせ（セット）として扱うことができ、表6でも示すように、一般的に想定できる自称詞と対称詞の組み合わせとしては、「わたし・ぼく／あなた」、「あたし・おれ／あんた」、「おれ／おまえ」、「ぼく／きみ」がある。そして、話

し手が用いる自称・対称の形式から、我々は話し手の人物相や属性、話し手と聞き手における関係性が概ね把握できると言える。例えば、「おれ」という自称詞を用いる話し手を想定してみると、既知関係の相手に対して「おまえ」を用いる可能性が高く、この場合我々は話し手に対して「男性、活発な性格、やや乱暴な言葉遣い」などのイメージを抱くことになる。また、話し手もこのようなイメージやキャラクターが表現できることを認識していると言えて、自分が表したい人物相やキャラクターに合わせて自称を選択することから、自称詞の選択には内的要因が深く関わることがわかる。さらに、その話し手が「おまえ」を用いる聞き手に対して、我々は「聞き手は話し手と同等な関係または話し手より目下の関係、お互いは親しい関係、遠慮の要らない関係」であることが読み取れる。この点から、日本語の対称詞の選択によって、「話し手と聞き手における関係性」や「話し手が聞き手をどのように捉えているか」が見えてくると言える。そして、日本語の自称と対称の組み合わせは無標のペアとして想定されるため、話し手へのイメージや話し手と聞き手における関係性は自称・対称の両者に渡って表示されるとも言える。しかし、普段自称詞「ぼく」を用いる話し手が聞き手に対して「きみ」ではなく「おまえ」を使うという、無標のペアにずれが生じた場合、そこには話し手の表現意図が強く関わっていることが考えられる。自称詞として「おれ」を使う場合に比べて「きみ」はどちらかというと落ち着いている人物による使用が想定されるため、そのような人物が相手に「おまえ」を使う場合、普段とは違うワイルドな人物相を表出したいという意図や、聞き手に対する話し手の捉え方に変化が生じたことが見えてくる。このように、有標の選択には話し手の表現意図が深く関わると言えるため、逸脱的な対称詞の選択を説明する際に、関連する言語形式（自称詞、文末表現・スタイルなど）の変化にも注目する必要があることが示唆される。

一方、人間関係のうち、対称詞の選択に関わる外的要因としては社会的上下関係があったが、内的要因としては話し手と聞き手における親疎関係が考えられる。親疎は、

相手に対する心理的距離とも言える点から「対人距離」と扱うこともできて、これは社会的に固定されている上下関係と比べて話し手による距離の調整が容易であると言える。話し手が聞き手との対人距離を調整することは、発話時点の関係から近づけるか遠ざけるかを調整することになり、それに伴って相手をどのように待遇するかを決めることにもつながる。この待遇度は、一般的にゼロという起点があって、それを中心にプラス（高い待遇度）かマイナス（低い待遇度）の方向に調整すると考えやすいが、既知関係の相手への待遇度を考慮に入れると、例えばプラス待遇がデフォルトであった関係の人物と親の関係に発展することによって、ゼロ待遇へと調整するケースも考えられる。つまり、距離の調整や待遇度を判断する際は、絶対的な尺度があってプラス待遇かマイナス待遇かを決めるのではなく、図6で示すように話し手と聞き手におけるデフォルトの関係が基準（初期値）となり、それを中心にプラスかマイナスかを決める「動的調整」として扱う必要がある。

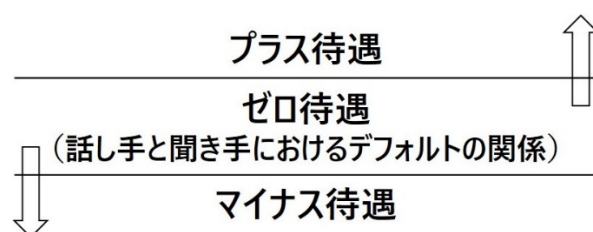


図 6 動的距離調整の尺度

上記の例として、お互いを「～さん」呼びすることがデフォルトの関係である話し手と聞き手を想定してみると、お互いの了解のない状態でいきなり相手を名字のみの形や対称詞の「きみ」と呼ぶことは、彼らの関係においてはマイナス待遇になると言える。第5章と7章で詳しく考察するが、これは（イン）ポライトネスとも深く関わる要素であり、ある言語行為がポライトネスかインポライトネスかを判断する際、絶対的な基準点があるとは言いにくく、話し手と聞き手との関係によって基準とされる尺

度が相対的に調整されると言える。

例えば、話し手が聞き手との対人距離を調整したいという動機が働いた場合、先ほどの表6を参考すると近づく場合には「きみ・あんた・おまえ」を選択し、遠ざける場合には対称詞の中で比較的高い待遇度を持つ「あなた」¹⁶を選択すると考えられる。そして、対称詞によって待遇度が異なることは第1章でも触れた佐久間（1959）による「品等の逡降」からも考えられる。佐久間（1959）では、敬称が本格的な人称として用いられれば用いられるほど、親しみが増して敬意がうすれるのを免れず、品等の低下が生じることを「品等の逡降」の現象として説明する。筆者は、その品等がさらにマイナスの方へ進んだ場合は、「品等の劣化」として考えている。これは、日本語の対称詞全般から見られる現象であり、対称詞の出現順を踏まえると、対称詞としての用法が比較的新しい「あなた」はプラス待遇からゼロ待遇へと向かっていて、対称詞としての出現の順番が比較的最早い「おまえ」は品等の劣化によってマイナス待遇の方に向かっていると考えられる（佐久間1951・1959、辻村1968など）。つまり、対人距離の調整が対称詞の選択の動機として働いた場合、話し手は各対称詞の待遇度の違いによる発話効果を考慮して表現を選択していることが考えられる。

一方、品等という要素についても触れておきたいが、品位のある表現を使うということは、上品に見られたいという発話意図とも関連付けることができる。品位は、上品・下品な話し方や文体（style）などのような話し手の言葉遣いに関わるものであり、ある表現を選択する際に一定の品位・品格を保つということは「上品でありたい・上品に見られたい」という話し手の強い意図の反映として説明できる。日本語の対称詞が高い待遇度を持つとはいえないが、表6での各対称詞と共起する文体を見てみると、すべての対称詞は常体と共起し「あなた・きみ」は敬体とも共起できる。そこか

¹⁶ 「あなた」の距離を置く機能（distancing function）については、Takahara（1992）や米澤（2016）などでも指摘されている。

ら、「あなた・きみ」を選択し、さらに文体も敬体に合わせるのであれば、話し手は他の対称詞を選択した場合に比べて上品な言葉遣いをすることを示すことができる。つまり、対称詞の選択には話し手自身の品位保持も一つの動機として働くと言える。

3.3. 対称詞に見られる階層

今までの外的・内的要因が対称詞の選択の動機になる場合、どの段階までを考慮するのかによって、次のように日本語の対称詞における階層が考えられる。

表 7 選択動機の考慮レベルによる日本語の対称詞における階層

		選択動機の考慮レベル
	あなた	外的要因：(性別), 年齢(20代以上), 社会的上下関係 内的要因：対人距離(遠隔化), 品位
	きみ	外的要因：性別(主に男), (年齢), 社会的上下関係 内的要因：対人距離(近接化・遠隔化), (品位)
	あんた	外的要因：性別(主に女性), 社会的上下関係 内的要因：対人距離(近接化)
	おまえ	外的要因：性別(主に男), 社会的上下関係 内的要因：対人距離(近接化)

表7から、日本語の対称詞の中で、選択の動機が最も複雑に作用する表現は「あなた」であると言える。これは、内的要因が話し手の意図と深く関わり、対称詞の選択における強い動機として働くと考え、内的要因としての対人距離と品位の要素をすべて考慮する必要がある表現は「あなた」のみである点からも説明できる。それに対して、「あんた・おまえ」は待遇度や品位を保つ必要がないため、選択の動機として考慮するレベルが「あなた」よりは低いと言える。そして、選択の動機が主にイン

ポライトネス（意図的な攻撃）として大体固定されている「おめえ・てめえ・きさま」の場合には、さらに低いレベルになると考えられる。最後に、「きみ」に関しては、「あんた・おまえ」ほど待遇度や品位が低いとはいいにくいかもしれないが、第1章での表2からも確認できるように対称詞の中で使用頻度が最も低いため、主に中年男性によるニュートラルな表現として選択の動機が固まっていく段階なのではないかと考えられる。

3.4. 第3章のまとめ

本章では、日本語の対称詞の「あなた・あんた・おまえ・きみ」に見られる違いを明らかにするため、日本語の対称詞の選択に関わる要因を話し手のコントロールの可有無・容易さによって外的・内的要因に分け、以下のような要因について検討した。

外的要因(話し手によるコントロールが難易)：性別，年齢，社会的上下関係

内的要因(話し手によるコントロールが容易)：ジェンダー，対人距離，品位

これらのうち日本語の対称詞の一般的な選択に関わるものは外的要因であり、「聞き手にどのように伝えたいか・どのように見られたいか」という話し手の意図と関わる内的要因が強い動機として働く場合、各要因が選択の動機として優先的に作用することを確認した。その結果、日本語の対称詞の中で選択のため考慮する段階が最も複雑なものは「あなた」であることを示すことができた。

第4章 対称詞の選択と文脈との関係

第4章では、対称詞と文脈との関係を考察する。第1章でも考察したように、対称表現として「あなた・あんた・おまえ・きみ」のような対称詞を用いる際、その形式だけでは聞き手（個人）を特定することはできない。つまり、対称詞が聞き手を指しているとは把握（解釈）するためには、我々は会話参加者や発話場面などといった「文脈」を常に参照することになる。そこで、本章では対称詞が聞き手を指示すると解釈されるまでのプロセスを文脈の観点から考察する。また、固有名詞や普通名詞のような他の対称表現の指示プロセスについても考察し、対称詞の場合と比較を行う。

4.1. 発話解釈に関わる文脈の種類

日本語の対称表現の中の主な種類としては、固有名詞、普通名詞、対称詞があり、そこに敬称が付いた形、また二つ以上の対称表現が複合した形も見られることを確認した（第1・2章）。これらの特徴をもう一度示しておく。

(35) 本研究における主な対称表現

- 1) 固有名詞：個体としての聞き手の「情報内容」を表す
- 2) 普通名詞（親族&役職名詞）：聞き手の「社会的役割性」を間接的に表す
- 3) 対称詞：会話参加者としての「聞き手性」を表す

このような特徴から、固有名詞以外はその形式だけでは聞き手を特定することができないことがわかる。つまり、これらが聞き手を指していると解釈するため、我々は発話時の「文脈」を参照することになる。ここで、発話解釈に関わる文脈を考察する

にあたって、加藤（2017）¹⁷による「世界知識」や「文脈」の観点について触れておく。

加藤（2017）では、語用論的発話処理プロセスに関わる要素のうち、文脈の種類と、それに必要とされる記憶の種類について述べており、そこに関わる知識として「世界知識（world knowledge）」があるとしている。また、発話の解釈に関わる要素として「記憶・知識・文脈」を中心に詳しく論じており、発話の解釈または推論に関わる文脈について、以下の三つを設定している。

（36）発話の解釈・推論に関わる三つの文脈

a. 形式文脈（formal context）

：同一セッション（session）¹⁸の内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる。原則として、セッション参加者が共有していなければならないものであり、命題の形で談話記憶に蓄積できる陳述性の情報である。その意味では形式性・客観性が高い。ただし、談話記憶内に膨大な量を収蔵しておくとも自然的抽出が生じうる。

b. 状況文脈（situational context）

：セッションの進行と時間的に平行して存在する物理的な状況についてのセッション参加者の認知と解釈に基づく情報の集合である。原則として、セッション参加者が共有可能であり、命題の形にすることができるが、その度合いは一定では

¹⁷ 加藤（2004・2009）でも同じ概念について説明しているが、用語など若干の相違が見られるため、加藤（2017）の方を参考している。

¹⁸ 加藤（2017）では、セッションについて「やりとりの開始から終了までの言語行動の全体」と述べている。さらに、セッションが開始してから、話題が転換するなど、一連の発話を内容と一貫性と統合性などの観点からより小さい単位に区分することも可能であり、セッション内部におけるより小さい単位をパラグラフ（paragraph）と呼んでおり、セッションは一つ以上のパラグラフから成るとしている。

ない。談話記憶内に収蔵される。認識が容易なものは共有度が高く、共有も義務的であるが、容易に認識できないものは共有の義務も低い。物理的状況が共有されていなければ、得られる状況文脈も共通されない。

c. 知識文脈 (knowledge context)

：セッションが開始する以前から、セッション参加者が持っている知識のうち、言語知識を除外した世界知識 (world knowledge) にあたるものである。世界知識全体が個人間で完全に一致することはないが、共有度の高いものも少なくない。原則として命題の形で集約されている膨大な知識であるが、あまりにも膨大であるために、すぐに推論や解釈に使えとは限らない。推論・解釈に使える状況に活性化されていないものが知識記憶領域から談話記憶領域に送られると考える。知識記憶にあっても活性化されていない情報はすぐには解釈に使えない。

加藤 (2017) では、形式文脈と知識文脈、状況文脈と知識文脈など、複数の文脈を利用して、あるいは、知識文脈の内部で推論を行うことで新たに得られる想定を二次的な文脈 (高次文脈) と見て、上記の三つ (一次文脈) に加えることもできると説明する。

また、世界知識とは「世界に関する知識のこと」だと理解することができて、知識文脈と深く関わると言える。加藤 (2017) では、「セッションが始まる前から存在している記憶で、いわば世界に関する知識の総体である」と規定しており、以下のように世界知識の中には共有範囲の違いが存在すると説明する。

(37) 世界知識の共有範囲¹⁹

a. 人間として共有する普遍的知識

「生き物はいつか死ぬ」

b. 文化的知識などいくつかのレベルの共同体で共有される知識

「日本では、めでたいことがあったときに赤飯を食べる」

c. 家族など小規模の共同体でしか共有されない知識

「我が家の外食メニューはいつも焼肉だと決まっている」

d. 本人しか知らないような知識

「昨日、誰にも知らせずこっそり買い物をした」

以上の加藤（2017）の先行研究を参考に、対称詞とその他の対称表現がそれぞれ聞き手を指示すると解釈される際に、文脈の活性化の段階がどのように関わるのかについて考察する。

4.2. 文脈から見た対称詞の指示プロセスの段階

ここでは、対称詞の指示プロセスの段階を考察するため、以下のような使用対象を想定しておく。

(38) a. 山田・太郎・山田太郎・山田さん・太郎さん・山田太郎さん：固有名詞

b. 部長・お父さん・おじさん・お客様：普通名詞

c. あなた・あんた・おまえ・きみ：対称詞

¹⁹ 各例は、「生き物はいつか死ぬ」を除いては筆者によるものである。

(38) から、聞き手である人物の名前は「山田太郎」であり、家族関係の中では「お父さん」であって、職場では「部長」の職級を持つ人物であることが分かる。また、（見ず知らずの子供などから）「おじさん」と呼ばれることから、中年男性であることが想定できる。以下では、(38)にある対称表現が当該人物であると解釈されるまでのプロセスを文脈の活性化の段階と関連付けて考察する。

まず、発話のやり取り（セッション）の間、形式文脈は義務的に保持される必要があるため、どの表現においても、聞き手を指すと解釈される際にこの形式文脈は常に活性化されていると言える。(38c)の対称詞から見てみると、対称詞は相手（聞き手）を指し示す直示（*deixis*）または現場指示としての性質を持つため、聞き手を指し示するためには状況文脈が活性化される必要がある。また、対称詞の使用においては、第3章で確認したように話し手の性別や年齢、話し手と聞き手における上下関係などといった、いわゆる言葉遣いにおける規範が関わってくる。この規範は、知識文脈で除外されている言語知識（語彙や統語規則に関わる知識）として理解できるように思われるが、語彙の意味や統語体系の習得だけではなく、ことばの運用と関わり、共同体によって運用に必要な知識が異なる点から、世界知識として扱っても大きい問題はなさそうに思われる。ただし、そのような世界知識がなくても対称詞自体が直示用法を持つため、聞き手の特定には形式文脈と状況文脈だけが参照されと言える。

ここで、聞き手の種類と関わる先行研究として、Bell (1984) のオーディエンス・デザイン（*audience design*）に触れておく。これは、聞き手に応じて話し手が発話スタイルを調整する言語現象を説明する際によく見られるモデルではあるが、以下のよう聞き手の種類について挙げており、状況文脈とも少し関連があるため一度触れておきたいと思う。

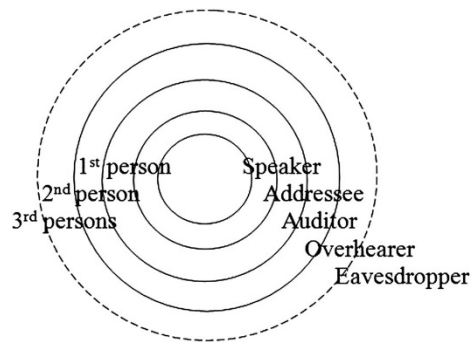


図 7 Bell (1984 : 159) のオーディエンス・デザイン (audience design)

Bellは、話し手 (speaker) から同心円状に広がる形で、聞き手 (addressee)、傍聴者 (auditor)、偶然聞く人 (overhearer)、盗み聞きする人 (eavesdropper) といった4種類のオーディエンス (聴衆) を挙げており、この4種類は、話し手によって知られているか (known)、話し手に傍でくことを認められているか (fatified)、話し手に直接話しかけられているか (addressed) といった基準によって、話し手のスタイル調整に影響を与える度合いが違ってくる (聞き手>傍聴者>偶然聞く人、盗み聞きする人は影響しない)。

本研究では、対称表現を使う相手としてBellの聞き手 (addressee) のみを考察対象としているが、例えば、公共の場などで聞き手を呼ぶ場合、話し手は傍聴者や偶然聞く人を意識する可能性が高い。例えば、(38)の人物の親友 (同性) が彼のことを対称詞を使って指示する場合、中年男性同士の親友であれば「きみ」または「おまえ」、さらにくだけた「おめえ」を使う可能性が考えられる。ただし、話し手 (親友) と聞き手 (38の人物) が公共の場という発話時の物理的状況、つまり状況文脈を共有している場合には、話し手が乱暴な言葉遣いはしないだろうという世界知識があると言える。結果的に、話し手が以上のような状況文脈を参照することによって対称表現

の選択やスタイルの調整を行うとも言えるだろう。聞き手としては、このような状況文脈を参照して話し手が発する言語形式（対称詞）が指すのは傍聴者や偶然聞く人ではない、聞き手である自分であることを特定できると言える。

4.3. 固有名詞と普通名詞の比較

次に、固有名詞と普通名詞を使って（38）の人物を呼ぶ場合、対称詞と比べていくつかの文脈を参照しているのかを比較考察する。（38a）の固有名詞は、個人または個々の物事を「特定」できるという特徴がある。文脈との関係から見てみると、先述のように、発話のやり取り（セッション）の間、形式文脈は義務的に保持される必要があるため、固有名詞による聞き手の特定にも活性化されると言える。一方、固有名詞の使用によって、「山田太郎」という人物の特定にたどり着くまでには、聞き手が「山田太郎」という人物であることを話し手が世界知識として有していれば良いことになる。この世界知識の共有度に関しては、個人の周りの家族など、小規模の共同体で共有される知識範囲として考えられる²⁰。そして、これを知識文脈が活性化されているとすると、固有名詞を対称表現的に使用する場合、聞き手の特定まで必要とされる文脈の活性化の段階が、2段階において終了すると言える。ただし、同名の他者がいる場合には、話し手が指す人物が（38）の人物であることを話し手と聞き手が共有している必要がある。そのためには、その場の物理的な状況についての話し手と聞き手の知識の共有が必要となることから、同名の他者がいる場合での固有名詞による聞き手指示には、さらに状況文脈を参照することになり、3つの文脈がすべて活性化されると言える。

ちなみに、もう一つの可能性として、話し手が聞き手の職場の中の人物である場合、

²⁰ もちろん、アーティストや政治家などの有名人を指す場合には、その共有範囲が広くなることが考えられる。

聞き手を「山田部長」と呼ぶ場合も考えられる。これは、固有名詞と普通名詞が複合された形であるが、「山田」という部分から個人の特定ができる点から、固有名詞として扱うことができる。ただし、「山田・山田さん」と呼ぶ場合と比べると、話し手は聞き手が「山田太郎」という存在であることに加え、職場の中で「部長」という地位にあるという知識も持っていることになる。この場合での世界知識の共有度も、小規模の共同体で共有されるものとして考えられる。

次に、(38b)の普通名詞は、先述の通りその人を直接呼んでいるのではなく、その人の「役割」を間接的に表すと言える。加藤(2006)では、例えば「猫」という表現は、そこに含まれる指示物が個別に異なっており、異なる個体を取りまとめて範疇を設定し、意味化する作用が見られる点から、固有名詞と普通名詞の違いは「範疇化の有無」と言えると説明する。また、(38b)は「部長・お父さん」のように、個人の役割を知識として持っている必要があるものと、「おじさん・お客様」のように、特に必要のないものに分けられる。「部長・お父さん」を文脈との関係から見てみると、話し手は聞き手が家族または職場において、「お父さん」または「部長」という役割、つまり社会的属性を持っていることを世界知識として有している必要がある。さらに、話し手と聞き手との会話の場に、家庭での「お父さん」の役割や、「部長」という職責を持つ者が複数いても、話し手が指す人物が「山田太郎」という人物であることを話し手と聞き手が知識として共有している必要があり、これは、範疇の中からの個々の特定をすることだと言える。そして、そのためには形式文脈をはじめ、知識文脈と状況文脈がすべて活性化され、3段階に渡って聞き手を特定していると考えられる。これは、先ほどの「山田部長」が固有名詞として個人を特定できるため、同名の他者がいない限り状況文脈を参照する必要がある場合との相違点だと言える。そして、このような文脈の活性化の段階の違いが、普通名詞が持つ間接性を説明できると言える。一方、「おじさん・お客様」の場合には、個人に関する世界知識は特に必要なく、その場の状況から状況文脈を参照して聞き手を特定することができる。つま

り、同じ普通名詞だとしても、特定の個人に関する知識（知識文脈）の必要有無によって、聞き手を指すまでの段階に違いが見られると言える。

以上、対称表現の中の固有名詞、普通名詞、対称詞を中心に、各表現が特定の聞き手を指していると解釈されるまでのプロセスを文脈の活性化の段階と関係づけて考察した。その違いを以下の表8にまとめる。

表 8 対称表現の聞き手指示に関わる文脈

聞き手指示の際に 活性化される文脈	固有名詞 (固有名詞＋普通名詞)	普通名詞	対称詞
形式文脈	○	○	○
状況文脈	○(同名他者の場合)	○	○
	×		
知識文脈	○	○(聞き手の具体的な属性を示す場合：お父さん・部長など)	×
		×(聞き手の具体的な属性を示さない場合：お客様など)	

(○と×は、それぞれ文脈の活性化と非活性化を意味する)

表8から、対称表現の聞き手指示に必要な文脈の活性化の段階が、カテゴリー別に異なることがわかる。固有名詞の場合、同名の他者がいる場合には三つの文脈がすべて活性化されるが、一般的には形式文脈と知識文脈の活性化という、二段階で聞き手指示のプロセスが終了すると言える。普通名詞の中には、聞き手の特定まで知識文脈が必要ない場合もあるが、普通名詞の代表例とも言える親族名詞や役職名詞の場合には、それらが聞き手の具体的な属性を示すと言えるため、聞き手に関する知識が必要となり、それに加えて範疇の中の個人を特定するための状況文脈と形式文脈の活性化

という、三段階の聞き手指示プロセスが考えられる。普通名詞の聞き手指示における、知識文脈の必要有無に関して一つ加えると、本章では聞き手の特定に知識文脈が必要となる普通名詞について、聞き手の具体的な役割を示す表現であり、その中には敬称として機能するものが含まれると述べたが、敬称として機能するという面から見ると、「お父さん・お巡りさん」のように当てはまらないものも考えられるため、その違いについてより詳しく分析する必要がある。また、「具体的な役割」という部分においても、より論理的な説明が求められると言える。

一方、対称詞は直示用法を持つため、個人の特定に知識文脈が特に必要ないところが固有名詞と普通名詞との相違点であり、その代わりにその場の聞き手であるという状況文脈と形式文脈が活性化される、2段階のプロセスが見られると言える。

4.4. 第4章のまとめ

本章では、対称詞が聞き手を指すと解釈されるまでのプロセスを文脈の観点から考察し、発話解釈に関わる形式文脈・状況文脈・知識文脈の三つの文脈がそれぞれどのように活性化されるのかを固有名詞と普通名詞の場合と比較考察した。対称詞は、形式だけでは個人を特定できないが、形式文脈と状況文脈を参照することで、聞き手の特定が可能になる。これらの中で、聞き手としての解釈までに参照される文脈が最も多いものは普通名詞であり、上記の三つの文脈をすべて参照することを確認した。固有名詞は定性を帯びるため、形式文脈と個人の情報に関する知識文脈を参照することで聞き手を指すと解釈できることになる。このように、それぞれの対称表現が持つ特徴の違いによって、各表現が聞き手を指すと解釈されるまで必要な文脈の種類と活性化の段階に違いが生じると言える。

本研究の考察対象である対称表現は人称ダイクシスと関係があると言えるが、人称

ダイクシスの研究では対人語用論（対人配慮）の観点からの考察が行われることが多く、語用論の研究では、文脈という要素が深く関わってくる。そこで、日本語における様々な対称表現の違いを検討する一つの方法として、語形や用法だけではなく、文脈という観点からの接近を試みたと言える。

第5章 対称詞の選択動機とスタンスの表示

第5章では、既知関係の相手に対する対称詞の選択動機について考察を行う。まずは、各対称詞の特徴と使用実態を確認し、そこから見えてくる選択動機について「スタンス (stance)」の観点から考察する。スタンスについては、Du Bois (2007) による Stance Takingを中心に検討し、それが対称詞の選択にどのように反映されているのかを明らかにする。さらに、スタンスの表示に伴い、対称詞の選択の際には話し手の聞き手に対する「対人距離の調整」が行われるとも考えられる。これについては、ポライトネス理論と滝浦 (2008・2020) による距離の理論を中心に検討し、ポライトネスの文脈における対称詞の選択とその発話効果についても考察を行うことにする。考察の際には日本のテレビドラマやアニメ、バラエティー番組や映画などから収集した用例を基に分析する。

5.1. 対称詞の特徴と使用実態

日本語の発話や会話の中で聞き手のことを表す方法は様々であるが、一般的に相手のことを知っている場合（既知関係）、「山田・太郎」などのような固有名詞、または「部長・先生」などの相手の肩書を表す普通名詞を用いることが多い。しかし、相手との関係や発話状況などを考慮して、普段は名前で呼んでいる相手に対して一時的に「あなた・きみ」などの対称詞を用いる場合もある。滝浦 (2016 : 91) では、呼称について「人間関係の状態とそこからの偏移をともに敏感に表す装置」と述べている。既知関係の相手に対する対称詞の一時的な使用は、相手に対する「有標の呼び方」であり、話し手はそこに「人間関係の状態とそこからの偏移」に対する捉え方を反映させて、意図的に対称詞を選択していると考えられる。しかし、その詳細につ

いてはまだ十分議論されていないようである。さらに、日本語の対称詞は「あなた・あんた・きみ・おまえ・おめえ・てめえ・きさま」など、その種類も多い方であるため、各表現の選択にどのような動機が働くのかを明らかにする必要がある。

そこで、日本語の対称詞の選択動機を考察するために、本章では主に「既知関係」における「あなた・あんた・きみ・おまえ」の使用に焦点を置きたいと思う。見ず知らずの相手に対する対称詞の使用や「おめえ・てめえ・きさま」に関しては主な考察対象からは外すが、必要に応じて触れたいと思う。特に「おめえ・てめえ・きさま」はインポライトネスと深く関わると言えるが、これについては第7章で詳しく論じることにする。

まずは、日本語の対称詞の一般的な使用様相について先行研究に触れながら確認する。第1章と3章でも触れた小林（2016a）では、現代日本語研究会（2011・2016）の日常と職場の中の自然談話資料を基に、対称詞の使用におけるステレオタイプとして以下の表10（表6の再掲）のようにまとめている。また、日本語の呼称における対称詞の出現数を再度確認するため、表2も再掲しておく。

表 9 小林（2016a）による呼称の出現数（表2の再掲）

	あなた	あんた	きみ	おまえ	役職 地位	親族 呼称	姓を 含む	名を 含む	その 他	合計
日常	22	28	8	8	22	48	53	99	10	298
職場	18	7	1	22	96	0	273	13	17	447

表 10 小林（2016a）による日本語の対称詞のステレオタイプ（表6の再掲）

対称	話者	対者	共起話体	対応する自称	語（を含む文）のイメージ
あなた	女・男	同等以下	敬・常体	わたし・ぼく	やや親しい／あらたまり
あんた	女・男	同等以下	常体	あたし・おれ	親しい／ぞんざい・気軽
おまえ	男・ (女)	同等以下	常体	おれ・（わたし）	親しい／上から下へ
きみ	男	同等以下	敬・常体	ぼく	やや親しい／とりすまし

表10から、日本語の対称詞は、話し手と同等または目下の人物に使うことが一般的であることがわかる。表には話し手の性別、共起する文体、対応する自称、語のイメージに関しても示されているが、このような違いから日本語の対称詞の中には段階性が見られることが想定できる。一方、加藤（2019）では、同じく「あなた・あんた・おまえ・きみ」について『CEJCモニター公開版（以下、CEJC）』（2018）と小林（2016a）による分析を比較しており、そこからも各対称詞における違いが確認できる。以下では先行研究に触れながら、日本語の対称詞「あなた・あんた・きみ・おまえ」の意味的变化と現代での使用実態を見ていく。表10に基づき、四つの対称詞の中で敬体と常体の両方と共起する「あなた」と「きみ」、そして常体のみと共起する「あんた」と「おまえ」に分けて各表現の特徴を確認する。

5.1.1. 「あなた」と「きみ」

「あなた（貴方）」は、「こなた・そなた・あなた」という名称からわかるように、元々場所を表す遠称（空間ダイクシス）であったものが対称として使われるようになったと言われている。佐久間（1951・1959）では、「こなた・そなた・あなた」の変化についてコとソの対立からわかるように、「こなた」は近称を表し、聞き手への親しみを表すものとして使われ、「そなた」は対称を表すものとして最もふさわしい

「ソ」を含んでいるため、対称として近古語の中で広く使われたが、使用する頻度が増えるとともに表現における品等の低下が生じたため、一層間接な指示を表す遠称「ア」系の「あなた」に席をゆずるようになったと説明する。そして、「あなた」は江戸末期まではよほどの敬意を表す敬語として使われていたが、同じく敬意の下向的变化が進み、現代では「あなた」から高い敬意を感じるには言いにくくなったと述べている。このような現象について、佐久間（1959）では「品等の通降」の現象だと説明しており、これは敬称が本格的な対称表現として用いられれば用いられるほど親しみが増して敬意がうすれるのを免れず、品等の低下が生じることを意味する。後にも見ていくが、この「品等の通降」は日本語の対称詞全般から見られる現象だと言える。

一方、現代の「あなた」の使用実態を見てみると、先ほどの現代日本語研究会（2011・2016）による職場と日常生活から得た自然談話資料を基に、小林（2011・2016a）では「あなた」はすべての年代の話し手において、家族・親族内の年下の者、また部下や弟子などのような社会的下位者に用いられ、そこから「あなた」の使用意識には年齢や地位の「上下」による選択の意識が反映されていると述べている。さらに、以下のような例文から「あなた」の使用場面・文脈について説明している。

(39) 「その、みそを食べなさいってんの、あなた。」

(60代女性→50代女性の弟子：日常2016)

(40) 「やっぱり、あなた、まだ、あれ分かってないんだわ、説明変数と、被説明変数が。」

(50代女性→職場の後輩²¹：職場2011)

(41) 「参加者の数、かつ、これあなた違うよ。」

(50代女性→職場の後輩：職場2011)

²¹ 『職場』では聞き手の属性については詳しく言及していない。

(42) 「あな、あなたの結婚式、ほら〇〇でやったじゃない？」

(70代男性→70代男性の高校同級生友人：日常2016)

(43) 「ああ、紅玉、あなた煮ればいいじゃない。」

(50代妻→50代夫：日常2016)

(39) から (41) は、目下の人物に対する「あなた」の使用が見られ、このような「あなた」に反映される上下による選択について、小林 (2016a) は相手より上位的立場に立つからこそ、家族または社会的目下である相手への指示・批判などの文脈での使用が見られると説明する。そしてこれは、下谷 (2012) による「認識的優位性 (Epistemic Primacy)」という観点からの解釈とも関連させて考えられる。下谷 (2012) では、話し手が聞き手より認識的に優位であるというスタンスを持っている際に「あなた」が使われて、特に、ある話題 (問題) に対して判断・評価・決定のできる側がそれを下される側に対して使う表現であると述べている。そのため、「あなた」の使用による話し手の認識的優位性の表明は、結果として相手への批判・非難といった感情的な態度を示すことにつながり、評価を下す場面などに使われ、上から目線で冷たい感じを与えることになる」と説明する。「あなた」の使用場面についてアンケート調査を行った米澤 (2016) では、「あなた」の使用対象と、使用・不使用の場面、そしてその理由を調べている。使用対象としては、上位者・下位者・同等者という区分を設けており、すべての対象に対して回答者 (428名) の6割以上 (上位者の場合は9割以上) が「あなた」を使用しないという結果を示している。そして、その不使用の理由として、上位者への場合は失礼さ、下位者・同等者への場合は距離を作るというタイプが見られたとしている。また、「あなた」を使用する場面には、上位者に対しては喧嘩・相手を非難するとき、下位者に対してはアドバイスをする・叱る・評価を与えるとき、同等者に対しては相手を非難する・アドバイスをする・親しみを込めていう・ちょっとふざけていうときなどがあり、いずれもやや特殊な場面での使

用が見られたと報告している。本研究では、「あなた」に見られる批判・指示・アドバイスなどの文脈での使用が、話し手のキャラクター性の表出ともつながると考えているが、これについては米澤（2016）の先行研究とともに第6章で詳しく考察することにする。

（42）は友人に対する「あなた」の使用であり、小林（2016a）は話し手と聞き手が70代の高齢である点から、彼らがかつての同級生という共通項を持ちながらも、それぞれの生活や個性を尊重し合いながら親しい中にも「一定の距離」を持つ付き合いをしており、それが「あなた」の使用にも反映されていると解釈する。（43）は、従来の日本語における妻から夫への典型的な呼びかけ表現としての「あなた」の使用だと言えるが、小林（2016a）は現代日本語研究会（2016）に登場する19組の夫婦の談話資料の中で、このような使用が見られたのはこの1例のみであったと述べている。後に、夫による妻への「おまえ」の例も1つ出てくるが、それに関しても1例のみであったと報告する。これは、現代の夫婦における呼びかけ表現の形式が「あなた・おまえ」といった対称詞から、家庭内の父と母という役割を示す「お父さん・パパ」や「お母さん・ママ」のような普通名詞の方に移っている実態と関連付けることができる。

一方、加藤（2019）では小林（2016a）とCEJC（2018）との共通点として、「あなた」が他の対称詞に比べて使用頻度が高い点、女性による使用が多く、同等以下の相手に使用する場合が多い点を挙げている。相違点としては、小林（2016a）では「あなた」の使用者の年齢が40代以上であるのに対して、CEJC（2018）では以下の（44）のような20代からの使用も見られたと報告する。（44）は上位者に対する「あなた」の使用例だが、特に喧嘩や批判をしているとは言いにくく、単なる呼びかけとして使われていることから、小林（2016a）での「あなた」の指示・批判場面での使用は少なく、現代では「あなた」は年下の親しい相手と呼ぶ時のことばであるという意識が広まってきていることを示唆すると述べている。

(44) 「じゃあ、お弁当作ってくれるの？三人分だから作れるよね。（中略）

ってか澤ちゃんの作るんだね。あなた。」

（20代娘→50代母：2018）

以上から、現代日本語における「あなた」は従来の敬称としての機能は大体失い、話し手が聞き手に対して指示・批判・評価・アドバイスなどをする場合、または冗談関係（joking relationship）の相手に対して親しみを示す場合に使われるとまとめることができる。また、「あなた」を使用する動機として、改まる、つまり「距離を作る」という意見が共通的に見られたが、この「距離」については、他の対称詞も確認した上で詳しく論じたいと思う。

次に、「きみ」について見てみると、佐久間（1951）では、「きみ（君）」は名詞として「尊貴」を意味し、中古には尊称として使われたが、明和時代の用例から同輩以下の者への使用が見られると言及している。現代での使用を見てみると、先ほどの表9からわかるように職場と日常生活の中の「きみ」の出現数は極少なく、小林（2016a）で挙げられている例も（45）くらいである。職場での1例もドラマの台詞をそのまま引用したものであると報告している。

(45) 「待ってましたよー、きみー、きみの帰りを。」

（40代母→10代息子：日常2016）

ただし、（45）は息子の誕生日祝いに来てくれた人が待っているのに帰りが遅くなった息子に対して、母が冗談交じりになじっている場面であり、小林（2016a）はこれを「きみ」のステレオタイプとしての例だとは考えにくいと述べる。また、「きみ」は男性から同等以下の相手を指す、例えば上司から部下、男性から妻や親しい年下の

女性、また戦前の親しい男性同士の友人間などに用いられる表現として考えられるが、表9に見られる出現数の少なさから、小説やドラマなどでの台詞に見るほど実際の生活の中では用いられることはないように見えると説明する。

加藤（2019）では、小林（2016a）とCEJC（2018）における「きみ」の共通点として、対称詞の中で使用頻度が最も低く、使用対象が年の離れた家族や親族内の若い相手であるとしている。相違点としては、小林（2016a）では用例数の乏しさによる結果ではあるものの、女性による使用が多く、主に母親による息子や娘に対する用例であったが、CEJC（2018）では男性による使用が多く、自分の妻や教え子（女子学生）に対する使用が見られたと述べている。以上、「きみ」に関しては用例が少ないためここまで確認することにするが、後に対称詞間に見られる形式性や距離を示す程度の違いについて考察する際、詳しく考えたいと思う。

5.1.2. 「あんた」と「おまえ」

「あんた」は、その形からわかるように「あなた」の異形だと考えることができ、「あなた」が登場した後に砕けた言い方として出現したものであると言える。そのため、登場時期からそれほど高い待遇度を表していたとは言いにくい。辻村（1968）では、「あんた」について直接言及はしていないが、「あんた」の出現時期を近世と整理している。

「おまえ」についても見てみると、佐久間（1951・1959）では、「おまえ（お前・おまへ）」に関して近世および近古にさかのぼって見ることができ、江戸末期において上向的に使用された例が多く見られることから、少なくとも同輩に対して丁寧な場合での使用²²が考えられると述べており、室町時代の用例からはもっぱら上向的に用いられていたことが考えられるとしている。このことから、「おまえ」の

²² ただし、この場合はなまった「おめー」の形も多いと述べている。

意味用法の転化の有様も「品等の通降」の現象から説明できることがわかる。一方、山崎（1961）では、室町時代から江戸前期に至る時期に「おまえ」が発生し、それが日本語の敬語体系システムを大きく変えたとしている。室町時代までは敬語における五つの段階があったが、「おまえ」が生じて最も高い第一段階（大敬語）を占めることによって、元々各段階にあった敬称が一段階ずつ下降するようになった。しかし、その中で近世の第二段階と第三段階の混合の形が発生し、新たな段階が生じたのである。そして、その後に発生した「あなた」によって「おまえ」は大敬語としての位置から降りるようになったと説明する。つまり、「おまえ」は敬語として上向的に使われたが、近代に至っては同等または目下の人物だけに使うようになったと言える。これは、「おまえ」の登場時期が他の対称詞に比べて早い方であったため、品等の低下が最も著しく見られるとも言える。表10からもわかるように、現代での「おまえ」は親しい同等または目下の人物に対する男性同士のややワイルドな使用が見られるため、その異形である「おめえ」はさらに激しさや乱暴さを与え、相当親しい関係にある者に対する場合でなければインポライトネスとして使用されることが多いと言える。

ちなみに、「きさま（貴様）」も現代では下向的に使われて、「おまえ・おめえ」よりも乱暴な言い方だとされているが、辻村（1968）によると、「きさま」は発生したときからそれほど高い敬意を表す表現ではなかったらしい。辻村（1968）は用例を基に「きさま」は話し手と同等または目下の人物に対して軽い尊重や敬意を表す場合に用いられていたと述べており、発生当時は書簡に限られて使用されたため、使い方がある程度固定されていたが、それが口語として一般庶民に広く使われるようになりながらその軽い敬意さえ失い、現在では卑称として使われるようになったと説明する。

「あんた」と「おまえ」の現代での使用実態を見てみると、まず、「あんた」は他の対称詞に比べて地域差が見られる例が多い方だと言える。小林（2016a）では、現代日本語研究会（2016）で見られる日常での「あんた」の28例のうち、21例が関西方言話者によるものであると報告している。そして、以下の（46）のように「あんた」

に敬称の「さん」を付けるなど、やや個性的な使用が多かったと述べている。一方、職場で使われる「あんた」に関しては、会社と学校での使用の例を挙げており、(47)が同僚に対する強い親しみを示すのに対して、(48)からは自分の意見や判断をかなり強く相手に押し付けているニュアンスが感じられるが、職場での使用としては珍しい方である「あんた」の用例から、このような場面が多く見られたと述べている。

(46) 「なあ、あんたさんは頭が違うねん。」

(90代義姉→70代義妹：日常2016)

(47) 「あんた自分が決めた日だからねー。」

(50代男性→50代男性同僚：職場2011)

(48) 「はっきりいいな、あんた、はっきり。」

(30代女性：職場2011)

一方、「おまえ」に関しては、他の対称詞との違いがいくつか見られたと報告しており、以下の(51)の例を除いてはすべて男性による使用が見られた点と、今まで見てきた「あなた・きみ・あんた」の選択基準が相手との上下関係においているのに対して、「おまえ」の場合はむしろ「親しさ」が基準となっていると述べている。

(49) 「ああ、でも、一番アホなのおまえだよね。」

(20代男性→20代男性大学同級生：日常2016)

(50) 「おまえが持ってるの？」

(40代夫→40代妻：日常2016)

(51) 「おまえよりは軽いわ。」

(20代女性→20代男性友人：日常2016)

(52) 「おまえ、それいいなー。」

(30代男性→30代男性同僚：職場2011)

(53) 「それはおまえの逃げじゃないか。」

(40代男性→30代男性：職場2011)

小林 (2016a) では、「おまえ」における「親しさ」について、明治以後の日本語では上下関係を基準に上位者から下位者を指した「おまえ」が一般的で、親しい同位の男性どうしでは「きみ」の使用が普通だったが、戦中の軍隊での「きさま」を経て、戦後男性同士の親しい関係で用いられる (49) のような「おまえ」が一般化し、さらに現代に至ってはそれが親しい関係での女性にも見られるようになったと分析している。また、(52) や (53) のような職場における「おまえ」からも、主に男性における親しい仲間に対する遠慮の必要ない文脈が見られるとしている。そして、先ほどの夫婦における「あなた」の例と同じく、「おまえ」の例も (50) 1つのみであり、これらは旧来的なステレオタイプとして考えられると述べている。

以上から、男性同士の親しみを表す対称詞として従来は「きみ」が使われたが、それが「おまえ」の方に移り、「おまえ」からは親しみの表示や遠慮のなさが読み取れると言える。これは一種の「感情の表出」だと言えて、「あんた」からも相手への親しみの表示や念押しなど、感情的な表出が見られたことから、現代における対称詞のうち「あんた」と「おまえ」は、話し手が聞き手に対して何らかの感情を伝える場面に多く使われ、そこから聞き手への遠慮や距離感は感じられない場合が多いと言える。それに対して、「あなた」は改まって指示・忠告をする場面に多く使われるため、相手への距離を示すことになり、「きみ」は若干の親しみを表すが、「おまえ」の方がより強い親しみを示すため、「あなた」と「きみ」からは（その程度は異なるものの）聞き手に対する話し手の距離の表示が見られると言える。

5.1.3. 対称詞の意味的変遷と現代の使用実態

今まで見てきた日本語の対称詞の中の「あなた・きみ・あんた・おまえ」の意味的変遷と使用実態を以下のようにまとめる。

(54) 「あなた」：場所を表す遠称であったが、その間接性が敬称として使われるよ

うになり、「おまえ」に続いて高い敬意を表す敬称になったが、時代の経過と共にその敬意を失う。現代では同等または目下の人物への使用が一般的である。敬体・常体の両方と共起し、性別に関わらず使用される。目下に対する改まった指示・忠告などでの使用が多く見られる。聞き手に対する話し手の距離感が感じられる。

「きみ」：名詞の尊敬語であったもの。現代では、同等・目下の人物だけに使える。敬体・常体の両方と共起し、男性による使用が多い方であるが、男性同士における「おまえ」に比べると親しみはそれほど感じられない。

「あんた」：「あなた」の異形。対称詞の中でも地域差が見られる表現。現代では、同等・目下の人物だけに使える。常体のみと共起し、女性による使用が多い方である。聞き手に対する話し手の感情の表出が見られ、そこから聞き手への遠慮や距離感は感じられない。

「おまえ」：上向的に使われた高い敬意を表す敬称だったが、「あなた」の発生と共にその敬意を失う。現代では同等・目下の人物だけに使える。常体のみと共起し、男性による使用が多い方である。「あんた」と同じく聞き手に対する話し手の感情の表出が見られ、そこから聞き手への遠慮や距離感は感じられない。

このことから、日本語の対称詞がすべて同等以下の相手に使用できるが、その中には親しさや距離感、また相手への遠慮の有無などの違いが見られることがわかる。日本語の対称詞と距離の関係については以前から指摘されており、Shibatani (1990) では、対称詞の使用におけるジェンダーとフォーマリティーの違いについて以下のよう示している。

	Formal ←		→ Informal
1st person			
Male speaker	<i>watakusi</i>	<i>watasi</i>	<i>boku</i> <i>ore</i>
Female speaker	<i>watakusi</i>	<i>watasi</i>	<i>atasi</i>
2nd person			
Male speaker	<i>anata</i>		<i>kimi anta</i> <i>omae</i>
Female speaker	<i>anata</i>		<i>anta</i>
3rd person		<i>kare</i> 'he' <i>kanozyo</i> 'she'	

図 8 日本語の対称詞におけるジェンダーの違い (Shibatani1990 : 371)

図8について、Shibatani (1990) は「あなた・きみ・あんた・おまえ」は、話し手のジェンダーや待遇レベル (speech level) によってコントロールされるとしていて、「きみ・あんた・おまえ」はインフォーマルな方に、「あなた」は最もフォーマルな位置に置いている。さらに、社会的に上位者である者に対してこれらの表現を使うことは適切ではなく、話し手が聞き手に対して敬意 (deference) を表したい場合には「きみ・あんた・おまえ」は使えないとしている。「あなた」に関してはフォーマルな表現ではあるが、上位者に対しては可能な限り使用を避ける方が望ましいとしている。また、図8からも確認できるように「きみ」は「あんた」や「おまえ」ほどインフォーマルではない点から、それらのように全く距離感のない関係を示すとは言い

くいことがわかる。それに対して、「あなた」はフォーマルな表現として位置づけられており、これは形式性を持つことになり、相手への距離を示すとも言える。これは、Takahara (1992) による「あなた」が距離を置く機能 (distancing function) を持つという指摘や、先述した米澤 (2016) での「あなた」の不使用の理由として、距離を作る・冷たい感じを与えてしまうという点を挙げていたことから考えられる。つまり、距離の観点から見ると、「きみ・あんた・おまえ」は選択動機として親しみを示すことが考えられるが、「あなた」は距離を作るために選択される場合があると言えて、これは「あなた」と他の対称詞との選択動機における相違点だと言える。

一方、日本語の聞き手指示方法の選択ストラテジーを考察した研究として、第1章で見てきた大高 (1999) がある。対称詞の選択動機と関連する部分をもう一度まとめると、大高 (1999) では聞き手指示方法の選択における第一次的な判断基準として、話し手と聞き手との人間関係を挙げており、それを友好関係と対敵関係に分けて、友好関係はさらに私的組織 (家族) と公的組織 (学校・会社など) に分けている。そして、私的組織内では、相手が目上の場合「お父さん」のような親族名を使って、目下の場合には名前を呼び捨てにするか対称詞の「あなた・おまえ」を使うとしている。公的組織内では、相手が目上の場合「社長」のような役職名を使って、目下の場合には基本的に「名前+さん」を使って、親愛表現として「名前+くん」または対称詞の「あなた・きみ」を使うとしている。また、組織外関係の場合には相手の名前を知っているかいないかを判断し、知らない場合のみ対称詞を使うとしている。最後に、対敵関係では意図的に「きさま・てめえ・あんた」が選択されるとしている。

以上、日本語の対称詞が主に同等または目下の人物に使われる点から、対称詞の選択に関わる共通的要素は話し手と聞き手における「上下関係」であることが考えられる。しかし、今まで見てきたように、聞き手に対する話し手の「距離の示し方」においては対称詞による違いが確認できる。これは、日本語の対称詞の選択に第一次的かつ共通的に影響するのは話し手と聞き手における上下関係であるが、その以降の段階

では、聞き手との対人距離を考慮して対称詞の中で最も適切な表現を選択することになると言える。第3章で対称詞の選択に関わる外的・内的要因について考察したが、ここでの上下関係は話し手のコントロールが難しい、すでに決められている規範的な要素である外的要因であり（他に性別・年齢などが考えられる）、対人距離は心理的な関係である点から、話し手自身がある程度調整できる内的要因だと言える。このことから、対称詞間における選択には内的要因が強く反映されており、その選択によって話し手が聞き手との対人距離をどのように「捉えているのか」が把握できることになると言える。

5.2. 対称詞の選択動機：スタンスの表示

日常の発話や会話の中で、既知関係の聞き手に対して対称詞を用いることは有標の呼び方である可能性が高く、対称詞の中でどの表現を選択するのかによって、話し手が聞き手をどのように捉えているのかを確認できると言える。ここでは、日本語の対称詞の選択動機を明らかにするため、話し手の意図と深く関わる内的要因のうち、聞き手への話し手の「捉え方」を示す「スタンス (stance)」の観点から考察を行う。

既知関係であって相手に関する情報（世界知識）を持っている場合、話し手と聞き手はお互いに無標の呼び方を形成していくが、以下の用例のように一時的に対称詞を用いることもよくある。

(55) 貝塚：まったくおまえが余計なことをいちいち口出ししたせいで内容は変わるわ、ページ数は増えるわで、こっちは大迷惑だよ。

河野：まあ、いいじゃん。中身濃くなったんだから！

貝塚：そんな単純な問題じゃねえんだよ。直しの回数が見積もりと違ったら追加料金だって払うんだぞ？

河野：えっ、そうなの？！

貝塚：小森谷さんもそういうことを知らないおまえ並みの素人だからな。節約ブログとか言って、他のブログ本より金かけてりゃ世話ねえや。

河野：まあ、そこは売って元取ろうよ、ねっ！

貝塚：だからこの本がどれだけ…。まあいいや、じゃあいいんだな？後書きに名前入れても。

河野：もちろん！

藤岩：あんまり浮かれ過ぎるのはいかななものかと思います。

河野：えっ？

藤岩：校閲とは、本造りを陰で支える存在です。関わるのは文字であって作家や内容ではありません。あなたのように作家と直接会うべきではないし、ましてや編集者のように内容に口を挟み、新たなアイデアを出すなんてもってのほかです。校閲は内容には干渉しない。これは基本中の基本です。

『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子』2話

(55) は、出版社が主な舞台である日本のドラマの中の発話場面であり、発話者はすべて出版社校閲部の社員たちである。発話者である貝塚（30代男性）、河野（20代女性）、藤岩（30代女性）は出版社の社員で、貝塚は編集部、河野と藤岩は校閲部の社員である。発話場面としては、新入社員の河野が校閲部と編集部の仕事をわきまえていないことを見て、藤岩が先輩として校閲の仕事に関して冷静にアドバイスしている。藤岩が原則主義で勤勉誠実な落ち着いたタイプの人間であるのに対して、新入社員の河野は明るく情熱的で例えルールだとしても自分が疑問を抱いたり合理的ではないと判断した仕事には積極的に突き止めるタイプである。そのため、藤岩は河野の行動や仕事の進め方を望ましくないと判断し、指摘やアドバイスをする場面が多く、普段河野のことを固有名詞の「河野さん」と対称詞の「あなた」を使って表している。

(55) での「あなた」は、元々編集部希望であった新入社員の河野が校閲部と編集部の仕事をわきまえていないことを見て、藤岩が先輩として校閲の仕事に関して冷静にアドバイスしている際に用いられている。河野に対する藤岩の普段の呼び方は「河野さん（固有名詞＋さん）」であるが、このように仕事に関するアドバイスをする場面では「あなた」が使われている。また、発話内容から、藤岩は河野の仕事のやり方が望ましくないと判断していることがわかるが、そのため藤岩は対称詞の中でも相手に対する距離感を示す「あなた」を選択していると言える。つまり、自分と聞き手である河野との仕事に対する価値観が相違していると捉えた上で、その対立的捉え方を効果的に伝達するため、聞き手に距離を置く「あなた」を選択したと言える。前節で各対称詞がよく見られる使用場面にも触れたが、これは各対称詞が該当する場面での文脈を効果的に伝達する言語的手段であることが発話者の間で共有されていると理解できる。「あなた」が相手への指摘やアドバイスの場面でよく見られるという先行研究から、我々は何かに対する相手との価値観が相違（対立）している場合、「あなた」を使うことによってその対立の伝達意図や発話効果をより強化または確定させていると言える。

一方、以下のように聞き手への非対立の捉え方が見られる場面もよくある。

(56) 清水　：じゃあさ、水族館とは別に、吉岡の行きたい所で打ち上げやろうよ。

ミカン　：ああ、いいね！

吉岡　　：清水さん、ありがとう！まともなのはきみだけだ！

『新あたしんち』25話

(56) は日本のテレビアニメの発話場面であり、発話者は全員同じクラスメイトの高校生である。ミカン（女性）と吉岡（男性）は中学の頃からの友人であり、清水（女性）とミカンはクラスの中で最も仲良しな関係である。吉岡は、ミカンに対して

は名字の「立花」と呼んだり、意地悪なことを言う場合には「おまえ」と呼んだりすることもよくある。それに対して、清水とはどちらかと言うとミカンを媒介として親しくなった関係であるため、普段「清水」または「清水さん」と呼んでいる。ここでは、テストの打ち上げの場所を決める際に、魚を見るのが苦手な自分に配慮してくれた清水に対して親近感を感じて「きみ」を使っていると言える。前節でも確認したように、「きみ」は男性による同等または目下に対する使用が多いが、親しい男性同士である場合には「きみ」よりは「おまえ」を使う場合が多いため、ここでの「きみ」の使用はそれほど親しくない相手に対するやや遠慮した呼び方だと言える。また、「ありがとう」という発話から、吉岡が清水を非対立的に捉えていることが確認できるが、清水への非対立の捉え方を示すため、「清水さん」より親しみが感じられる「きみ」を選択していると言える。

このような例から、対称詞の選択動機として、話し手の聞き手に対する対立または非対立の捉え方の表示が考えられる。本研究では、この「捉え方」をDu Bois (2007) によるStance Takingの理論を参考し、スタンスという観点から考える。まずは、スタンスの概念を確認しておく。

(57) Stance is a public act by a social actor, achieved dialogically through overt communicative means, of simultaneously evaluating objects, positioning subjects (self and others) , and aligning with other subjects, with respect to any salient dimension of the sociocultural field.

Du Bois (2007 : 163)

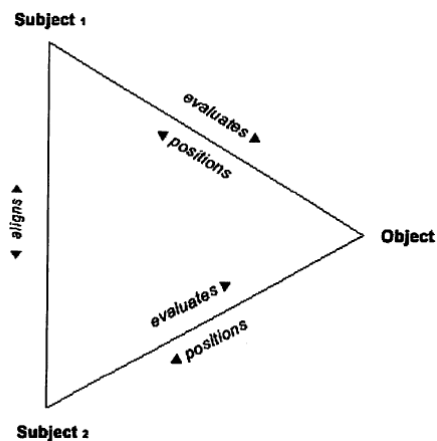


図 9 スタンス三角図 (The stance triangle, Du Bois 2007 : 163)

図9は、上記のスタンスの定義を図式化したものであり、Du Bois (2007) は Stance Takingについて何かに対する評価 (evaluation : that's horrible)、位置づけ (positioning : I'm glad)、支持 (alignment : I agree) といった談話構造の説明に適すると述べており、「自分が何かを評価し、それによって自分自身を位置づけ、相手を支持する (I evaluate something, and thereby position myself, and thereby align with you)」という説明を加えている。このことから、スタンスとは何かに対する話し手の「捉え方」だと理解できる。

また、位置づけの例として、情緒的スタンス (affective stance : I'm glad) と認識的スタンス (epistemic stance : I know) を挙げているが、両者の判断基準に関しては特に説明していない。スタンスに関する課題としては、スタンスの類型が未だに整理されていない点、また、話し手によって示されるスタンスは単一のものだけではなく、複数のスタンスが複合されて現れる場合も考えられるが、スタンスの類型がはっきりされていないため考察がそこまで至っていない点などを挙げている。

以上から、Du Bois (2007) によるスタンスの研究は、主に上記の三つの談話構造を説明するために提案された段階のものだと言えて、Du Bois自身もその後に研究を発展させてはいないようである。第3章でも触れたように、対称詞の使用や選択動機

を明らかにするためには、外的要因だけではなく話し手の意図と深く関わる内的要因の解明が必要となる。さらに、話し手の心理的部分に触れるには、対称詞を用いる文脈を話し手がどのように捉えているのかを説明する必要がある、そのためにはスタンスの観点からの分析が効率的だと言える。しかし、先述のようにスタンスの研究における課題が多く残っているため、本研究ではDu Bois (2007) によるスタンスの概念とその詳細を一部修正して考察を行うことにする。特に、位置づけにおける認識と情緒のスタンスを取り上げ、以下のような分類を提案したいと思う。

- (58) 本研究におけるスタンスの定義と説明：発話時における話し手の聞き手に対する「捉え方」。聞き手への「評価」とも言える。話し手の発話内容（命題）からその捉え方や評価が判断できる。スタンスの類型を大きく分けると、「認識的スタンス」と「情緒的スタンス」があって、認識的スタンスとは、聞き手の意見や価値観などに対する話し手の捉え方だと理解できて、聞き手の意見に対する対立有無をそれぞれ認識的な対立・非対立のスタンスとして分けられる。情緒的スタンスは、聞き手の人間性や言動に対する話し手の感情的捉え方だと言えて、同じく聞き手に対する対立有無をそれぞれ情緒的な対立・非対立のスタンスとして分けられる。また、認識的・情緒的スタンスは、Du Bois (2007) の分類の上では、同じく「位置づけ」を示す際のスタンスであるため、単一の形でも複合された形でも見られると言える。

(59) 本研究におけるスタンスの分類

①単一型

- a. 認識的な対立・非対立のスタンス
- b. 情緒的な対立・非対立のスタンス

②複合型

a. 認知的・情緒的な対立のスタンス

：聞き手に対して話し手が認知的にも情緒的にも対立していることを示すスタンス、例えば「あなたの考えにも賛成できないし、あなたも嫌いだ」

b. 認知的な対立・情緒的な非対立のスタンス

：話し手と聞き手における意見や価値観は対立しているが、感情的な対立は見られないスタンス、例えば「あなたは嫌いじゃないけど、あなたの考えには賛成できない」

c. 認知的な非対立・情緒的な対立のスタンス

：話し手と聞き手における意見や価値観は対立していないが、感情的な対立が見られるスタンス、例えば「あなたの考えは間違っていないけれど、あなたが嫌いだ」

d. 認知的・情緒的な非対立のスタンス

：話し手と聞き手が認知的にも情緒的にも対立していないことを示すスタンス、例えば「あなたの考えにも賛成するし、あなたもいい人だと思う」

スタンスの分類についてももう少し説明すると、①単一型は聞き手への認識と情緒がそれぞれ独立されている場合だと考えられて、個別に対立と非対立のスタンスがあることになる。②複合型は、聞き手への認識レベルと情緒レベルの捉え方が両方とも反映される場合で、我々の日常のやり取りではこのようなタイプのスタンスが表示される場合が多いと考えられる。複合型の種類としては、大きく認識と情緒が対立または非対立という同じ方向性を持つものと、それらがずれているものに分けられる。そして、認識と情緒の対立有無がずれている場合、感情レベルである情緒のスタンスの方がより強く反映されることが多いと言える。例えば、②のbとcは、認識と情緒のスタンスがずれているが、bでは情緒のスタンスが非対立であるため、聞き手への捉え方

も非対立的になる可能性が高く、cでは反対に聞き手への対立の捉え方を示すことになる可能性が高いと言える。

先ほどの(56)での「きみ」の選択をこの観点から分析すると、話し手自身(吉岡)に配慮してくれた聞き手(清水)に対するありがたい気持ちから、認識的・情緒的な非対立のスタンスを示していると言える。ただし、異性でもあって他の友人を媒介として親しくなった相手にいきなり「おまえ」を用いるわけにはいかないため、やや遠慮した「きみ」を選択したと説明できる。そして、非対立的スタンスの表示は聞き手への親近感を示すことにつながり、聞き手との対人距離を縮める方向に調整しているとも言える。つまり、スタンスの表示と対人距離の調整は連続的に見られると言える。前節でも確認したように、対称詞の種類によって「距離の示し方」が異なるため、形式の選択による距離の調整にも違いが見られると言える。この距離の調整については、ポライトネス理論と滝浦(2008・2020)の先行研究を中心に検討し、対称詞の選択との関係を考察する。

5.3. スタンスと対人距離の調整

既知関係の人物に対する対称詞の使用からは、聞き手に対する話し手の捉え方、つまりスタンスの表示が見られる。スタンスの表示は、聞き手への対人距離の表示または調整につながると言えるが、この距離の調整についても検討する必要がある。ここでは、先行研究のBrown&Levinson(1987)によるポライトネス(politeness)理論と、ポライトネス理論を日本語に適用した滝浦(2008・2020)を中心に、スタンスの表示に伴う対人距離の調整について考察する。

ポライトネスは、言葉で表される対人的配慮だと言われている(滝浦2020)。ポライトネスの研究は、Leech(1983)によって本格化された研究分野であり、対人関係において聞き手をどのように待遇するかに関する研究だと言える。Brown&Levinson

(1987) によるポライトネス理論では、人々は社会的欲求または面子に当たる「フェイス (face)」を持つとしており、それは「他者によく思われたい・受け入れられたい」という「ポジティブ・フェイス (positive face)」と、「他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない」という「ネガティブ・フェイス (negative face)」に分けられている。そして、Brown&Levinson (1987) は我々の発話行為は自分と相手のフェイスを侵害する行為、つまりFTA (Face Threatening Act) になる可能性が高いため、そのFTAを緩和させるためのストラテジー (strategy) として、ポジティブ・フェイスに配慮したポジティブ・ポライトネス (positive politeness)、ネガティブ・フェイスに配慮したネガティブ・ポライトネス (negative politeness)、明確にことばにしないオフレコード (off record) といった、3種類の合計40ストラテジーを設けており、これらは普遍的に見られる言語現象であると説明する。もちろん、FTAを回避するためそれ自体を行わない場合も示されているが、これは発話や会話自体が成立しない可能性が高いと言える。

さらに、Brown&Levinson (1987) はポライトネスにおける文化的差についても触れており、以下のような図式を提案している。

$$(60) W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

ここでの W_x は、FTAの負担・重さ (weightiness) を表しており、 $D(S, H)$ は話し手 (S) と聞き手 (H) の社会的距離 (social distance) を、 $P(H, S)$ は聞き手 (H) の話し手 (S) に対する力の尺度 (measure of power) を、 R_x はFTAが当該文化の中でどの程度の負担 (imposition) になるかを表している。ただし、これはBrown&Levinson (1987) がFTAによる負担を説明するため考案した図式であり、実際に数値的な計算が可能であるわけではない。

一方、Brown&Levinson (1987) のポライトネス理論は発表された時から多くの批

判を集めたが、特に「言語の普遍現象」という部分に対するものが多かった。彼らが提示するポライトネスのストラテジーは主に英語や英語を含む欧米の言語運用を参考していたため、普遍性を持つという主張に対しては多くの反論が見られた。Leech (2007) では、これについて「ポライトネスは西洋と東洋で異なるか」という観点から論じており、結果的に普遍性はあるが、その実現の方法が異なるという見方を示している。例えば、日本語の場合「お料理上手ですね」と相手を褒めた場合、それをそのまま認める者は多くはないだろう。大概是「そんなことはないですよ。」や「まだまだです。」といったへりくだった反応を見せる場合が多い。しかし、これをポライトネスの観点から見ると、ポジティブ・ポライトネスとして相手を褒めたことを受容しないことになるため、褒めた相手（話し手）へのFTAになると言えるが、日本語の運用から見ると「ありがとうございます。そうです、私は料理が得意なんです。」のような賛辞の受容は傲慢だと読み取れるため、それこそが相手へのFTAになる可能性が高い。このように、Brown&Levinson (1987) によるポライトネス理論では、言語における個別的説明が欠けているため、すべての言語現象の説明にそのまま適用できるとは言いにくい。

さらに、Brown&Levinson (1987) ではGrice (1975) による会話の協調原理 (Cooperate Principle) ²³を補うためのものとしてポライトネス理論を設けているため、彼らが主張するポライトネスは話し手と聞き手が協調関係にある場合を想定している。そしてこれは、ポライトネスが「効率性からの逸脱 ²⁴」の動機となると言える (滝浦 2020) 。しかし、我々の普段のやりとりを考えると、常に協調原理に従っている

²³ 日常言語学派の哲学者であるGrice (1975) は、会話が参加者の協調によって成立するという特徴について「協調原理」として述べており、そこには「Quantity, Quality, Relation, Manner」という四つの大原則とその中の小原則があるとしている。そして、会話の参加者は協調原理に従って発話をするのが求められ、そのような協調によって会話がうまく進むとしている。

²⁴ 情報の伝達において、物事をそのまま述べるのではなく、相手に配慮しながら叙述するため情報伝達の面からは効率的ではないことを意味する。

とは言いにくく、むしろ相手を意図的に攻撃したりする場合も多く見られる。近年は、このような現象までを幅広く説明するため、（イン）ポライトネスまたは対人語用論（interpersonal pragmatics）という新しい研究の動向が見られるようになったと言える。インポライトネスは、ごく簡単に言うと「相手への意図的な攻撃を示すための言語行動」だと言えるが、ポライトネスの反対概念ではないため個別の説明が必要となる。ここでは、まずポライトネスを中心に考察を行い、インポライトネスに関しては第7章で扱うことにする。

一方、ポライトネスを日本語の研究に取り入れた研究として、滝浦（2008・2020）がある。滝浦（2008）では、ポライトネス理論から対人関係の言語表現に関する「距離」の理論が生まれるとし、対人関係における配慮すべき要素をフェイスだとする場合、その対人関係の距離に関わる社会制度としては、文化人類学での「冗談関係・忌避関係」の区分があると説明する。冗談関係（joking relationship）は、冗談を言ったり、冷やかしたり、悪態をついたりすることが許される関係（典型的な関係：祖父母と孫）であるのに対して、忌避関係（avoidance relationship）は、避けたり尊敬することが義務付けられている関係（典型的な関係：義理の母）であり、滝浦（2008）は、この冗談・忌避関係がおのものの対人関係における距離の「近接化」と「遠隔化」を導き、言語においても同様の機能を果たす道具立てが発達すると説明している。例えば、相手に対して丁寧に敬体で話すことは、待遇度は高いかもしれないが、相手との距離を作る「遠隔化」になり、これは相手の「他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない」というネガティブ・フェイスに配慮した対人距離の調整になると言える。それに対して、常体で話すことは待遇度は低いかもしれないが、相手との距離を縮める「近接化」になり、これは相手の「他者の良く思われたい・近くなりたい」というポジティブ・フェイスに配慮した対人距離の調整になると言える。

また、滝浦（2008）は言語形式の中で「距離」との関わりが深いものとして、敬語と呼称の例を挙げており、敬語が距離を大きくとる敬避的な要素であるのに対して、

呼称は敬避的な要素だけでなく、距離を小さくする共感的な要素とともに「遠近両用」で対人的な距離感を表すと述べている。そして、遠近の距離がすべて表せることは、同じ表現だとしても両義的な顔を持つことになり、その相対的な性質から呼称における複雑な発話効果が説明可能になると説明する。つまり、滝浦（2008）の距離の理論は、同じ言語行動であっても文脈によって相対的な解釈ができることがポライトネスの持つ性質（相対性）であり、それを「近・遠」という距離の観点から説明していると言える。また、滝浦（2020）では、日本語の呼称における距離感について次のように示している。

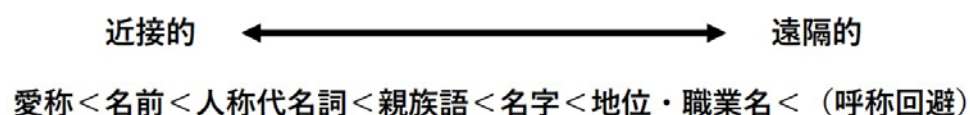


図 10 呼称の距離感：日本語の場合（滝浦2020：62）

図10の中で、本章の考察対象である対称詞（滝浦の図では人称代名詞となっている）は、比較的近接的な距離感を与える呼称として位置づけられている。滝浦（2020）は、遠距離呼称を用いれば丁寧で控えめなニュアンスとなるのに対して、近距離呼称を用いると、近い関係なら親しさの、そうでない関係なら相手を軽んずるニュアンスとなり、我々はそのような原則に従った呼称を規範として了解して選択していると説明する。つまり、我々は対称表現を選択する際に、特定の人物に特定の表現を用いることによって生じる発話効果をすでに世界知識として共有していると言える。そして、各表現が概ね図10のような距離感を与えることを知っているため、その知識が対称詞の選択にも影響すると言える。

以上のような滝浦（2008・2020）の「近接化・遠隔化」の距離の理論は、同じ文脈の中で近接化と遠隔化が同時に見られる動的な調整も説明できる。ただし、このよ

うな調整はポライトネスの中での距離の調整が前提となっているため、ポライトネスとインポライトネスを跨る動的調整を考察するには個別の説明が必要となる。本研究では、先述した複合型のスタンスがこの説明に適していると考えている。複合型bとcのように認識と情緒のスタンスの対立有無が混在している場合、ポライトネスからインポライトネスの領域へ、またはインポライトネスからポライトネスの領域への動的調整が見られると言える。我々の日常でのやり取りを考えると、明らかにポライトネスまたはインポライトネスとしての発話効果を伝える場合もあるが、発話効果がポライトネスとインポライトネスの境界上にある（どっちだと判断することが微妙である）場合も多く見られる。本研究では、そのような発話効果に関してスタンスの観点からの考察を試みる。さらに、認識と情緒における対立・非対立の方向性がずれている場合、感情レベルである情緒的スタンスがより強く機能する可能性が高いため、対人距離の動的調整の説明にもつながることになる。ここでは、まずポライトネスの文脈における対称詞の使用を中心に考察し、インポライトネスと関わる動的調整に関しては、第7章で詳しく論じることにする。

5.4. ポライトネスと対称詞

ここでは、日本語の対称詞がポライトネスの文脈で使われた場合の発話効果を考察する。序論でも述べたように、分析対象となる用例は映画やテレビドラマ・アニメ、バラエティー番組などからのものを収集した。日本語の対称詞の使用を考察するためには、話し手と聞き手の「普段」の対人関係や「無標」の呼び方を把握することが重要である。自然談話資料の用例は、実際に発言された用例ではあるものの、話し手と聞き手が初対面である場合も多く、既知関係の相手であったとしてもプライバシーの関係上、両者に関する詳しい情報を得ることは難しい。そのため、本研究では話し手と聞き手との普段の関係や呼び方が比較的容易に観察できる映画やテレビから得た用

例を中心に考察を行うことにする。作品の選別にはファンタジー的な要素のない、現代日本社会をできるだけリアルに描いているものにした。以下に、表1を再掲する。

表 11 本研究の分析資料（表1の再掲）

	作品名	放送局	放送時期
映画	告白	—	2010年
テレビ アニメ	あたしンち	テレビ朝日	2002年4月19日 ～2009年9月19日
	新あたしンち	アニマックス	2015年10月2日 ～2016年4月5日
テレビ ドラマ	半沢直樹	TBS	第1期：2013年7月7日 ～2013年9月22日
	地味にスゴイ！ 校閲ガール・河野悦子	日本テレビ	2016年10月5日 ～2016年12月7日
バラエティー 番組	水曜どうでしょう2019 ー北海道で家、建てますー	HTB	2019年12月26日 ～2020年3月11日

5.2節でのスタンスの中で、ポライトネスの方向に解釈される余地があるものは、単一型では認識的非対立のスタンスと情緒的非対立のスタンスがそれに当たる。複合型では、dの認識的・情緒的非対立のスタンスと、先述のように認識と情緒が混在する場合、感情レベルの情緒的スタンスが優先される可能性が高いため、bの認識的には対立しているが、情緒的には非対立しているスタンスの場合もポライトネスへの解釈が強化される可能性が高い。以下では、日本語の対称詞がポライトネスの文脈で使われた用例を中心に、各対称詞の選択にどのようなスタンスが反映されているのかを考察する。

先ほどの（56）での「きみ」の選択もポライトネスの文脈での使用だと考えられる。

ここではそれに加えてポライトネスとしての「あなた」の用例も見てみる。

(61) 藤村：ちょっと、難題かもしれませんが。

大泉：おお、いや、逆にね、そういう方がありがたいの。なんか、リクエストしてくれた方が、欲しいものあったら僕なんでも作れるんだから。

藤村：バナナ。

大泉：あ、はいはいはい。

藤村：バナナを使った、

大泉：はい。

藤村：酒のつまみ。

大泉：ああー！それは、それはもう簡単ですね。

藤村：意外とさ、生ハムとメロン...

大泉：合うんですよ、うん。

藤村：みたいなもの...

大泉：やっぱりいろんなね、食を経て、そういう甘いものと何かを合わすことによって、美味しくなってくるんですよ。逆にね、私驚いた。

藤村：あ？

大泉：あなたの食のレベルが上がったな、と思いましたよ。

藤村：はい。

大泉：いや、あのやりましょう、それじゃ、ね、バナナを使った簡単なおつまみを今からじゃあ私が...

(藤村の笑い声)

大泉：あの、ご紹介させていただきます。

藤村：断らないですもんね！やっぱ一流のシェフになると。

大泉：もちろん、もちろん、もちろん。私嬉しかったぐらい。

藤村：ああ、そうですか。

大泉：おお、あなたの口からね、そんな...言葉が出るとはね。

(藤村の笑い声)

(中略)

大泉：いや、嬉しいな。しかもワインに合うようなね、いや、バナナって実はワインに合うんですね。

藤村：なんかね、濃厚さがバナナに僕あると思ったの。

大泉：そう！いや、あなたすごいじつ...、すごいレベル上がってる。

(藤村の笑い声)

大泉：バナナの...

藤村：（笑いながら）早くやれよ！

(大泉と藤村の笑い声)

『水曜どうでしょう2019—北海道で家、建てます—』2話

(62) 藤村：次、ちょっと僕はあの、タラコとパイナップルっていう...

大泉：これね、ホントにあなたは成長した。

(藤村の笑い声)

大泉：実にいい組み合わせですよ。もう、浮かんでますから。

藤村：浮かんでる？

大泉：うん、任せてください。2皿目。

藤村：（笑いながら）お願いします。

『水曜どうでしょう2019—北海道で家、建てます—』2話

(61) と (62) は、日本のバラエティー番組『水曜どうでしょう』シリーズの監督である藤村（50代男性）と出演者である大泉（40代男性）との会話である。この番組

ではディレクター陣の藤村（50代男性）、嬉野（60代男性）、タレント陣の鈴木（50代男性、企画兼）、大泉（40代男性）が中心となって様々な企画を見せるが、今回は長期プロジェクトとして北海道で木造の家を建てる企画である。（61）は、今シリーズの企画が決まってから食事をしようとする場面であり、大泉が「シェフ大泉」として事前に準備された材料だけで個性的な料理の作り方を披露するコントのような場面だが、大泉は突然藤村からバナナを使ったワインのつまみを要求されて何とか時間を稼ぎながら必死に料理を考えている。（62）では、バナナのつまみの試食が終わった後、藤村が2つ目のメニューであるタラコとパイナップルが入ったつまみを要求している場面である。彼らの発話内容からも確認できるように、大泉は現在「一流シェフ」として振る舞っており、そのような状況で藤村がバナナなどのつまみを提案したことに対して「食のレベルが上がった・成長した」とほめている。ほめのストラテジーは、典型的なポジティブポライトネスのストラテジーと言えるため、（61）と（62）はポライトネスの文脈だと理解できる。

スタンスの観点から見てみると、大泉は一流シェフとして凡人である藤村のチョイスを認めており、藤村という人間が成長したと捉えているため、藤村に対する大泉の認識と情緒の非対立のスタンスが読み取れる。そして、ここでの「あなた」の選択には、「一流シェフによる高評価」であることが強く影響していると考えられる。今まで見てきたように、「あなた」は同等または目下の人物に使えて、他の対称詞に比べて形式性が高く、聞き手に対する距離感を与えることができる。一流シェフと凡人の間では、料理に対する専門性などにレベルの差があることが考えられて、大泉は自分がシェフとして振る舞っている時点では、藤村より料理への理解度が高い、つまり料理の領域においては自分が藤村より上位の立場に置かれていると捉えている可能性が高い。そのため、藤村をほめてはいるものの、一流シェフとして一定の距離を保ち（遠隔化）、上位の立場で相手进行评估するという動機が「あなた」の選択から読み取れる。つまり、相手の「よく思われたい」というポジティブ・フェイスに配慮した発

話内容を述べる一方、自分の（正確には、その時点で演じている一流シェフとしてのキャラクター）「他者に踏み込まれたくない」というネガティブ・フェイスを保持するため、その言語的手段として「あなた」を選択していると解釈できる。そこから、「あなた」自体がポライトネスの形式とは考えにくく、それを強化または確定するための言語的手段として選択されたと考えた方が合理的だと言える。

5.5. 第5章のまとめ

本章では、日本語の対称詞「あなた・きみ・あんた・おまえ」を中心に、各表現の意味的変遷と現代での使用実態を検討し、対称詞の選択動機として共通的に関与する要素は上下関係であり、その以降の段階での選択動機として見られるものは聞き手に対する話し手の「スタンスの表示」と「距離の調整」であることを考察した。既知関係の相手に対する対称詞の使用は、どちらかという和有標の呼び方であるため、対称詞の選択の際に話し手が聞き手をどのように捉えているのか、つまりどのようなスタンスを表示するのかが強い動機として考えられるためである。

そこで、Du Bois（2007）によるスタンスの定義を参考に、日本語の対称詞の研究におけるスタンスの定義と分類を行った。本研究でのスタンスとは、聞き手に対する話し手の「捉え方」だと理解できて、大きく認識レベルと情緒レベルのスタンスがあり、それぞれの対立有無によって聞き手に対する認識の対立・非対立のスタンス、聞き手に対する情緒の対立・非対立の4種類の単一型スタンスに分類した。また、認識と情緒のスタンスが同時に見られたり、両者の対立有無がずれていたりする可能性もあるため、本研究では認識と情緒のスタンスの複合型（4種類）を設けて、対立のずれの有無によって認識的・情緒的な対立のスタンス、認識的な対立・情緒的な非対立のスタンス、認識的な非対立・情緒的な対立のスタンス、認識的・情緒的な非対立の

スタンスの、合計8種類に分類した。そして、このようなスタンスの分類は、動的な文脈におけるスタンスや発話効果の考察に貢献できると言える。

一方、対立・非対立のスタンスの表示は、話し手の聞き手への距離の表示と調整にもつながると言える。従来のポライトネス理論の観点から見ると、聞き手とスタンスが対立している場合には、相手に距離を置く遠隔化が見られる可能性が高い。それに対して、非対立の場合には相手との距離を縮める近接化が見られる可能性が高く、前者の場合には「あなた・（きみ）」が、後者の場合には「きみ・あんた・おまえ」がその発話効果を確定させる言語的手段として選択されると言える。本研究では、相手への意図的な攻撃であるインポライトネスの文脈での対称詞の使用も視野に入れており、聞き手への強い対立のスタンスの表示はインポライトネスの領域の方に解釈が偏る可能性が高いことを指摘した。このインポライトネスの文脈での対称詞の選択に関しては、第7章で詳しく論じることにする。

以上のような考察を経て、本章では日本語の対称詞の選択動機を明らかにすることができた。残された課題としては、本研究で設けたスタンスの分類がより多様な発話場面における対称詞の選択を網羅的に説明できるように、今後は個別の場面での選択を精密に分析していく必要がある。

第3部 日本語の対称表現における 発話効果の比較考察

第6章 対称詞の発話効果の比較

—「あなた」を中心に—

第6章では、日本語の対称詞の「あなた」に重点を置いて考察を行う。第5章で考察したように、「あなた」は他の対称詞に比べて聞き手への距離を示す機能があるため、主に聞き手への対立のスタンスを示す際に用いられる場合が多かった。そこで、日本語の対称詞における「あなた」の位置づけを明らかにする必要がある。さらに、従来の研究では非対立のスタンスを示す場合の「あなた」の発話効果として、主に「距離」の観点から考察しているが、そのような場面で使われる（選択される）「あなた」の用例を見てみると、相手との距離だけではなく、自分の社会的位置・属性（外的要因）を意識したような選択も見られる。そこで、ここでは本研究の分析資料に見られた「あなた」の用例を基に分析し、「あなた」のもう一つの選択動機として「品位」の観点から考察を行う。また、「あなた」の異形である「あんた」など、他の対称詞との発話効果を比較考察する。

6.1. 対称詞における「あなた」の特殊性

第5章でも確認したように、日本語の対称詞において、「あなた」は以下のような特徴を持つと言える。

- (63) 「あなた」：同等または目下の人物への使用が一般的である。敬体・常体の両方と共起し、他の対称詞に比べて性別による使用の制限が弱い。目下に対する改まった場での指示・忠告としての使用が多く見られる。聞き手に対する話し手の距離感

が感じられる。

つまり、「あなた」と他の対称詞との違いは、「あなた」の選択に話し手の性別が大きく影響されないことと、「あなた」を使用することによって相手への距離を示すという点にあると言える。ここで、性別という要素は、本研究での対称詞の選択に関わる要因のうち、話し手自身がコントロールしにくい「外的要因」に当たるものであり、距離は外的要因に比べて話し手自身によるコントロールが比較的容易である「内的要因」に当たる。他の対称詞に関しては、例えば「あんた」は女性による使用が多く、「きみ・おまえ」は男性による使用が多いという、話し手の性別やジェンダーが強く関わってくると言える。これは「あたし・おれ・ぼく」などの自称表現の選択に見られる特徴ともよく似ていて、近年は中性的な「自分」が多用される現象も見られる²⁵。それに対して、「あなた」は選択の際に話し手の性別やジェンダーといった要因から比較的自由的な表現であると言える。

一方、外的要因のもう一つの代表的な要素として「年齢」がある。年齢の観点から考えてみると、我々の日常での発話や会話の中でこどもや10代が「あなた」を用いる場面がそう簡単には思い浮かばない。本研究の分析資料の中で、10代の言葉遣いが観察できるものとして、4人家族とその周辺人物の日常を描いたテレビアニメ『あたしンち』と『新あたしンち』があるが（女子高校生と男子中学生、そして彼らの友人たちが登場する）、管見の限り10代による「あなた」の使用は見られなかった。そこで、「あなた」の選択に関わる外的要因のうち、話し手の性別にはあまり影響されないが、

²⁵ 第3章の方でも触れたが、自称表現に関する研究として、宮崎（2016）では日本の中学生の自称表現（宮崎2016では、一人称またはジェンダー一人称とされている）の使用から見えてくるジェンダー意識について調査を行っており、1)多くの女子生徒たちが「あたし」を女っぽい1人称として解釈して、「うち」をより中性的でカジュアルな表現として好んでいたこと、2)「ぼく・おれ」を女子が使用できる一人称として解釈していること、3)男子の場合、クラスにおける力関係が一人称の選択に強く影響していること（力と人気がある男子は「おれ」、周辺の位置に置かれる者は「ぼく」を選択する傾向が強い）など、興味深い結果を報告している。

話し手の年齢による制約が強い方だと言える。これを確認するため、第5章で簡単に言及した米澤（2016）の研究を見てみる。

米澤（2016）では、「あなた」の使用意識と実態に関するアンケート調査を行っており、回答者の年齢による「あなた」の使用有無や使用場面、そして不使用の理由などを詳細に報告しているため、話し手の年齢や使用場面に関する情報が容易に確認できる。米澤（2016）の調査の回答者は首都圏在名の東京方言話者428名であり、調査内容としては、上位者・同等者・下位者に対してそれぞれ「あなた」を使用するかどうかを選択式で尋ねている。そして、使用すると回答した場合には使用場面を、使用しないと回答した場合には不使用の理由を選択式と自由記入式で尋ねている。調査結果としては、「あなた」はどの対象にも「使わない」と回答した者が最も多く、特に上位者に対しては全体の9割以上が使用しないと回答していた。第5章で、上下関係は「あなた」を含む日本語の対称詞の選択に一次的かつ共通的に関わる要素であることを見てきたが、全世代に渡ってその規範意識が見られることがこの結果からも確認できる。

それに対して、対同等者と下位者の項目では、以下のように年齢による差が見られた。

表 12 下位者に対する「あなた」の使用実態（米澤2016：68）

	全く使わない	場面・状況による	いつも使う
10代	78.7%	21.3%	0%
20代	83.0%	14.6%	2.4%
30代	73.1%	25.8%	1.1%
40代	59.0%	39.2%	1.8%
50代	56.6%	41.5%	1.9%
60代	55.6%	39.9%	4.5%

平均	67.6%	30.4%	2.0%
----	-------	-------	------

表 13 同等者に対する「あなた」の使用実態（米澤2016：69）

	全く使わない	場面・状況による	いつも使う
10代	63.6%	35.6%	0.8%
20代	75.5%	23.3%	1.2%
30代	72.6%	26.6%	0.8%
40代	58.4%	37.0%	4.6%
50代	57.0%	39.8%	3.2%
60代	50.4%	39.2%	10.4%
平均	62.9%	33.6%	3.5%

以上から、全体的な傾向として回答者の6割以上はどの相手に対しても「あなた」を使わないが、40代を起点にその使用実態に違いが見えてくることがわかる。米澤（2016）では特に言及していないが、この理由として、こどもや10～20代はどちらかというと自分の周りに上位者が多い環境に置かれている場合が多く、上位者には「あなた」を使わないという回答から、彼らは「あなた」を使う機会自体が少ないためだと考えられる。

また、米澤（2016）は「あなた」の不使用の理由として、上位者には「失礼であるため」、同等者や下位者に対しては「距離を作るため」、「かしこまりすぎ」という回答が見られたと報告している。特に、距離に関する回答の中で、「丁寧な言葉だと思うので、逆に親しい人から言われると、距離のある冷たい感じに聞こえる」と「日頃名前と呼んでいる仲の人に「あなた」と呼びかけられると、何か関係が悪くなるようなことをしてしまったかなと思う」という意見があったが、このことから「あなた」は形式性が強い表現であり、聞き手に対する対立のスタンスを示す際によく使われるため、相手への距離を示すことにもつながることが確認できる。

一方、「場面・状況による」と回答した者たちの「あなた」の使用場面として、使用対象に関係なく最も多く見られたものは「アドバイスをするとき」であり、米澤（2016）はこれに加えて「叱るとき」、「評価を与えるとき」など、いわゆる「上から目線」的な回答が多かったと報告している。特に、40代以上では7割以上が「あなた」を親としてこどもにアドバイス・叱責・評価などを与える時に使うと回答したと述べている。さらに、10～20代では非常に仲のよい人に対して「ちょっとふざけて」言う時に使用すると回答した者も見られたとしている。

ちなみに、上位者に対する使用場面では、喧嘩や口論といった場面で「相当キレてる時」という回答が見られたが、スタンスの観点から見ると認識的にも情緒的にも対立している場合での、強い対立のスタンスを示す言語的手段として「あなた」が選択されたと考えられる。しかし、これはどちらかというと感情的になったあまり我を忘れた場合での使用である可能性が高いため、「あなた」の一般的な使用としては考えにくい。

以上、「あなた」の使用意識と実態に関する先行研究として、米澤（2016）を詳しく見てきたが、そこから「あなた」の選択に「年齢」による使用頻度の違いが見られることを確認した。他の対称詞の場合を考えてみると、（こどもによる使用は、やはりあまり想像できないが）10代が「きみ・あんた・おまえ」を使っている場面をあまり難しくなく想像できる。米澤（2016）では、このような「あなた」と年齢との関係について特に論じていないが、本研究ではこれが日本語の対称詞における「あなた」の特殊性を考える際に、「距離」という要素とともに重要なヒントになると考えている。そこで、本研究の分析資料から得た「あなた」の用例を一つ挙げる。

(64) 米岡：しかし、今日はまた一段と派手だね。

河野：そう？

藤岩：以前、私に言いましたよね。TPOを大切にしないと。

今日のあなたの服装はとても仕事向きの服装とは思えませんが。

河野：そりゃそうですよ。仕事の後のデートに標準を合わせた服装ですから！

『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子』5話

(64) は、テレビドラマの出版社校閲部の先輩（藤岩・30代女性）から後輩（河野・20代女性）への発話であり、藤岩による発話の内容から、河野の服装に対する認識的対立のスタンスが読み取れる。先ほど、こどもや10代による「あなた」の使用があまり考えられないと述べたが、この例から「あなた」が「大人のワード」として使われることがその理由として考えられる。米澤（2016）の調査結果の中でも「あなた」を使うと「かしこまりすぎ」だという意見があったが、これは「あなた」が形式性が強く、フォーマルな表現として使えることにつながる。つまり、同じ同等者と下位者であるとしても、10代における学校の友人や後輩と、20代以上における職場の同僚や部下・後輩は、その関係の形成や維持のために考慮すべき要素が異なるため、同一線上に置くことは適切ではないことがわかる。職場は、（もちろん一律的には言えないが、大まかな傾向として）その組織の利益を共通の目標として共有し、それを達成させるため個々の構成員に与えられた職務がある。また、職場はどちらかというとフォーマルで改まった場だと言えるため、「あなた」の選択に違和感を覚える可能性が低くなる。それに加えて、「あなた」を使うということは、その組織内に話し手の同僚や目下の人物が存在すると想定できるが、そのためには新人社会人である可能性が高い20代よりは、30代以上の「大人」を話し手としてイメージすることになる。このような「あなた」を用いる話し手に対するイメージ、つまり世界知識が日本社会の中で共有されているため、話し手の「年齢」という制約が「あなた」の選択に見られると言える。そして、このような制約や話し手へのイメージは、「あなた」の使用によるキャラクター性の表出とも関連付けて分析することができる。

一方、(64) からわかるように、「あなた」は聞き手への認識や情緒が対立して

いるスタンスを示す際によく使われるため、「あなた」が含まれる発話内容は、全体的にインポライトネスの文脈として解釈される可能性が高い。インポライトネスの文脈としては、相手への非難や皮肉などが考えられるが、このような言語行動を行う際にはそれなりに合理的または論理的でないと相手への攻撃として成立しない（相手が攻撃として受け入れない）可能性もあるため、やはり大人同士のやり取りの中でよく見られることになると考えられる。「あなた」を含む対称詞とインポライトネスとの関係については、第7章で詳しく論じることにする。

以上、日本語の対称詞における「あなた」の特殊性として、他の対称詞が大きく影響される性別やジェンダーという要素が「あなた」には弱い制約として働き、その代わりに話し手の年齢が比較的強い制約として働くことを考察した。対称詞の選択における制約に違いがあることは、対称詞の選択に階層が見られると解釈できる。

6.2. 「あんた」との比較：品位の観点から

一方、「あなた」のもう一つの特徴として「距離を示す」という点が見られたが、これについては「あなた」の異形である「あんた」と比較しながら考察を行うことにする。第5章で確認した「あんた」の特徴は、同等・目下の人物だけに使えること、常体のみと共起し、女性による使用が多い方であり、聞き手に対する話し手の感情の表出が見られ、そこから聞き手への遠慮や距離感は感じられないとまとめられる。そして、今まで見てきた「あなた」とほぼすべての特徴が相反していることがわかるが、ここでは「聞き手への遠慮・距離感」の有無にポイントを置いて考察を行う。

(65) 貝塚：おいおいおい、これは何でしょうか？

河野：あら、こちらは私がいつも以上に懇切丁寧に校閲したゲラじゃないですか。

貝塚：そうですか。って！付箋だらけじゃねえかよ！何だ？と思って見たら、大したことない所にもたっくさん付けやがって！このまま作家に渡すところだったよ！

河野：っしやあ！大成功！

貝塚：はあ？

河野：いや、こんだけ付箋付けとけばさすがのあんたもね、作家に渡す前にチェックするかなと思って試してみたのよ。

(中略)

貝塚：あのな、あのな！俺はな！コーエツ！俺はな、おまえと違って先生方を接待するのにとっても忙しいんです！

河野：そんなこと知らないわよ！経費で飲み食いしといて文句言ってんじゃないわよ、このタコが！

貝塚：タコタコ言うなっつうんだよ！

『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子』5話

(65) は、第5章で触れた (55) での編集部社員の貝塚 (30代男性) と校閲部新入社員の河野 (20代女性) との発話であり、(55) の用例で藤岩が後輩である河野に敬体と「あなた」を使っているのに対して、河野は明らかに自分より年齢も経歴も上である貝塚に対して「あんた」と常体を使っている。貝塚は、主に人気作家を担当している編集部の売れっ子社員で、普段河野を「コーエツ・おまえ」と呼びながら校閲の仕事を見下すような発言を躊躇なくする人物であり、河野も彼を「タコ・あんた」と呼んでお互いの職級や立場に全く遠慮せず自分の本音をぶつけ合う間柄だと言える。第5章でも確認したように、「あんた」と「おまえ」はそれぞれ女性と男性による使

用が多いという違いがあるが、このように気配りや遠慮が必要ない間柄の人物に使うことができることが共通しており、そのため親しい同等または目下の人物への使用が一般的だと言える。(65)の貝塚と河野が仲のいい関係だとは言いきないが、お互いの遠慮のない行動をある程度了解している点から、そのような行動や言葉遣いがお互い「許容」される関係だと言える。そのため、お互いを「あんた」や「おまえ」と呼んで、自分の本音を躊躇なく表出しているのが(65)でも確認できる。

一方、(55)での藤岩と(65)での河野は二人とも聞き手の仕事の進め方に対する対立のスタンスを示しており、それを示す言語的手段として藤岩は「あなた」と敬体、河野は「あんた」と常体を用いている。「あなた」と「あんた」からは共起する文体(style)の違いが見られるが、この違いは話し手の品位保持(demeanor)につながると考えられる。藤岩の場合、聞き手に対する対立のスタンスを示す一方、形式面では敬体と対称詞の中でも形式性が強い「あなた」を使っているため、この場合、発話内容とは個別に藤岩の品位は保持されていると言える。それに対して、河野は聞き手に対する対立のスタンスを示す際に「あんた」と常体を使っており、これは文体の下降(style lowering)になるため、河野の品位は保持されていないことになる。その代わりに、品位を気にせず自分の感情を思う存分表出したり、聞き手に対する自分の本音をより効果的に伝えることができると言える。

このように、「あんた」と比較してみると、「あなた」は聞き手への距離を示す機能に加えて、「話し手自身の品位を示す(または保持する)」機能を持つと言える。選択動機の観点から見ると、距離を示すことは「相手をどのように捉えているか」という意図が反映されていると考えられるが、品位を示すことは「自分をどのように見せたいか」という意図として考えられる。これらは話し手の表現意図と関わるため、対称詞の選択に関わる内的要因であり、「あなた」の選択に関わる強い動機として解釈できる。

また、このような違いは第5章で触れた『水曜どうでしょう』の大泉による発話か

らも確認できる。

(66) 藤村：断らないですもんね！やっぱ一流のシェフになると。

大泉：もちろん、もちろん、もちろん。私嬉しかったぐらい。

藤村：ああ、そうですか。

大泉：おお、あなたの口からね、そんな...言葉が出るとはね。

(藤村の笑い声)

藤村：ちょっとね、創作料理的なものになっちゃうけど...

大泉：いやいやいや、うん、いや、嬉しいですよ。そういうものをね、

まさかリクエストしてくれるとは思わなかったから。

(藤村の笑い声)

藤村：普通に言えね、明日、ああ、なんか午後のおやつにちょっと...

大泉：えーえーえーえー、それじゃつまらない。

藤村：買って来たんだろうけども...

大泉：こっちはね、そりゃああんたサルじゃないんだから。

藤村：(笑いながら) そうだね。

大泉：ただバナナ食ったって面白くない。

藤村：そうだね。

『水曜どうでしょう2019—北海道で家、建てます—』2話

(66) は、第5章の(61)と同じ文脈での会話で、大泉は一流シェフを演じながら凡人と一定の距離を置く「あなた」を使い続けるが、これは一流シェフとしての品位を保っているとも言える。それが、途中で「あんたサルじゃないんだから」のように、「あんた」の方へ転換されると、文体も下降し、話し手の品位は失われる。その代わり、「サルじゃないんだから」という本音が確認できる。つまり、「あんた」の使用

によって品位は犠牲にしたが、その分自分の本音や感情がはっきり伝えられると言える。

一方、第5章で触れた加藤（2019）では、親しい相手に対する「あなた」について「現代では、年下の親しい相手と呼ぶときのことばであるという意識が広まってきている」と示唆しているが、その使用場面については詳しく言及していない。確かに、「あなた」の用例の中では、特に聞き手と対立していない場面での使用も見られるが、それを「親密さの表示」として扱うには（67）のように説明が当てはまらないものもある。

（67）「あな、あなたの結婚式、ほら〇〇でやったじゃない？」

（70代男性→70代男性の高校同級生友人）

（用例42の再掲）

（67）は70代の男性による友人への発話で、（前後の文脈が把握できないため断定はできないが）特に相手への対立のスタンスや、加藤（2019）での親密さを示しているとは言いにくく、単に聞き手に結婚式の場所という情報を要求していると言える。話し手と聞き手が70代という点にも関連があると思われるが、ここでの「あなた」の選択動機として、相手に距離を置いたり対立のスタンスを示すよりは、「あなた」の使用によって自分の品位を示す、または保持するという意図が反映されたと考えた方が合理的だと言える。

そこで、本研究では、話し手が聞き手に対して特に対立のスタンスを示さない場面での「あなた」の選択には、話し手の「品位の表示・保持」という動機が反映されていることを主張する。つまり、「あなた」の選択には相手との距離の調整より、自分の品位の表示や保持の方が強い動機として見られる場合もあると言える。それに対して、「あなた」は自分の感情や本音を伝えたいという表現意図が対称詞の選択により

強く影響すると言える。

6.3. 「あなた」とキャラクター性

今までの考察から、「あなた」の選択には話し手の年齢が強く影響し、主な選択動機としては、聞き手への距離を示す（主に対立のスタンスの表示につながると言える）、話し手自身の品位を保つことが明らかになった。さらに、6.1節でも触れたように、「あなた」は「大人のワード」としての特徴があったが、以上のような特徴は、話し手のキャラクターの形成に影響すると考えられる。今まで見てきた『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子』の用例の中の藤岩を例として見てみると、名門大出身で仕事もできるエリートであり、相手の意見や価値観と対立する場合でも敬体を用いることから、「冷静で落ち着いている大人」というイメージがわいてくる。そして、藤岩による「あなた」の使用は、このようなイメージをより強化させていると言える。ここでのイメージとは、その人物のキャラクターとしても考えられるが、「あなた」が大人のワードとして使われる特徴から、藤岩のキャラクター性がより際立つと言える。

キャラクターと関連する要素として、金水（2003）による「役割語」が考えられる。役割語は、「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢，性別，職業，階層，時代，容姿・風貌，性格等）を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかに使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ」と定義されている。代表的な例としては、「そうじゃ、わしが知っておる。」に見られる老人博士による自称詞「わし」や文末表現「～じゃ」などが挙げられている。対称詞の使用によって話し手の外的要因としての属性がある程度読み取れることは確かだが（例えば、「あんた」は主に女性が、「きみ・おまえ」

は主に男性が使用するという情報）、「特定の人物像」がすぐに把握できるとはいいにくいため、対称詞の使用に見られるキャラクター性を役割語の観点から論じるのは適切ではないと言える。さらに、役割語は現実で実際にそのような言葉遣いをしているかどうかはあまり関係なく、先ほどの老人語のようにアニメなどの架空の作品の中で見られる場合が多いと言える。

一方、加藤（2019）では、役割語についてキャラクターを作ったり演じたりするためにことばを象徴的に使う方法であるが、キャラクターが決まるとそれに似つかわしい言葉遣いをしなければならない面もあることを指摘する。また、我々の日常では、ある程度キャラクターの分担が生じることがあり、特に、ある集団の中で似たような属性を持つ者が集まっているときには、自然にキャラクターの分担が生じて、それが本来の人格につながる場合も、場面ごとに異なる場合もあると説明する。そして、例えばクラスでは地味で目立たない人物が、サークルでは熱血漢で積極的にアイディアを出すトリックスター、バイト先では全体をとりまとめる有能なリーダー、といった別々のキャラクターを担当するのだとしたら、「話し方の使い分け」も必要であると述べている。

本研究での「あなた」の使用によるキャラクター性の表出は、加藤（2019）で説明する話し手の本来の人格につながる場合と、場面ごとに異なる場合の両方の可能性が考えられる。

(68) 藤村：次、ちょっと僕はあの、タラコとパイナップルっていう...

大泉：これね、ホントにあなたは成長した。

（藤村の笑い声）

大泉：実にいい組み合わせですよ。もう、浮かんでますから。

藤村：浮かんでる？

大泉：うん、任せてください。2皿目。

藤村：（笑いながら）お願いします。

『水曜どうでしょう2019—北海道で家、建てます—』2話

（用例（63）の再掲）

（68）での大泉の「あなた」の使用は、一時的にシェフというキャラクターを演じていることから、その場面に合わせた言葉遣いをしていると言える。そのため、一流シェフとして凡人と一定の距離を置く「あなた」を使うことによってそのキャラクター性をより際立たせていると考えられる。また、先ほどの米澤（2016）の調査結果で、10代が非常に近い友人に対してふざけて「あなた」を使う場合があることを確認したが、これも一時的に何らかのキャラクターを演じている可能性が高い。例えば、「あなた」が大人のワードとしてのイメージがある点から、クラスの非常に仲のいい友人同士で一時的に大人を真似しながらふざけたことを言う場面をそう難しくなく想像できる。そして、そのような有標の言葉遣いは、キャラクター性の形成により効果的だと言える。

一方、（64）での藤岩のように「あなた」の使用が話し手の本来の人格や性格と深くつながるものとして、映画『告白』（2010）の登場人物である森口（女性）の用例がある。『告白』は、同名の小説が映画化された作品であり、自分が担当するクラスの生徒たち（男子中学生2名：渡辺、下村）によって幼い娘が殺害された教師の森口が自分なりの方法でその生徒たちに復讐する過程を描いている。森口は、普段生徒たちと必要以上に親しくならないように接しており、生徒に対して常に敬語を使っている。娘の死や復讐について語るときも冷静で淡々な言い方をしているが、その中で見られる「あなた」は森口のキャラクターをより極大化させると言える。

(69) 渡辺：誰だ！

森口：ハハハッ...お久しぶりです。森口です。爆弾は私がお預かりしました。単純な知能が作り出した単純な仕掛けで解除するのは簡単でした。まあ調子に乗ってウェブでペラペラしゃべるから...

渡辺：黙れ！

森口：黙りません。あなたへの復讐の件ですが、たとえあなたを殺してもあなたは自分の命など少しく惜しくないようだし、殺す以外、何かいい方法はないかとずっとあなたのウェブをチェックしていました。見せていただきましたよ。愛するママへのラブレター。でも嘘はいけません。元担任教師として、あなたの嘘を私が正してあげましょう。

『告白』

森口の発話から、彼女にとって渡辺は復讐の対象であることがわかる。一般的には、命を奪いたいほどの復讐の対象に敬体を使うことは考えにくいですが、渡辺の「黙れ！」という発話からも読み取れるように、渡辺は森口と対敵関係にあって、森口の娘の死に関しても全く反省していないため、そこには渡辺に距離を置きたいという森口の強い動機が反映されていると考えられる。ちなみに、原作の小説でも森口による「あなた」の使用が何度も確認できる。

(70) 森口：愛するママへのラブレター、読ませていただきました。恥ずかしげもなくあれをウェブサイト上に掲載しているくらいなのだから、あなた自身は、自分を悲劇の主人公だと思っているのでしょうか。（中略）馬鹿ですか？ラブレターの中には、散々、馬鹿という言葉が使われていました。あなたはいったい自分を何様だと思っているのでしょうか。（中略）あなたは自分の父親にまで、生きる価値がないという表現をしていましたが、今あなた

が生きているのは誰のおかげなのでしょう。そんなこともわからずに、少し勉強ができるからといって、自分こそが選ばれた人間であると思っているあなたこそが、一番、何もわかっていない人間、あなたが言うところの馬鹿なのではないでしょうか。

『告白（文庫：287－289）』

（70）は、（69）と同じ文脈での渡辺に対する森口の「あなた」の使用である。渡辺は、幼い頃に離れた（正確には、捨てられた）母親に自分の才能を認めてもらいたく、危険な発明品を森口の幼い娘に実験して結果的には死に至らせるが、（70）の内容からもわかるように自分と母親以外の人間はすべて馬鹿で生きる価値もないと考えているため全く罪悪感を感じていない。その後、発明品が賞を撮ったことを母親に知らせようとするが、母親はすでに再婚していることを知って学校の講壇に爆弾を設置し、他の生徒たちをすべて道ずれにして自殺しようとする。その真相をウェブサイトで確認した森口が、爆弾を渡辺の母親のいる研究室に移し、結果的には愛する母親を殺したのは自分自身であることを語る電話の内容の一部である。

森口は、自分の娘を殺した渡辺に対して常に敬語を使いながら無表情で淡々とした言い方をしている。これは他の生徒に対しても同じであり、「名字＋くん・さん」の呼び方をして敬語を使うことから、愛する娘を亡くして自分の感情を殺して復讐だけのために生きている冷静なキャラクターであることが見えてくる。そして、作中の森口はシングルマザーの設定ではあるが、娘の父親である人物はHIV患者であるため、娘の将来のために結婚しなかったという事情がある。娘の死を知った父親はそれでも犯人たちを許すべきだという、いわゆる熱血聖職者のようなキャラクターとして描かれる。森口は、彼を聖職者と描写しながら他の人間と差別化しており、理想としては彼の意見に従いたい、娘を思うとやはり二人の生徒が許せない自分との間で乖離を感じたりもする。つまり、犯人である生徒たちに対する憎悪はとても大きい、愛す

る娘と夫の側に残りたい自分を犯人と同一線上に置きたくないという強い意図が働いていると言える。そのため、犯人に対しても距離感を与える呼び方と敬語を使っており、特に「あなた」の多用はその距離感を示すだけではなく、犯人に感情的になって彼らは全く反省しないため、感情を殺して冷静に復讐するという意図が読み取れる。そして、このような「あなた」の使用から対立する相手に対しても冷静なスタンスを保つキャラクターであることが伝わりと言える。もし、この文脈で「あんた」を使うと、そのような冷静なキャラクター性を伝えることは難しいと言える。

6.4. 対称詞間の転換と発話効果

最後に、一つの文脈の中で同じ聞き手に対して「あなた」と他の対称詞が同時に見られる用例を分析し、対称詞間における転換の動機と発話効果について考察する。

(71) は、複数形が使われたものではあるが、同じ人物に対する「あなた」と「きみ」の使用である。

(71) 鈴井：久々に、旅に、我々4人で。

藤村：はい、覚えてます？

大泉：おおお、いや、行きましたよ、行きましたよ。これ、え？あなたたちにしてみたらどっちがどうだったんすか？この、崩落の後ですか？あれは。

藤村：そうですね、うん。

鈴井：崩落の後。

大泉：えっ？あの4人のあの旅ってあなたたちはこの崩落を踏まえた後の
あなたたちなの？

鈴井：そうそう。

藤村：はい。

大泉：あんだけ長い間一緒にいてそれ一言も私に言わなかったの？

藤村：はい。

大泉：恐ろしい人たちだなー。

（藤村と鈴井の笑い声）

藤村：「どうでしょう」幹部ですよ。

大泉：怖いねえ、きみたちってホントに怖い！

『水曜どうでしょう2019—北海道で家、建てます—』11話

(71) は、「あなたたち」と「きみたち」という対称詞の複数形が見られる場面であり、発話内容から、彼らが建てた家が途中で崩落してしまったことが把握できる。大泉が家の崩落の真相を把握する段階で、『水曜どうでしょう』のまた別の企画である海外旅行に関する話が出てくるが、すでに崩落を知っていたスタッフたちが海外旅行の間ずっと本人を騙していたことを悟る。発話の進行とともに大泉は家の崩落と自分が長い間騙されていたことを悟るが、その時スタッフに対して「あなたたち」という対称詞の複数形を使っている。大泉と鈴井を含むスタッフとは約10年ほどの年齢の差があり、普段大泉は複数のスタッフを呼ぶとき「皆さん」または「あなたたち」を使っている。ここでの「あなたたち」は、1年近く自分を騙してきたことにショックを受けた大泉がスタッフとの距離感を効果的に示していると言える。その距離感が、「恐ろしい人たちだな」の部分から皆で笑うことによって打ち解けられ、より親近感を与える「きみたち」にシフトされていると解釈できる。つまり、同じスタンスを示す発話の中でも、対称詞の転換によって聞き手への距離感を微調整していると言える。

(72) 浅野：随分と勝手なことをしてくれたものですね、半沢融資課長。

半沢：どういう意味でしょうか？

江島：東田の海外不動産差し押さえの件だ！

浅野：私はそんな報告聞いていませんし、許可した覚えもありませんよ。

半沢：一刻を争う事態でしたので、ご報告が遅れたことはお詫びします。

浅野：結局、国税に持っていかれたら元も子もないですね。

半沢君、そんなに好き勝手やりたいなら、

どこか田舎の小さな会社に出向をお勧めするよ。

そこで自由に伸び伸びやりたまえ。

半沢：せっかくですが、私はこの銀行に骨を埋める所存でおります。

浅野：それを決めるのはきみではない！まあ、明後日の臨店ではせいぜい...

半沢：臨店？ 何の話です？！

江島：寝ぼけるな、半沢！明後日裁量臨店があると言ったろう！

半沢：聞いておりません！しかも明後日とは！

通常、裁量臨店が行われる場合、1週間前後の準備期間があるはずです。

浅野：私はだいぶ前に伝えたはずですよ。

半沢：何かの間違いでは？

浅野：間違えているのはあなたです！

そうやって自分のミスを他人のせいにするのはよくないですねえ、

半沢融資課長！

『半沢直樹』3話（用例（10）の再掲）

（72）の例からも、同じ人物に対する「きみ」から「あなた」へのシフトが見られる。（71）との違いとしては、（71）では「きみ」と「あなた」のシフトによる文体の調整が見られなかったが、ここでは「きみ」の場合には常体と使っていて、「あなた」の方にシフトされるときには敬体と使われていることが確認できる。また、ドラマの中で、浅野は「きみ」を使うときには感情的になって大声を出しているが、その直後にすぐ落ち着いた姿を見せしている。このことから、「あなた」は話し手の品位

を示す機能があると言える。また、話し手と聞き手である浅野と半沢が両方とも中年男性である点にも注目する必要がある。「きみ」は、男性同士で自然に使われる対称詞であるが、「あなた」はどちらかというニュートラルな方であるため、（対敵関係ではあるが）男性同士の間で無標の対称詞として使える「きみ」を使うときに浅野は自分の感情をより強く表出していると言える。それに対して、「あなた」を使うときには品のある上司としての振る舞いを見せようとする意図が読み取れる。

一方、分析資料の中で「あなた」と他の対称詞における転換を観察した結果、「きみ」や「あんた」は「あなた」と同一文脈の中での使用が見られたが、「おまえ」は管見の限り「あなた」との転換が見られなかった。これは、「あなた」が持つ距離を置く機能や品位保持の機能と関わりがあると考えていて、「あなた・きみ・あんた・おまえ」という4つの対称詞における待遇度の尺度から考えると、「おまえ」が待遇度が相当低い方に位置するため、「あなた」との転換があまり見られないのではないかと思われる。

6.5. 第6章のまとめ

本章では、日本語の対称詞の中で、その振る舞いが特殊である「あなた」を中心に考察を行った。その結果、「あなた」は他の対称詞に比べて話し手の性別（またはジェンダー）はあまり影響しないが、話し手の年齢による制約が大きい方であることを確認した。「あなた」以外の対称詞が話し手の性別やジェンダーによる影響を大きく受けることを考えると、やはり「あなた」は対称詞の中でも特殊な表現であることがわかる。また、異形である「あんた」と発話効果を比較することによって、「あなた」は聞き手に対して距離を示すという機能に加えて、話し手の品位を表示・保持する機能を持つことを用例を基に明らかにした。「あなた」の使用の中には、特に距離を置いたり対立のスタンスを示さない場面での選択も見られるが、そのような場合、聞き

手との距離の調整より話し手自身の品位を示すという動機が強く反映されていることを指摘した。

一方、相手に距離を置いて冷たい感じを与えたり、自分の品位を表示することは、話し手のキャラクターの形成に影響すると言える。そのため、ドラマや映画の中の落ち着いていて冷静な性格の人物を描くときには「あなた」と敬体を使うことによってそのキャラクター性をより強化できると言える。これは、10代が親しい友人同士で「大人」というキャラを真似して（一時的に演じて）使う「あなた」とも関連があると言える。そして、同じ聞き手に対する文脈の中で、「あなた」は「あんた」と「きみ」との間では対称詞間の転換が見られたが、待遇度という尺度の中で比較的低い位置を占める「おまえ」の場合、「あなた」との転換が一般的ではないことが確認できた。そこから、同じ対称詞間における転換だとしても、同じ尺度を共有していればその転換可能性が高くなることが考えられる。

第7章 対称詞とインポライトネス

第7章では、インポライトネスの文脈における対称詞の使用について考察する。日常の発話や会話の中では、聞き手を意図的に攻撃する文脈の中で対称詞が使われる場合も多く見られる。日本語におけるインポライトネスの研究はまだ始まったばかりだと言えるかもしれないが、実際にインポライトネスと深く関わる言語現象が見られる限り、その選択動機と発話効果を明らかにする必要がある。そこで、本研究ではインポライトネスの研究として比較的まとまっているCulpeperの先行研究を中心に検討し、インポライトネスの研究における対称詞の位置づけとその発話効果を考察する。一方、日常の発話の中ではインポライトネスとして扱うにはやや微妙である、からかいや皮肉などの文脈での対称詞の使用もよく見られる。本研究では、それらがインポライトネスにおいて逸脱的なものであると捉え、逸脱的インポライトネスにおける対称詞の使用として区分してその発話効果についても考察する。

7.1. 本研究におけるインポライトネス

日本語の研究の中でインポライトネスをどのように取り入れるかは未だに議論の余地があり、その枠組みもまとまっていないようである。ここでは、主にCulpeper (2011) とCulpeper and Haugh (2014, 椎名・加藤・滝浦・東泉訳 (2020)) の先行研究に触れながら、インポライトネスの文脈における対称詞の使用とその位置づけを考察する。

インポライトネスは、相手を意図的に貶めたり侮辱したりするための言語行為的ストラテジーだと言えて、ポライトネスに比べてその形式（語彙的項目）が固定されている場合が多い。例えば、「その帽子、とても似合ってますよ！」という言語形式は、

聞き手の良く思われたいというポジティブ・フェイスに配慮したポジティブ・ポライトネスのストラテジーとして理解できるが、同じ形式であっても非常に仲の良い友人同士や、対立関係にある人物などに対して「全然似合っていない」という、からかいや皮肉のメッセージとして解釈されることもある。このように、ポライトネスを判断するには、形式だけでは不十分であり、発話者たちの関係や発話場面といった「文脈」を参照する必要がある。つまり、ポライトネスが文脈依存的な特徴を持つことに対して、インポライトネスは比較的形式から判断できる場合が多いと言える。そしてこの形式は、会話参加者の間でその発話効果（インポライトネスであること）が世界知識としてすでに共有されていると必要がある。

Culpeper (2011) では、コーパス資料に対してイギリスの学部生がラベル付けをしたインポライトネスな出来事を6つのカテゴリー²⁶に分類しており、その中で最も高頻度で現れたインポライトネスの形式は、侮辱 (insults) であったと報告する。侮辱の中にはさらに4つのグループ²⁷が見られるが、本研究の対称詞と関わるものとして「Personalized negative vocative : 個人に向けられた否定的呼びかけ語」が挙げられる。なお、Culpeper (2011) のデータの中で、侮辱とは別に、他の重要なインポライトネスの形式タイプとして、辛辣な批判・文句、挑戦的あるいは不快な質問や前提、偉そうなふるまい、メッセージの強調表現、却下、黙らせることば、脅迫、悪態と悪意の祈願、役に立たない割り込みなども報告されている (椎名他訳2020)。

²⁶ 順番に、上から目線 (patronising)、無配慮 (inconsiderate)、無礼 (rude)、攻撃的 (aggressive)、不親切 (inappropriate)、人を傷つける (hurtful) の6グループが見られる。詳しくは、Culpeper (2011 : 93-97) を参照されたい。

²⁷ 1) Personalized negative vocative : 個人に向けられた否定的呼びかけ語、2) Personalized negative assertions : 個人に向けられた否定的な陳述、3) Personalized negative reference : 個人に向けられた否定的な指示、4) Personalized third person negative references (in the hearing of the target) : 三人称の個人に向けられた否定的な指示 (相手に聞こえるところで) の4グループが見られる。詳しくは、Culpeper (2011 : 135) を参照されたい。

(73) Personalized negative vocative : 個人に向けられた否定的呼びかけ語

[you] [fucking/rotten/dirty/fat/little/etc.][moron/fuck/plonker/dickhead/

berk/pig/shit/bastard/loser/liar/minx/brat/slut/squirt/sod/bugger/etc.] [you]

[てめえ] [くそったれの/腐った/汚い/デブの/チビの/他][アホ/畜生/マヌケ/バカ/

あほう/豚/クソ/野郎/つまんねえヤツ/嘘つき/あばずれ/ガキ/あま/ガキ/ジャリ/やな

ヤツ/他][おまえ]

Culpeper (2011 : 135)

日本語訳 : 椎名他訳 (2020 : 279)

上記の例から見ると、日本語の対称詞の中で、その形式自体がインポライトネスになり得るものは「おまえ・おめえ・てめえ・きさま」が考えられる。(73)の例にもある「てめえ」の用例として、次のような使用が見られる。

(74) 藤野 : ユズピー！

ユズヒコ : 藤野。

藤野 : (荒い息) ま、ゆっくり行かね？もうどうせだめだろう？

ユズヒコ : 林って、ぜってえ遅刻してきたヤツに当てるんだよな。

藤野 : ああ、そうだっけ。

ユズヒコ : んで、答えられるまでずっと黒板の前に...

藤野 : ほう... よっし！

(走り出す藤野)

ユズヒコ : うお！おい！きったねえ！てめえ、こらあ！

『あたしんち』57話 : ユズ、男同士

(74) の発話者である藤野とユズヒコは中学生男子でクラスメイトである。彼らは

クラスの中でも最も近い友人であり、よく互いのことをからかったりもする冗談関係の間柄である。藤野は普段ユズヒコのことをユズピーというあだ名や「おまえ」で、ユズヒコは藤野のことを名字や「おまえ」で呼んでいる。(74)は学校に遅刻しそうなユズヒコが学校に向かって走っている途中、藤野が彼を呼び掛けて一緒に登校する場面である。二人が出会ったときはお互いを普段の呼び方(固有名詞)で呼んでいるが、発話の中に登場する教師(林)の時間に遅刻すると嫌な思いをするという情報を聞いた藤野が急に学校に向かって走り出すと、ユズヒコが「てめえ、こらあ!」と叫びながら藤野を追う。ユズヒコは、どちらかという繊細で落ち着いているキャラクターであり、普段藤野に対して「藤野」または「おまえ」という呼び方を多用する。ここで使われた「てめえ」は、自分だけ遅刻を免れようとする藤野に対する情緒的な対立のスタンスが反映されており、「きったねえ!」という発話からも藤野の行動に対する強い批判と怒りが読み取れる。情緒的な対立のスタンスとは、第5章でDu Bois (2007)による認識的スタンス(epistemic stance)と情緒的スタンス(affective stance)を話し手の聞き手に対する対立・非対立という観点から本研究の中で再分類したものであり、後にも触れることにする。

ただし、「てめえ」は親しい男性同士の間では冗談やふざけた場面などで使われることも多いため(「おまえ・おめえ」なども似たような表現として考えられる)、形式から明らかにインポライトネスであることを判断できるのは「きさま」ほどではないと思われる。実際に、ユズヒコの「てめえ」に対して、藤野は全くダメージを受けておらず、(74)の場面が終わるまで笑いながらユズヒコをからかっているが、そこからユズヒコの「てめえ」が藤野にとってはインポライトネスとして受け入れられていないとも考えられる。そこから、「てめえ」が仮にインポライトネスの形式だとしても文脈や判断する観点(話し手なのか聞き手なのか)によって解釈がずれることが確認できる。同じく、「きさま」もこのような文脈から完全に自由ではないことが予想される点から、日本語の対称詞がインポライトネスの形式であると考えるのは適

切ではないことがわかる。そこで、本研究では、日本語の対称詞を「インポライトネスへの解釈を強化・確定させる言語的手段」として扱うことにする。

7.2. インポライトネスの解釈を確定する対称詞

第5章でも確認したように、「おまえ・おめえ・てめえ・きさま」は、対称詞の中でも比較的乱暴な語感を与える表現であり、親しい男性同士における使用がステレオタイプだと言えるため、喧嘩や強い批判などでのこれらの使用はインポライトネスの文脈をより強化・確定させると言える。もちろん、これら以外の対称詞がインポライトネスの文脈で使われる場合も多く見られる。

(75) 江島：分かってるのか？5億だぞ5億！半沢、おまえのせいで損失したんだ！

土下座のひとつもしたまえ！

半沢：私の土下座でご満足いただけるならいくらでもします。

ですが、今は一刻も早く事態の真相を突き止め5億を回収することが
先決だと思います。

『半沢直樹』1話

(76) 浅野：随分と勝手なことをしてくれたものですね、半沢融資課長。

半沢：どういう意味でしょうか？

江島：東田の海外不動産差し押さえの件だ！

浅野：私はそんな報告聞いていませんし、許可した覚え也没有せんよ。

半沢：一刻を争う事態でしたので、ご報告が遅れたことはお詫びします。

浅野：結局、国税に持っていかれたら元も子もないですね。

半沢君、そんなに好き勝手やりたいなら、

どこか田舎の小さな会社に出向をお勧めするよ。

そこで自由に伸び伸びやりたまえ。

半沢：せっかくですが、私はこの銀行に骨を埋める所存でおります。

浅野：それを決めるのはきみではない！まあ、明後日の臨店ではせいぜい...

半沢：臨店？ 何の話です？！

江島：寝ぼけるな、半沢！明後日裁量臨店があると言ったろう！

半沢：聞いておりません！しかも明後日とは！

通常、裁量臨店が行われる場合、1週間前後の準備期間があるはずです。

浅野：私はだいぶ前に伝えたはずですよ。

半沢：何かの間違いでは？

浅野：間違えているのはあなたです！

そうやって自分のミスを他人のせいにするのはよくないですねえ、

半沢融資課長！

『半沢直樹』3話（用例（10）の再掲）

（75）と（76）での「おまえ」と「あなた」は、同じ聞き手（半沢直樹）に対するインポライトネスの文脈での使用であり、江島と浅野のどちらも半沢とは敵対関係にある人物である。彼らは銀行に勤めている中年男性であり、支店長の浅野（50代）、副支店長の江島（50代）、融資課長の半沢（40代）の順に職級が高い。浅野は意図的に計画した5億の融資損失をすべて半沢の責任にして彼を出向させようとする立場であり、江島は支店長の座を狙っている人物であるため、浅野の出世（による異動）を積極的に支持する立場である。半沢は彼らと対立する立場であり、融資損失の問題を解決していく。

ここで、形式的な部分を見てみると、（75）では「おまえ」と常体が共起しており、（76）では「きみ・あなた」と敬体が共起している。発話内容は両方とも聞き手であ

る半沢への攻撃として解釈できるが、対称詞の中でも比較的乱暴な語感を与える「おまえ」は（75）でのインポライトネスの発話効果をさらに強化する手段として使われていると言える。（76）では、江島は強圧的な断言の「だ」や「寝ぼけるな、半沢！」という、半沢への明確なインポライトネスの表現を使っている。そのような文脈の中で、浅野は敬体とともに「あなた」や「きみ」を使っているが、そこから江島が形成した強圧的な雰囲気に乗ってインポライトネスな陳述をしながらも、江島とは違って自分は品位のある言葉遣いをしようとする選択動機が読み取れる。「あなた」や「きみ」はその形式性が強いため距離感を与える機能を持つと言われているが、（76）の場面ではそれによって上から目線で冷静に相手を貶める発話効果をより強化させると言える。

一方、ここまでは主に男性同士におけるインポライトネスの文脈での対称詞の使用を見てきたが、女性同士、さらに異性間における使用もよく見られる。

（77） 貝塚：まったくおまえが余計なことをいちいち口出ししたせいで内容は変わるわ、ページ数は増えるわで、こっちは大迷惑だよ。

河野：まあ、いいじゃん。中身濃くなったんだから！

貝塚：そんな単純な問題じゃねえんだよ。直しの回数が見積もりと違ったら追加料金だって払うんだぞ？

河野：えっ、そうなの？！

貝塚：小森谷さんもそういうことを知らないおまえ並みの素人だからな。節約ブログとか言って、他のブログ本より金かけてりゃ世話ねえや。

河野：まあ、そこは売って元取ろうよ、ねっ！

貝塚：だからこの本がどれだけ…。まあいいや、じゃあいいんだな？後書きに名前入れても。

河野：もちろん！

藤岩：あんまり浮かれ過ぎるのはいかなものかと思います。

河野：えっ？

藤岩：校閲とは、本造りを陰で支える存在です。関わるのは文字であって作家や内容ではありません。あなたのように作家と直接会うべきではないし、ましてや編集者のように内容に口を挟み、新たなアイデアを出すなんてもつてのほかです。校閲は内容には干渉しない。これは基本中の基本です。

河野：藤岩さん、焼きもち焼いてるんですか？

分かった！後書に名前入れてもらったことないんでしょう？だから！

藤岩：ふざけないでよ！

河野：え？

藤岩：私があなたのことを妬む？そんなことがあるわけないでしょう？！

バカも休み休みに言いなさい！！

『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子』2話

(77) は第5章でも触れた用例だが、後半の部分にインポライトネスと関連する発話内容があるため、その部分を加えてここに再掲している。ここでの発話者は出版社の校閲部の社員である藤岩（30代女性）と河野（20代女性）による会話であり、河野が新入社員であるため二人は職場での先輩と後輩の関係だと言える。河野は元気のあふれる情熱的なキャラクターで、校閲部の社員でありながら本の内容の事実確認を直接行ったり作家と直接会ったりして、本の内容に深く関わる形で仕事を進める人物である。それに対して、藤岩は冷静で落ち着いているキャラクターであり、「校閲は内容には干渉しない」という発話からも確認できるように、仕事に関しては河野とは正反対のスタンスを持っていると言える。(77) では、そのような河野の仕事のやり方が望ましくないと判断した藤岩が校閲の仕事について冷静にアドバイスをするが、河野はあまり真剣に思わず、特に関係のない後書きの話を持ち込んで「やきもち焼いてるんで

すか」と尋ねている。その発言に対して藤岩が激怒している場面であり、「バカも休み休みに言いなさい」という形式から河野への攻撃の文脈であることが読み取れる。その中で対称詞「あなた」が使われているが、ここでは河野への認識的にも感情的にも対立的なスタンスを示し、インポライトネスとしての攻撃の意図を伝えるため、その文脈をより強化させる言語的手段として対立のスタンスを示す際によく使われて、相手に距離を置く「あなた」が選択されたと解釈できる。

また、以下のように、第6章で見てきた『告白』の生徒たちに対する森口のインポライトネスとしての「あなた方」の使用も見られた。

(78) 森口：たとえ本当に血を混ぜたとしても、感染する確率なんてほぼゼロです。万が一感染しても、エイズは今や死の病などではありません。治療で発症を防げるんです。桜宮も、併発したガンの発見が早ければ、死ぬことはなかったでしょう。そんなことも知らず、HIVというだけで震え上がる、あなた方のあのマヌケ面ったら...

北原：先生...

『告白』

(78) の「あなた方」は、対称詞の複数形で、聞き手は森口のクラスの生徒の一人である北原個人であるが、北原を含む生徒たちに対するインポライトネスな発話内容を述べている。「あなた方」は、形式性の強い「あなた」と、複数形の成分の中でも待遇度が高い「方」が使われたため、形式だけを見ると待遇度が高いと言える。しかし、直後のインポライトネスと解釈できる「マヌケ面」と使われることにため、実際に敬意を示しているとは考えにくく、森口は生徒たちの担任であり、目上の存在であるため、この「あなた方」からは上から目線で生徒たちを「マヌケ」だと見下す、認識的・情緒的な対立のスタンスが読み取れる。そしてそれが「マヌケ面」という形式

と使われることによって、インポライトネスとしての発話効果がより強化されると言える。以上から、日本語の対称詞はインポライトネスの文脈で使われることによって、その解釈をより確定させる言語的手段として位置づけることができる。

7.3. 逸脱的インポライトネス

一方、先ほどの(74)の「てめえ」が聞き手にとってはインポライトネスとして解釈されなかったように、インポライトネスも文脈に依存する傾向があることを確認した。さらに、インポライトネスの中には解釈によってその扱いが微妙なものもあり、からかい(banter)や冗談(joking)などがその代表的な例として挙げられる。Culpeper and Haugh (2014)では、これを「擬似インポライトネス(mock impoliteness: 用語はLeech (1983) で使われたとしている)」と呼んでおり、インポライトな形式を使うが、その効果が文脈によって打ち消されているものであると説明する。例えば、(74)の「てめえ」が話し手が怒っていない文脈で使われたとすれば、非常に仲の良い男子同士における擬似インポライトネスの使用だと解釈できる。Culpeperたちも指摘するように、従来の(イン)ポライトネスの研究の中にはこれらを考慮しているものが多くはなく、インポライトネスの中で明確に分類されているわけでもないため、これらの位置づけや解釈のプロセスについては今後の課題として残されていると言える。

また、擬似インポライトネスよりもさらに暗示的にインポライトネスを示唆する文脈もあって、Culpeperたちは当てこすり(sarcasm)や皮肉(irony)を挙げている。これらは、従来の(イン)ポライトネスの研究の中でもその扱いが難しいものとされていて、Culpeperたちはこれらに関する3つの考慮すべきポイントとして、1)話し手・聞き手・分析者のうち、誰による(イン)ポライトネスかという問題、2)話し手と分析者は、どのようなモラルに則ってポライト・擬似ポライト・インポライトの判

断を下すのかという問題、3)分析者はどのように（イン）ポライトネスの評価基準を作り上げるのかという問題を指摘している。

本研究では、擬似インポライトネスや暗示的なインポライトネスをインポライトネスにおける「逸脱的」なものとして位置づけて、そのような文脈における対称詞の使用について考察する。以下に、本研究における逸脱的インポライトネスの定義と説明を述べる。

(79) 逸脱的インポライトネス：インポライトネスの解釈において、形式と発話効果が

ずれている場合。このずれの種類によって、逸脱的インポライトネスをさらに2つに分類できる。

a. 形式上はポライトネスだが発話効果がインポライトネスであるもの：皮肉やマウントが挙げられる。形式上は相手をほめるポジティブ・ポライトネスの表現を使うが、その発話効果は相手の行動の価値を下げて、自分の方を上げるインポライトネスとして解釈される。

b. 形式上はインポライトネスだが発話効果がポライトネスであるもの：からかいや冗談が挙げられる。形式上は相手を侮辱するインポライトネスの表現を使うが、その発話効果は相手への親しみを示すポジティブ・ポライトネスとして解釈される。

形式と発話効果のずれは、ことばの解釈における形式レベルと推意レベルのずれとも言えて、語用論の領域では推意レベルの方が優先される。（イン）ポライトネスの場合もそうであるが、この逸脱的インポライトネスの解釈の際には、話し手と聞き手がこのずれによる発話効果を「共有」している必要がある。従来のポライトネスは話し手中心の理論であったのに対して、インポライトネスの研究では聞き手が話し手の発話をどのように受け入れるのか（聞き手中心）に重点をおいており、話し手が発

した断片的な発話だけではなく、前後の文脈までを考慮に入れる談話論的ポライトネスのアプローチ（discursive politeness approach）を取る。本研究での逸脱的インポライトネスの分類が、インポライトネスの研究の全般に適用できるかは今後も検討の余地があると思われるが、対称詞の発話効果を考察する際に、従来のポライトネス理論（主に、Brown&Levinson1987による理論）だけでは説明が不十分になる可能性が高いため、その説明を補うため設けたものとして理解されたい。

また、このようなずれは第5章で考察した「スタンス」とも関連付けて考えられる。スタンスの中には、認識と情緒の対立有無が混在しているものもあったが、そのようなタイプがここでのインポライトネスや逸脱的なものを説明するに効果的であると考ええる。念のため、本研究におけるスタンスの定義と分類を以下に再掲する。

(80) 本研究におけるスタンスの定義と説明：発話時における話し手の聞き手に対する

「捉え方」。聞き手への「評価」とも言える。話し手の発話内容（命題）からその捉え方や評価が判断できる。スタンスの類型を大きく分けると、「認識的スタンス」と「情緒的スタンス」があって、認識的スタンスとは、聞き手の意見や価値観などに対する話し手の捉え方だと理解できて、聞き手の意見に対する対立有無をそれぞれ認識的な対立・非対立のスタンスとして分けられる。情緒的スタンスは、聞き手の人間性や言動に対する話し手の感情的捉え方だと言えて、同じく聞き手に対する対立有無をそれぞれ情緒的な対立・非対立のスタンスとして分けられる。また、認識的・情緒的スタンスは、Du Bois（2007）の分類の上では、同じく「位置づけ」を示す際のスタンスであるため、単一の形でも複合された形でも見られると言える。

(81) 本研究におけるスタンスの分類

①単一型

a. 認識的な対立・非対立のスタンス

b. 情緒的な対立・非対立のスタンス

②複合型

a. 認識的・情緒的な対立のスタンス

：聞き手に対して話し手が認識的にも情緒的にも対立していることを示すスタンス、例えば「あなたの考えにも賛成できないし、あなたも嫌いだ」

b. 認識的な対立・情緒的な非対立のスタンス

：話し手と聞き手における意見や価値観は対立しているが、感情的な対立は見られないスタンス、例えば「あなたは嫌いじゃないけど、あなたの考えには賛成できない」

c. 認識的な非対立・情緒的な対立のスタンス

：話し手と聞き手における意見や価値観は対立していないが、感情的な対立が見られるスタンス、例えば「あなたの考えは間違っていないけれど、あなたが嫌いだ」

d. 認識的・情緒的な非対立のスタンス

：話し手と聞き手が認識的にも情緒的にも対立していないことを示すスタンス、例えば「あなたの考えにも賛成するし、あなたもいい人だと思う」

スタンスのタイプのうち、複合型のbとcは認識と情緒のスタンスが混在しており、それらにおける対立・非対立の方向性がずれていると言える。第5章でも触れたが、このように認識と情緒が混在する場合には、ある言語行動を行った場合、その発話効果（解釈）がポライトネスとインポライトネスの境界上に置かれる可能性が高い。さ

らに、認識と情緒における対立・非対立の方向性がずれている場合、感情レベルである情緒的スタンスが強く機能する可能性が高い。つまり、複合型bの場合は認識的なスタンスは対立しているが、情緒的なスタンスが対立しないため、全体の方向性としては非対立のスタンスの方に移り、話し手の発話はポライトネスの方に解釈される可能性が高いと言える。それに対して、複合型cの場合は認識的なスタンスは対立しないが、情緒的なスタンスが対立するため、対立のスタンスの方に移り、話し手の発話はインポライトネスの方に解釈される可能性が高いと言える。

本研究での逸脱的インポライトネスをスタンスの観点から見ると、からかいや冗談は複合型bのように、感情的には非対立のスタンスを持っているため、インポライトネスとポライトネスの近接化の発話効果が同時に見られたり、全体的な解釈はポライトネスの方に向かう可能性が高いと言える。それに対して、皮肉やマウントは認識と情緒のスタンスがすべて対立している可能性が高いため、ポライトネスとしての形式を使っているものの、全体的な発話効果としては相手を下げるというインポライトネスの方に向かう可能性が高いと言える。そこで、以下では逸脱的インポライトネスの代表例ともいえる「からかい」と「皮肉」の文脈における対称詞の使用を考察する。

Culpeper and Haugh (2014) では、からかいについて日常的に使われる鍵語（キー）であり、非常に儀式化された形式におけるある種の言語ゲームとして存在すると説明する。このからかいの最終的な発話効果は聞き手への親しみを示すポジティブ・ポライトネス（第5章で触れた滝浦2008・2020による「近接化」とも理解できる）になる可能性が高い。以下に、からかいの文脈における「おめえ」の用例を挙げる。

(82) 藤野 ： あっちいー！んな、ユズピー、おまえんち寄ってっいいい？

ユズヒコ： ああ！いいよ、ジュースでも飲んでけよ。

藤野 ： へへへ、サンキュー。

それはそうと、今日おまえんちいらっしゃるのかよ？

ユズヒコ：あ？いらっしゃるって誰が？

藤野　　：決まってるだろう、ミカンさんだよ。

ユズヒコ：ミカンさん？

藤野　　：どうなんだよ、いらっしゃるのか？

ユズヒコ：塾の夏期講習とかで居ねえけど？

藤野　　：んあー、ミカンさんいねえのかよ。なんだ、ショック。

ユズヒコ：はあ？

藤野　　：いつだったかほんの一瞬すれ違っただけだと、まぶしかったなー、
あのときのミカンさん。またお会いできると思ったのに...

ユズヒコ：ハハハハハ！

藤野　　：お？

ユズヒコ：（笑いながら）お、おめえ、まだそんなこと言ってんのかよ。

ハハハ！

藤野　　：なんだよ！俺は真面目なんだ！

ユズピーは弟だから気づかないんだよ、あの可憐さに！

ユズヒコ：か、可憐？？どこがー！

（笑いながら）冗談やめてくれい、腹いていー。

『あたしんち』126話：ハナ毛疑惑っ

(83) 藤野　　：ところであの人は本当にミカンさんの実のお母上か？

ユズヒコ：は？当たり前だろう？

藤野　　：あんまし似てない親子なんだな。

ユズヒコ：そっくりだよ、おめえが知らないだけで。

『あたしんち』126話：ハナ毛疑惑っ

(82) と (83) は、先ほどの (74) の発話者であるユズヒコと藤野による会話であり、二人はユズヒコの姉であるミカンの話をしている。藤野は以前ユズヒコと街を歩いているときに偶然ミカンとすれ違うが、そのときからミカンへのあこがれを抱いている。ミカンはユズヒコと比べるとおっちょこちょいな性格であるため、ユズヒコはそんな藤野が理解できず、ミカンに会いたがる藤野に爆笑しながら「おめえ、まだそんなこと言ってんのかよ」とからかう。その後、(83) でユズヒコの家に行った藤野が掃除に張り切っているユズヒコの母の姿を見てショックを受け、「本当にミカンさんの母なのか」と尋ねる。ユズヒコは、相変わらずミカンに対するずれたイメージを持っている藤野に「おめえが知らないだけ」と言いながら母とミカンがそっくりであることを伝える。(82) と (83) の文脈では、ユズヒコの方が姉であるミカンに関する情報を多く持っており、ユズヒコから見ると藤野はミカンに対する間違った情報を持っていることになる。そのため、比較的情報が乏しい藤野をからかいながら「おめえ」よりさらにインフォーマルな「おめえ」を使うことによって、よりふざけている発話効果が強化されると言える。この「おめえ」の使用は、意図的に文体を下降させること (style lowering) によって品位を下げることになるが、ユズヒコと藤野の間ではこのような形態のくずれや文体の下降が許容されていると言える。そのため、形式上は「正確な情報も知らないおめえ」というインポライトネスの形を取るが、文体の下降が許される彼らの間では親友による親しみを込めたからかい (近接化) として解釈される。そして、聞き手である藤野もこのような「おめえ」の発話効果を理解しているため、喧嘩になったりユズヒコを攻撃したりせずに、ユズヒコのからかいに「俺は真面目なんだ！」と反応してやり取りが終了する。

以上、形式上はインポライトネスだが、発話効果がポライトネスである逸脱的インポライトネスとして「からかい」を中心に見てきたが、日本語における同じタイプのものとして「つつこみ」が考えられる。つつこみは、日本語の日常のやり取りの中でよく観察できる談話構造であって、この文脈では相手の言動や考え方などを貶める形

式が多く使われる。この形式だけを見ると一種の侮辱のようにも見えるが、話の全体的な雰囲気はからかいや冗談のように明るい場合が多く、聞き手が全くダメージを受けない、つまりインポライトネスとして受け入れていない場合もよく見られる。Culperたちの先行研究はどちらかというといギリスを中心とした西洋言語を主な考察対象としているため、本研究では日本語の中で多く見られる逸脱的インポライトネスとして、この「つつこみ」にも触れておきたいと思う。以下に、つつこみの文脈における「あなた・きみ・おまえ」の用例を示す。

(84) 藤村：俺はもうディレクターの勘なんかねえんだから。

大泉：やだなー、言われたくないなー。

俺はもうディレクターの勘なんかないんだからって言われてるヤツの番組にだよ、ウチの事務所は無条件でスケジュール切るからね。

藤村：ただ役者の勘はある。

大泉：要らないよバカ野郎！おまえに役者の勘なんてね！

(スタッフたちの笑い声)

大泉：やめろよ、もう役者、早く。舞台ばっかりやってっけどさ。

藤村：この前、大泉さんにほめてもらった。

(大泉とスタッフたちの笑い声)

藤村：良かったなあ。

鈴井：ウチの舞台でね？

藤村：さすが演出がいいから！役者も育つからさあ、大泉さんにほめてもらった。

(大泉の笑い声)

大泉：きみねえ、俺はね、別にね、あなたがね、

お芝居上手くなったってちっとも嬉しくないよ！

この間より上手くなったなとか、どうでもいいから！

要らないんだよ、きみにステップアップとか、役者としての！

藤村：いや、ステップアップっていうか、楽しいんだよ？オーパーツ。

おまえも出ろよ。

(大泉とスタッフたちの笑い声)

大泉：おかしいよ、きみ、その歳になってさ、なんで芝居とか始めてるわけ？

『水曜どうでしょう2019—北海道で家、建てます—』8話

(84)の発話者はバラエティー番組『水曜どうでしょう』の監督の藤村(50代男性)と企画兼出演の鈴井(50代男性)、出演者の大泉(40代男性)である。彼らの関係における興味深い点は、10年以上年齢が離れている藤村や鈴井に対して大泉が全く遠慮なく「あなた・あんた・きみ・おまえ」などの対称詞や、「藤村君」や「～なヤツ・バカ野郎」のような、一般的には親しい目下や年下の人物に使いそうな呼び方を用いることが特徴的だと言える。これは大泉独特のキャラクターによるものだとも言えるが、実際に藤村や鈴井も大泉をそのように呼ぶ場合が多いため、先ほどのユズヒコと藤野のように、お互いに文体や品位の下降が許されて、対称的な呼び方が成立する冗談関係だと言える。

(84)は北海道で出演者たちが直接家を建てる企画の中での一場面で、家を建てる途中に休憩を取っている藤村、鈴井、大泉の会話である。その中で、「もうディレクターとしての勘はないが役者としての勘はある」と言いながらふざけている藤村に対して大泉がつっこんでいる場面である。その際、インポライトネスとして解釈できる形式が複数見られて、「～ヤツ」、「バカ野郎」、「(役者を)やめろ」、「どうでもいい」、「(役者としての)ステップアップとか要らない」、「おかしい」などがある。また、大泉が使う対称詞は「あなた・きみ・おまえ」が見られるが、これも大泉の言葉遣いの特徴だと言えて、一つ文脈の中での同じ相手に対して複数の対称詞を頻繁に入れ替えている。一般的に同じ相手には一つの無標の呼び方を使う場合が多い

が、彼の場合には同一人物に対してそれぞれの文脈に相応する対称表現を用いることが多い（例えば、固有名詞から対称詞へのシフト）。これは、同一人物に対する対称表現のカテゴリー転換として考えられて、第8章で詳しく論じることにする。

（84）でのそれぞれの対称詞の使用を見てみると、まず、「おまえ」はインポライトネスの形式として考えられる「～ヤツ、バカ野郎」が使われた発話のほぼ直後に出現する。このことから、「おまえ」は感情的で乱暴なタイプのインポライトネスを強化する際に使われると言える。しかし、（84）の文脈が藤村に対する攻撃ではないことが非言語的要素（発話者や周辺人物による笑い）から確認できる。一方、藤村にお芝居を褒めてもらったことが嬉しかったと聞いてからは、「きみ」と「あなた」を使っているが、年齢やディレクターと出演者という地位の違いからは大泉が目下の存在になるが、お芝居が基準になると大泉が藤村のお芝居を評価できる先輩のような立場になるため、彼らの無標の上下関係が一瞬逆転されることになる。そこで、藤村の「大泉さんにほめてもらった」という発言につっこみながらも、一瞬逆転された上下関係を意識し、上から目線の語感を与える「きみ」と「あなた」を用いていると解釈できる。

次に、皮肉の文脈における対称詞の使用を見てみる。皮肉の特徴は、ポジティブ・ポライトネスとしての形式を使って相手を攻撃するという発話効果を持つことだと言える。

（85）北原：だってあれは、直くんがああなったのは、ウェルテルの...

森口：私のせいです。寺田先生とは、こうして時々会ってました。とても熱心で、単純で...熱烈な桜宮信者。だから亡くなった愛美の父親は桜宮だと彼に告白しました。彼を取り込み、彼を利用してあの二人を追い詰めるために。もちろん、愛美が死んだ理由はしゃべりませんでした、彼は私のアドバイスをよく聞いてくれました。

北原：それって...

森口：下村くんの家への家庭訪問。「イヤな顔をされても通い続けろ、最低一週間に1回。たとえ閉め出されても声をかけ続けろ。桜宮ならきっとそうするだろう」って、私は彼にそう言いました。渡辺君がいじめられているという相談には、クラスの誰かからメッセージが届いたことにした方が生徒たちも問題意識を持ちやすいと、そんなことをすれば、いじめが助長されるとわかっていて、わざとそう言ったんです。いじめが解決したと聞いてがっかりしました。残酷なクラスメートたちに追い詰められ殺されるか自殺してくれればいいと思ってましたから。意外と優しんですね、あなた方は。

北原：先生...

『告白』

先ほどの（78）でもインポライトネスの文脈における森口の「あなた方」が確認できたが、ここでは皮肉の文脈での使用が見られる。自分の娘を殺害した渡辺と下村への復讐として、森口は教師を辞めてから後任の担任になった寺田という教師を利用し、渡辺と下村を精神的に圧迫する。その中で、渡辺と北原がクラスの中のいじめの対象になり、森口は渡辺がいじめに追い詰められて命を落とすことを望んでいたが、いじめが解決してしまったことを残念だと思いながら「意外と優しんですね、あなた方は」と北原を含む生徒たちへの皮肉を言っている。映画の中ではこの発言をする際の森口の非言語的要素（嘲笑）から、形式と発話効果におけるずれが把握できる。形式だけを見ると「優しい」というほめ言葉を使っているが、「意外と」という形式や先ほどの（78）で見られた生徒たちを見下す森口のスタンスから、ほめ言葉を使って生徒たちの評価を下げる皮肉の文脈であることが把握できる。そのような文脈で使われた「あなた方」は、（78）の場合と同じく、上から目線で生徒たちに距離を置く発話効果があり、皮肉の文脈をより強化していると言える。

7.4. 第7章のまとめ

本章では、インポライトネスの研究における日本語の対称詞の位置づけと、様々な文脈での発話効果を考察した。対称詞がインポライトネスの形式とは言いがたいが、インポライトネスへの解釈を強化・確定させる言語的手段であることを指摘し、そのような文脈での使用について用例を基に分析した。これをより拡張させて考えると、対称詞は話し手が伝えようとする文脈を強化・確定させる言語的手段であり、話し手がその文脈をどのように捉えているのか（スタンス）によって、対称詞の中からの選択が見られると言える。

さらに、インポライトネスとして解釈するにはやや微妙であるつつこみ、皮肉などにも触れてそれらを逸脱的なインポライトネスとして規定し、そのような文脈での対称詞の選択について第5章で考察したスタンスと関連付けて考察した。逸脱的インポライトネスとは、インポライトネスの解釈において形式と発話効果がずれている場合のことを意味し、そのずれの種類によって、1)形式上はポライトネスだが発話効果がインポライトネスであるもの（皮肉やマウントなど）と、2)形式上はインポライトネスだが発話効果がポライトネスであるもの（からかいや冗談）に分けている。

本研究でのスタンスのタイプの中には認識と情緒が混在するものがあり、これはある言語行動を行った場合、その発話効果（解釈）がポライトネスとインポライトネスの境界上に置かれる可能性が高いと言える。さらに、認識と情緒における対立・非対立の方向性がずれている場合、感情レベルである情緒的スタンスが強く機能する可能性が高い。

逸脱的インポライトネスをスタンスの観点から説明すると、からかいや冗談は感情的には非対立のスタンスを持っているため、インポライトネスとポライトネスの近接化の発話効果が同時に見られたり、全体的な解釈はポライトネスの方に向かう可能性が高いと言える。それに対して、皮肉やマウントは認識と情緒のスタンスがすべて対

立している可能性が高いため、ポライトネスとしての形式を使っているものの、全体的な発話効果としては相手を下げるというインポライトネスの方に向かう可能性が高いと言える。

第8章 対称表現の選択に見られる

カテゴリー転換

第8章では、ある文脈の中で同一人物を指す場合での、例えば固有名詞から対称詞へとといった対称表現のカテゴリー転換を中心に考察を行う。発話の中で同じ人物を指す対称表現が複数現れることはそれほど珍しくないが、同一人物に対して2種類以上の対称表現を使って聞き手を表すことはあまり見られないと思われる。そこで、そのような転換が見られる用例を分析し、日本語の対称表現の選択に見られるカテゴリー転換とその発話効果を考察する。また、そのような選択に見られる動機として、話し手と聞き手における距離の「動的調整」という観点から考察を行う。

8.1. 対称表現のカテゴリー転換と発話効果

既知関係の相手に対しては、無標の呼び方があるはずであり、一般的には個人の名前である固有名詞やその人物の社会的役割を表す普通名詞がそれに当たる場合が多い。また、そのような関係の中では話し手が聞き手のことを普段どのように捉えているかという、無標のスタンスが形成されている可能性も高い。しかし、発話場面や内容によっては話し手が聞き手に対する対人距離を調整する場合もあり、無標の呼び方ではない他の形式を使って聞き手を指すことも考えられる。澤田（2019）では、普段使用している無標の人称指示形式から有標の指示形式へと「カテゴリー転換（categorical shift）」がなされた場合、そこには聞き手に対する話し手の何らかの特別な伝達意図が含まれ得ると説明する。このカテゴリー転換として、日常のやり取りの中で最も多く見られる例は、発話内で聞き手のことを固有名詞と対称詞を使って指す場合だと言

える。また、第6章でも考察したように、同じ対称詞の中でも2種類以上の形式を使って聞き手を指す場合も考えられる。澤田（2019）では「無標から有標の形式へ」の場合を転換としているが、本研究では無標の対称表現が複数存在し、それらが一つの文脈の中で入れ替わる場合についても転換として扱うことにする。

対称表現の選択には、社会的な規範や話し手の属性（外的要因）、表現意図（内的要因）が関わり、一般的には社会の規範に沿った選択が見られる。そしてこのような選択は、聞き手の方からも話し手に期待していると言えて、話し手の表現意図が強い動機として作用した場合には、デフォルトではない対称表現の選択が見られるとも言える。デフォルトへの期待と関わるものとしては、Levinson（1979）による活動類型（Activity types）が挙げられる。活動類型とは、文化的に認知された任意の活動のことであり、言語行為論や推論とも関連してよく見られる。Levinsonは教えること、就職活動の面接、裁判での尋問、サッカーの試合、ワークショップの課題、ディナーパーティーなどを活動類型の代表例として挙げている。さらに、Levinsonはいかなる活動であれ、それに貢献するには厳しい制約があるため、それと対応して、その行為の過程の特定の時点においてどんな発話に対してもその発話が果たし得る機能についての強い期待が存在すると説明する。

Culpeper（2014）は、活動類型について相互行為をする人が、その活動を構成する過程で何をするのか、そしてそれに対応する知識—スキーマ（つまり、その活動の相互行為的側面と認知的側面に関して人間が有している知識）—の両方を必要条件として含んでいると説明する。Culpeperが言うスキーマの知識とは、「世界知識」として理解することができて、彼が挙げている「お元気ですか？（How are you?）」というフレーズが多くの状況では典型的な挨拶表現だが、医者と患者の診察場面ではそのような解釈が得られないように、ある場面（活動）で期待される言語行為や、ある形式において我々が日常のやり取りの中でデフォルトとして持っている解釈（知識）だと言える。

日本語の対称表現としては、固有名詞、普通名詞、対称詞が代表的な種類（カテゴリー）だと言える。しかし、これらが場面に関係なく使われるとは言いにくく、以下のように特定の文脈の発話効果をより効果的に伝達するに特化したものが選択されると言える。

(86) 茸原：四条先生もさることながら、みんなの藤岩さんをもってステキではないですか。どこのご令嬢かと思いましたよ。

河野：さすが部長！これ全部私のおかげですから！

米岡：自分で言うかなー。

藤岩：事実です。本当に河野さんのおかげです。

河野：藤岩さん。

藤岩：恥ずかしながら髪の毛を巻いたのもきちんと化粧をしたのも初めてでしたが、河野さんのおかげでオシャレは気分を高揚させるものだと知りました。少なくとも私の両親の言っていたことは私を勉強に集中させるためのウソだったのだとようやく分かりました。

『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子』3話

(86) は、出版社が主な舞台である日本のドラマの中の発話場面であり、発話者はすべて出版社校閲部の社員たちである。発話場面としては、藤岩（30代女性）が河野（20代女性）への感謝の気持ちを伝えていて、二人は校閲部の先輩と後輩の関係である。藤岩が原則主義で勤勉誠実な落ち着いたタイプの人間であることに対して、新入社員の河野は明るく情熱的で例えルールだとしても自分が疑問を抱いたり合理的ではないと判断した仕事には積極的に突き止めるタイプである。そのため、藤岩は河野の行動や仕事の進め方を望ましくないと判断し、指摘やアドバイスをする場面が多く、普段河野のことを固有名詞の「河野さん」と対称詞の「あなた」を使って表している。

(86) の文脈は、「校閲は文字だけで内容や作家の意図に干渉しない、私情にとらわれる可能性があるため好きな作家の校閲は担当しない」というルールのため、長い間ファンとして憧れていた作家（四条）の作品を校閲できるチャンスを諦めようとする藤岩に、河野は「好きだからこそできることがある」と校閲を積極的に勧める。また、四条の作品がある賞にノミネートされ、校閲担当であった河野と藤岩が待ち会に招待されるが、いつも暗いスーツ姿である藤岩は河野にオシャレをしてもらい、ついに賞を取った四条とも感動的な出会いができる。その後、校閲部で小さな打ち上げが開かれ、普段とは全く違う藤岩の姿について部長である茸原が話を始める場面であり、校閲部の社員たちの前で藤岩は河野に対して感謝の気持ちを伝えながら普段のデフォルトの対称表現である「河野さん」と「あなた」のうち、固有名詞の方を使っている。

「相手に感謝する」ことは、ポライトネス理論（Brown&Levinson1987）の観点からは相手のポジティブ・フェイス（他人によく思われたいという社会的欲求）に配慮したポジティブ・ポライトネスのストラテジーとして扱うことができる。そのため、個人を特定できる情報内容を含んでいる固有名詞を使い、誰に対する感謝であるのかを明確にすることがデフォルトとして考えられる。そのため、無標の呼び方の中でも固有名詞の方を使って「河野」といった人物に対する感謝であることを効果的に伝えることができる。もし、同じ文脈の中で対称詞の「あなた」を使うと想定してみると（「あなたのおかげです。」）、「あなた」が持つ距離を置く機能によって相手への感謝を伝えるという発話意図とずれが生じてしまう。このように、ある文脈における日本語の対称表現の選択には、当該の文脈を伝達するに最も適切な形式が選択され、そこにはデフォルトとしての期待・解釈が含まれると言える。

そこで、以下では日本語の対称表現のカテゴリーによる特徴を再確認し、日本語の対称表現のカテゴリー転換にはどのようなタイプが見られるのかを考察する。第1章でも触れたように、日本語の対称表現の選択可能範囲を考えてみると、話し手が既知関係の聞き手に対して固有名詞と普通名詞、そして対称詞のすべてを入れ替えながら

使える場合は極少ないと言える。また、選択できる対称表現の範囲に大きく影響するのは話し手と聞き手における社会的上下関係²⁸だと言えるが（鈴木1973）、各人物が一般的に選択できる対称表現をまとめたものを以下に再掲する。

（87）社会的上下関係に見る日本語の対称表現の選択可能範囲（（24）の再掲）

- a. 目上が目下に使用できる対称表現：固有名詞（＋敬称）、対称詞、（普通名詞）
- b. 目下が目上に使用できる対称表現：普通名詞、固有名詞＋敬称・肩書
- c. 同等者の間で使用できる対称表現：固有名詞（＋敬称）、対称詞、（普通名詞）

（87a）の目上は、目下の人物に対して固有名詞と対称詞が一般的に選択できる。固有名詞の場合、名字と名前の部分を区別したり、「さん」のような敬称が付加された形などをすべて区別することになると、選択肢がより膨大になると言えるが、ここではとりあえず固有名詞という同じカテゴリーとして考える。また、職場でのフォーマルな会議などでは、固有名詞＋肩書の形が使用されることも想定できるが、他の対称表現に比べて使用頻度が高い方ではないと言える。（87b）の目下が目上に対称表現を使うときには、目上の役職名を表す普通名詞を用いることが一般的で、固有名詞を使うことになると「さん・さま」のような敬称の付加が義務付けられると言える。対称詞は直示の用法を持つため、一般的には目上の人物には用いられないと考えられる。

（87c）は同僚や友人のような同等者間における対称表現の使用であり、お互い固有名詞または対称詞が選択できる。もし、職場での同僚や似たような職級を持つ者同士

²⁸ 話し手と聞き手における年齢の上下や社会的地位や組織内の上下といった、「事実的な上下関係」を指す。ちなみに、上下関係の中には、聞き手が年齢的には上だが組織内では後輩である場合のように、上下を判断する要素たちが合致しない場合も存在する。この場合、話し手が聞き手に対してどの側面を優先して認識するかという、認識的な上下関係も考えられるが、そこには社会的な規範よりは話し手による判断や話し手のスタイルが関わる可能性が高いため、一般的な対称表現の選択に大きく関わるものは、やはり事実的な上下関係の方が優先されると言える。

であったらお互いを固有名詞＋肩書の形で呼ぶことも可能であるかもしれないが、一般的な使用ではないと言える。このように整理してみると、同一人物に対する対称表現のカテゴリー転換のタイプとしては、「固有名詞と対称詞」における転換が最も一般的だと言える。もちろん、目下による使用から固有名詞と普通名詞における転換も考えられるが、普通名詞を用いる関係とは職場での上司が想定される。例えば、職場では目上に対して普通名詞を使用し、プライベートでは固有名詞＋敬称（さん）の方を使う間柄だとすると、同じ発話の中での転換が見られる可能性もあるが、固有名詞と対称詞間のような一般的な転換とは別途に考えた方が合理的だと言える。また、聞き手に対して話し手が比較的自由に使える対称表現は固有名詞であり、固有名詞は既知関係の相手に対する無標の呼び方になる可能性が高い。そこで、以下では既知関係の聞き手に対して、一つの文脈の中での固有名詞と対称詞におけるカテゴリー転換を中心に考察する。

8.2. 固有名詞と対称詞における転換

既知関係の聞き手に対して一つの文脈の中で固有名詞と対称詞を使う場合、両者が出現する一般的な順番として、以下のように呼びかけとして固有名詞を使ってから、ある情報を伝える命題内で対称詞を用いる用例が多く見られる。

(88) 藤村：おい、何すんだよ。

大泉：藤村君、寝れないから、きみのイビキで。

藤村：いや、そんなに寝てないよ。

嬉野：寝てたよ、きみ。

藤村：そんなことないよ。

嬉野：すごいイビキかいてたよ。

大泉：やっと寝ますんで、ちょっと1分時間ください、1分、いや、1分じゃない、
3分だな。起きててくださいよ？その3分で寝ますからね！

（中略、他の3人が寝袋の話をしている間また眠ってイビキをかく藤村）

大泉：藤村君！藤村君！！！大丈夫か？

藤村：ん？

大泉：大丈夫かな？

藤村：ん、ちっともあつたまりやしねえぞ、これ。

嬉野：寝れないか？

藤村：寝れないよ、こりゃあ。

（藤村以外の笑い声）

大泉：いや、寝てんだよ。きみは寝てんの！

鈴井：ぐうーぐうー寝てただろ！

大泉：きみは寝てんだよ、藤村君！いいかな？

僕たち寝るからちょっとだけ待っててくれていいかい？

（相変わらずイビキをかく藤村）

大泉：藤村君？

藤村：...ん？

大泉：藤村君！！

藤村：はい！

大泉：ちょっと僕たち寝るまでちょっとだけ待っててもらってもいいかな？

藤村：ん...。冷気がすげえんだ。

大泉：そうだね、よし！じゃ、みんな一斉に寝ようね。

藤村：早く寝ないと死んじゃうんだよ、これ。

鈴井：うん、はい。

大泉：はい！じゃ、おやすみー。

（またすぐイビキをかく藤村とその姿に笑う3人）

鈴井：藤村君！藤村君！！藤村君！！

大泉：藤村君！！

嬉野：なんでこんなに早く寝れるの？どういうことだよ。

鈴井：不思議だよね。藤村君？藤村君？！！全然起きない…。

大泉：藤村君！！なんでそんな早く寝るんだよ！藤村君！！

鈴井：（大声で）藤村君！！おーい、藤村君！！

藤村：…なんだい？

大泉：（笑いながら）藤村君！なんなんだよ！

なんでこんなに迷惑ばかりかけんだよ、こいつは！

迷惑だなー、藤村君、本当に迷惑！

『水曜どうでしょう2019—北海道で家、建てます—』7話

（88）は、日本のバラエティー番組『水曜どうでしょう』の発話場面であり、ディレクター陣の藤村（50代男性）、嬉野（60代男性）、タレント陣の鈴井（50代男性、企画兼）、大泉（40代男性）が中心となって様々な企画を見せる番組だが、今回は長期プロジェクトとして北海道で木造の家を建てる企画である。（88）の発話時点は真冬に家の柱を建てている時であり、家の近くでテントで一泊をすることになったが、酒の酔いで熟眠している藤村のイビキがあまりにもひどく、他の3人が彼を起こしている場面である。ここで、固有名詞である「藤村君」は主に呼びかけとして使われており、藤村に伝えたい発話内容の陳述の際には対称詞の「きみ」を使っていることが確認できる。発話内容としては、イビキをかきながらぐっすり寝ているにも関わらず、自分は眠れないという藤村に対して、鈴井と大泉が「きみは寝ている」という事実を確認させている。一般的に、自分の身体のコトは本人が最もよく知っているはずだが、

ここでは客観的な判断ができない藤村につっこみながら対称詞の「きみ」を使って情報を伝達している。さらに、そのような情報が含まれている命題の前後に見られる「藤村君」は、テントの中にいる4人の発話参加者のうち、聞き手は他の人ではない「藤村」であることを自覚させる機能を果たすとも言える。もちろん、対称詞も直示の用法を持つが、このように複数の発話参加者が存在する場合には、個体の情報内容を表す固有名詞を使って聞き手であることを認識させていると言える。そのため、藤村が眠っている間には対称詞ではなく、固有名詞だけを呼びかけとして使っていることが確認できる。さらに、話し手の中の大泉は、鈴木やディレクターたちと年齢が10年以上離れており、ディレクターとタレントという立場から見ても、大泉が目下の立場になることが考えられるが、大泉は他の3人を上司よりは同僚として認識していることがディレクターの藤村に対する「きみ」「藤村君」「こいつ」などの彼の言葉遣いから見えてくる。そして、このような大泉による対称表現の逸脱的な選択がこの番組のコメディ的な要素として働いていると言える。このように、一つの文脈の中で固有名詞と対称詞における転換が見られる際には、呼びかけとして固有名詞を使って聞き手であることを自覚させて、話し手が伝えたい情報内容が含まれている陳述では対称詞が使われていることが確認できる。

一方、固有名詞と対称詞における転換だけではなく、2種類以上の対称詞が選択された例も見られる。

(89) 浅野：随分と勝手なことをしてくれたものですね、半沢融資課長。

半沢：どういう意味でしょうか？

江島：東田の海外不動産差し押さえの件だ！

浅野：私はそんな報告聞いていませんし、許可した覚えもありませんよ。

半沢：一刻を争う事態でしたので、ご報告が遅れたことはお詫びします。

浅野：結局、国税に持っていかれたら元も子もないですね。

半沢君、そんなに好き勝手やりたいなら、

どこか田舎の小さな会社に出向をお勧めするよ。

そこで自由に伸び伸びやりたまえ。

半沢：せっかくですが、私はこの銀行に骨を埋める所存でおります。

浅野：それを決めるのはきみではない！まあ、明後日の臨店ではせいぜい...

半沢：臨店？ 何の話です？！

江島：寝ぼけるな、半沢！明後日裁量臨店があると言ったろう！

半沢：聞いておりません！しかも明後日とは！

通常、裁量臨店が行われる場合、1週間前後の準備期間があるはずです。

浅野：私はだいぶ前に伝えたはずですよ。

半沢：何かの間違いでは？

浅野：間違えているのはあなたです！

そうやって自分のミスを他人のせいにするのはよくないですねえ、

半沢融資課長！

『半沢直樹』3話（用例（10）の再掲）

（89）は用例（10）の再掲であり、銀行が主な舞台となっているテレビドラマの中の発話である。銀行の支店長である浅野（50代男性）と副支店長の江島（50代男性）が、融資部の課長である半沢（40代男性）に対して、上から目線で強圧的な言い方をしている場面であり、目上の立場である浅野は、一つの文脈の中で半沢に対して「半沢君」、「半沢融資課長」、「きみ・あなた」といった対称表現を使っており、固有名詞と対称詞間のカテゴリー転換に加え、対称詞の中でも複数の種類の形式を使っている。（89）の例のように、ここでも固有名詞である「半沢君」と「半沢融資課長」は主に呼びかけとして使われており、対称詞の「きみ」と「あなた」は、「事態の決定権が半沢にはない」、「半沢の考えは間違っている」という、聞き手である半沢へ

の攻撃（インポライトネス）の文脈の発話内で使われている。

スタイルの方も見てみると、浅野による「あなた」は敬体と共起している。それに対して、江島は強圧的な断言の「だ」や「寝ぼけるな、半沢！」という、半沢への明確なインポライトネスの表現を使っている。このような文脈の中で、浅野は敬体とともに「あなた」を使っているが、そこから江島が形成した強圧的な雰囲気に乗ってインポライトネスな陳述をしながらも、江島とは違って自分は品位のある言葉遣いをしようとする選択動機が読み取れる。それに対して、「きみ」は一時的に常体と使っているのが見られるが、「きみ」は「おまえ・あんた」よりは距離感を与えるものの、友人同士でも使える対称詞であるため、常体・敬体の両方とも共起できる。非言語的な要素を見ても、「きみ」を使っている発話で浅野は一瞬感情的になり声を上げている。このように、話し手の品位を保ちたいといった動機や、聞き手への感情（本音）をより効果的に伝達するため、同じ対称詞というカテゴリーの中でも複数の種類の形式から最も適切な表現を選択していると言える。また、「あなた」や「きみ」はその形式性が強いと距離感を与える機能を持つと言われているが、この場面ではそれによって上から目線で冷静に相手を貶める発話効果をより強化させると言える。さらに、「半沢融資課長」のように、目下の人物に対して固有名詞に肩書を付加した形を使うことは一般的だとは言いが、（89）のように上から目線で相手を攻撃する文脈では、「半沢」という個体としての情報だけではなく、さらに半沢の社会的役割までを明示することによって、インポライトネスの文脈が指す聞き手は他の人物ではない「半沢」であることをより明確に認識させていると言える。

以上のように、日本語の対称表現に見られるカテゴリー転換のタイプとして、固有名詞と対称詞における転換を中心に見てきたが、一般的に固有名詞を使って聞き手であることを自覚させ、話し手が伝えたい情報内容が含まれている陳述では、当該の文脈を伝達するに最も適切な対称詞が選択されると言える。

8.3. カテゴリー転換の動機：対人距離の動的調整

対称表現のカテゴリー転換として、固有名詞と対称詞における転換を中心に考察を行った。固有名詞は敬称と共起できて、敬称の中から待遇度の違いが見られることによって、固有名詞という一つのカテゴリーの中でも形式の転換があり、さらに距離の調整が可能であることが想定できる。それに対して、対称詞は敬称との共起が頻繁に見られるわけではないが、第3章で考察したように対称詞の選択に関わる要素の違いによって階層が見られる。また、第5・6章での考察から、対称詞の種類による転換や距離の調整が考えられる。そこで、固有名詞と対称詞間のカテゴリー転換とその動機の考察に加え、各カテゴリーの内部における転換とその動機についても考察を行うことにする。

まず、固有名詞は敬称の付加による待遇度の調整が可能である点から、話し手と聞き手における「縦」の関係の調整ができると言える。例えば、先ほどの(88)の例で大泉による「藤村君」は、彼らにおける無標の呼び方であり、お互いを常体を使って待遇することが彼らの関係におけるデフォルトとして設定されていると言える。このデフォルトの呼び方は、話し手と聞き手の間に設定されている初期値とも考えられて、(88)の場合は、「藤村君」や「きみ」がゼロの基準点となると言える。もし、ここで「藤村さん」を用いる場合には、敬称の「さん」によって待遇度が上がることによって、「藤村君」という基準点から見るとプラスの待遇をしていることになる。それに加え、敬称の「さん」は常体または敬体とも共起できるため、常体から敬体の使用に転換された場合、聞き手への距離感を与えることになり、「縦」の関係の調整に加えて心理的距離感（対人距離）といえる「横」の関係の調整が伴うとも言える。一方、「藤村」のように固有名詞単独の形を用いる場合、「藤村君」という基準点から見ると待遇度が下がり（マイナス）、それが話し手と聞き手における心理的距離をさらに縮めているとも解釈できる一方、聞き手に対するフェイス侵害や攻撃としても解釈で

きる。このように、話し手と聞き手における無標の呼び方から他の形式への転換は、聞き手に対する話し手の距離の調整として解釈できて、固有名詞の場合、敬称の付加の有無によって待遇度といった「縦」の関係の調整と心理的距離としての「横」の関係をすべて調整できると言える。

対称詞の場合、今までの考察から話し手が伝えたい文脈を効果的に伝達する際に用いられていることが確認できたが、対称詞の選択動機として聞き手に対する話し手のスタンスの表示が見られることを考察した。さらに、スタンスの表示に伴って話し手と聞き手における対人距離、つまり「横」の関係が大きく関与すると言える。相手に対する心理的距離は、第3・5章などでも触れたように、「対人距離（滝浦2008・2020など）」と扱うこともできて、これは社会的に固定されている上下関係と比べて話し手による距離の調整が容易であると言える。話し手が聞き手との対人距離を調整することは、普段の関係から近づけるか（近接化）遠ざけるか（遠隔化）といった調整を行うことになり、それに伴って相手をどのように待遇するかを決めることにもつながる。

この待遇度は、一般的にゼロという起点があって、そこを中心にプラスかマイナスの方向に調整すると考えやすいが、既知関係の相手への待遇度を考慮に入れると、例えばプラス待遇（敬語使用）がデフォルトであった関係の人物と親の関係に発展することによって、ゼロ待遇へと調整するケースも考えられる。つまり、距離の調整や待遇度を判断する際は、絶対的な尺度があって、その起点を中心にプラス待遇かマイナス待遇かを決めるのではなく、話し手と聞き手におけるデフォルトの関係が起点となり、それを中心にプラスかマイナスかを決める「動的調整」として扱う必要がある。

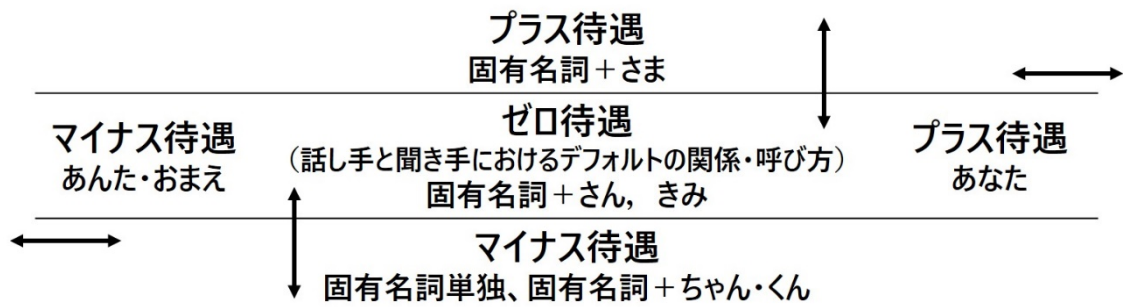


図 11 日本語の対称表現と動的距離調整の尺度

図11は、第3章の図6に日本語の対称表現を例として加え、縦と横の次元における距離調整を可視化したものである。ゼロ待遇が話し手と聞き手の間におけるデフォルトの関係や呼び方、つまり初期値として設定された対人距離だとすれば、固有名詞や対称詞を使ったカテゴリ転換によって、図11のように聞き手に対する縦と横の対人距離を調整すると言える。従来の研究では、話し手と聞き手における対人距離を説明する際、この縦と横の関係を特に考慮せず、片方だけの関係を念頭に置いて考察を行うことが多かったが、対称表現の選択に見られる距離の調整は、対称詞の選択によって聞き手に対する話し手のスタンスの表示や「横」の関係から見た心理的距離の微妙な調整もできて、固有名詞に敬称のような形式の付加による「縦」の関係を大きく調整することも可能であると言える。そして同じカテゴリにおける転換だけではなく、固有名詞から対称詞へ、対称詞から固有名詞へといったカテゴリ転換が見られるのは、話し手と聞き手における無標の呼び方、つまりゼロの初期値から「縦と横」の次元の関係を調整する「動的調整」がその動機として作用すると言える。

8.4. 第8章のまとめ

本章では、既知関係の聞き手に対する日本語の対称表現の選択に見られるカテゴリー転換として、固有名詞と対称詞における転換を中心に、その選択動機と発話効果を考察した。固有名詞は敬称と共起できて、敬称の中から待遇度の違いが見られることによって、固有名詞という一つのカテゴリーの中でも形式の転換があり、そこから話し手と聞き手における「縦」の距離の調整が可能であり、縦の調整に伴って相手に敬語を使うことによって心理的距離を遠ざけるなどの「横」の調整が可能であることが確認できた。それに対して、対称詞は敬称との共起が頻繁に見られるわけではないが、対称詞の種類によるスタンスの表示や対人距離といった「横」の調整が可能であることが明らかになった。さらに、固有名詞と対称詞間のカテゴリー転換とその動機の考察に加え、各カテゴリーの内部における転換とその動機に関しても考察の余地を広げた。

従来の研究では、話し手と聞き手における対人距離を説明する際、この縦と横の関係を特に考慮せず、片方だけの関係を中心に考察を行うことが多かったが、対称表現の選択に見られる距離の調整は、対称詞の選択によって聞き手に対する話し手の「横」の関係から見た心理的距離の微妙な調整もできて、固有名詞に敬称のような形式の付加による「縦」の関係を大きく調整することも可能であると言える。そして同じカテゴリーにおける転換だけではなく、固有名詞から対称詞へといったカテゴリー転換が見られるのは、話し手と聞き手における無標の呼び方、つまりゼロの初期値から「縦と横」の次元の関係を調整する「動的調整」がその動機として作用されることが明らかになった。

最後に、このような対人距離の動的調整は、（イン）ポライトネスの判断にも貢献できると考えている。第7章で考察したように（イン）ポライトネスは言語形式だけでは判断が困難である場合が多く、文脈依存的だという特徴があるため、その判断の

ためには話し手と聞き手におけるデフォルトの関係やスタンスを基準として、そこからプラス待遇なのかマイナス待遇なのかを判断する必要がある。本研究での対人距離の動的調整という観点が（イン）ポライトネスの研究や距離の理論の発展に貢献できるよう、今後更なる検証を行っていきたいと思う。

結論と今後の課題

1. 結論

本研究では、日本語の対称表現を中心に、その選択動機と発話効果について社会話用論的考察を行った。その中の主な研究成果をまとめる。

第一に、本研究では二人称代名詞や対称詞といった従来の用語の使用に対する妥当性を検討し、日本語の中の聞き手を指す指示的形式の総称を「対称表現」、「あなた」などの語類を「対称詞」と呼ぶことを提案している。そして、対称表現の研究の中であまり注目されなかった敬称、肩書などの付属的成分の特徴を整理し、それらの機能について考察した。また、日本語の対称表現の選択に関わる要素を話し手によるコントロールの容易さという観点から、外的要因（規範としての要素）と内的要因（話し手の表現意図と関わる要素）に分けて、対称表現の選択にはこの両方が関わるが、話し手の表現意図と深く関わる内的要因が強く働く場合、規範としての外的要因より優先される選択現象について、用例の分析を基に明らかにした。

第二に、既知関係の聞き手に対する対称詞の選択動機と発話効果を考察した。既知関係の相手に対する対称詞の使用は、有標の呼び方になる可能性が高いことを指摘し、対称詞の選択の際に話し手が聞き手をどのように「捉えて」いるのかについて、「スタンス」という観点から論じた。日本語の対称詞の研究におけるスタンスを聞き手に対する話し手の「捉え方」と定義し、そこには大きく認識レベルと情緒レベルのスタンスがあり、それぞれの対立有無によって聞き手に対する認識の対立・非対立のスタンス、聞き手に対する情緒の対立・非対立の4種類の単一型スタンスに分類した。また、認識と情緒のスタンスが同時に見られたり、両者の対立有無がずれていたりする可能性もあるため、認識と情緒のスタンスの複合型を設けて、対立のずれの有無に

よって認識的・情緒的な対立のスタンス、認識的な対立・情緒的な非対立のスタンス、認識的な非対立・情緒的な対立のスタンス、認識的・情緒的な非対立のスタンスの4種類の複合型に分類し、合計8種類のスタンスを設けた。さらに、対立・非対立のスタンスの表示は、話し手の聞き手への距離の表示と調整にもつながることを指摘し、ポライトネス理論の観点から、聞き手とスタンスが対立している場合には相手に距離を置く遠隔化が見られる可能性が高く、非対立の場合には相手との距離を縮める近接化が見られる可能性が高いことを考察し、前者の場合には「あなた・（きみ）」が、後者の場合には「きみ・あんた・おまえ」がその発話効果を確定させる言語的手段として選択されることを研究の成果として主張した。

第三に、日本語の対称詞の「あなた」を重点的に考察し、従来の研究で多く指摘される距離を置く機能に加え、話し手の品位の表示・保持の機能があることを明らかにした。前者が「相手をどのように捉えるか」という意図であるのに対して、後者は「自分をどのように見せたいか」という表現意図であるため、特に聞き手への距離や対立のスタンスを示さない場面での「あなた」の使用には、話し手の品位の表示・保持といった動機が強く見られることを用例の分析を基に明らかにした。また、このような「あなた」の機能は話し手のキャラクターの形成に強く影響することを確認した。

第四に、対称詞の選択と（イン）ポライトネスにおける関係を考察し、対称詞の形式自体が相手への意図的な攻撃であるインポライトネスとして機能するとは言いにくい、そのような文脈の中で対称詞を使うことによって、インポライトネスの文脈をより明確に伝達できる点から、（イン）ポライトネスの文脈における対称詞の選択は、当該の文脈をより強化または確定させる言語的手段であると位置づけ、対称詞の選択動機と発話効果を明らかにした。さらに、従来のインポライトネスとして判断が容易ではないからかいや皮肉などにも考察を広げて、それらをインポライトネスの解釈において形式と発話効果がずれている逸脱的なインポライトネスとして位置づけ、そのずれの種類によって、形式上はポライトネスだが発話効果がインポライトネスである

もの（皮肉やマウントなど）と、形式上はインポライトネスだが発話効果がポライトネスであるもの（からかいや冗談）に分類した。また、逸脱的インポライトネスをスタンスの観点から考察し、からかいや冗談は感情的には非対立のスタンスを持っているため、インポライトネスとポライトネスの近接化の発話効果が同時に見られたり、全体的な解釈はポライトネスの方に向かう可能性が高く、それに対して、皮肉やマウントは認識と情緒のスタンスがすべて対立している可能性が高いため、ポライトネスとしての形式を使っているものの、全体的な発話効果としては相手を下げるというインポライトネスの方に向かう可能性が高いことを示すことができた。

第五に、日本語の対称表現の選択に見られるカテゴリー転換の動機として、話し手が伝達しようとする文脈を強調または確定させる言語的手段としてカテゴリー別における適切な選択が見られることを指摘し、主に固有名詞と対称詞を中心に考察を行い、対称表現におけるカテゴリー転換から聞き手に対する「縦と横」の次元における距離の動的調整が動機として働くことを明らかにした。従来の研究では、話し手と聞き手における対人距離を説明する際、縦と横の関係を特に考慮せず、片方だけの関係を中心に考察を行うことが多かったが、対称表現の選択に見られる距離の調整は、対称詞の選択によって聞き手に対する話し手の「横」の関係から見た心理的距離の微妙な調整もできて、固有名詞に敬称のような形式の付加による「縦」の関係を大きく調整することも可能であると言える。そして同じカテゴリーにおける転換だけではなく、固有名詞から対称詞へ、対称詞から固有名詞へとといったカテゴリー転換が見られるのは、話し手と聞き手における無標の呼び方、つまりゼロの初期値から「縦と横」の次元の関係を調整する「動的調整」がその動機として作用されることが明らかになった。

2. 今後の課題

最後に、残された課題と今後いかに研究を発展させていくのかをまとめる。

第一に、本研究では対称表現、スタンス、逸脱的なインポライトネスなどに関して、先行研究を参考し新しい定義や分類を提案している。これらと関連する諸要素を網羅できるように、今後より精密かつ論理的に分類を加えていく必要がある。また、対称表現の選択による動的距離の調整という観点を他の待遇表現に発展させ、日本語における（イン）ポライトネスの研究に更なる発展を資することが期待できる。

第二に、より多様な場面での対称表現の選択が見られる用例を収集し、その選択動機と対人距離の調整を明らかにする必要がある。また、近年は海外のドラマや映画がローカル化される場合も多いため、同じ場面での対称表現の選択や使用に関する対照言語学的研究への発展も期待できる。

参考文献

- 大高博美（1999）「日本語における対称指示語彙選択のストラテジー」『言語と文化』
2, pp.29-41
- 大槻文彦（1891）「語法指南」『言海』有精堂
- 呉泰均（オ・テギョン）（2013）『日本語聞き手待遇表現の社会語用論的研究』北海道大学大学院文学研究科博士学位論文
- 加藤恵梨（2019）「二人称代名詞「あなた」「あんた」「おまえ」「きみ」について」
『ことば』40, pp.124-141
- 加藤重広（2006）『日本語文法入門ハンドブック』研究社
- 加藤重広（2009）「動的文脈論再考」『北海道大学文学研究科紀要』128, pp.195-
223
- 加藤重広（2017）「文脈の科学としての語用論—演繹的文脈と線条性—」『語用論研
究』18, pp.78-101
- 加藤重広（2019）『言語学講義—その起源と未来—』ちくま新書
- 加藤重広・澤田淳編（2020）『はじめての語用論—基礎から応用まで—』研究社
- 加藤重広・滝浦真人編（2016）『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房
- 菊地康人（1997）『敬語』談話社学術文庫
- 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 現代日本語研究会（2011）『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』ひつじ
書房
- 現代日本語研究会（2016）『談話資料 日常生活のことば』ひつじ書房
- 小林美恵子（2011）「職場で使われる呼称」現代日本語研究会（編）『合本 女性の
ことば・男性のことば（職場編）』ひつじ書房, pp.99-119
- 小林美恵子（2016a）「「日常生活」の呼称」『ことば』37, 現代日本語研究会,
pp.14-32

- 小林美恵子（2016b）「「日常生活」における自称詞—特徴と使い分け—」現代日本語研究会（編）『談話資料 日常生活のことば』ひつじ書房，pp.41－72
- 佐久間鼎（1951）『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣
- 佐久間鼎（1959）『日本語の言語理論』恒星社厚生閣
- 澤田淳（2019）「親族名称の子供中心的用法の類型と場面，視点—対照語用論的アプローチ—」澤田治美・仁田義雄・山梨正明(編)『場面と主体性・主観性』ひつじ書房，pp.107－159
- 澤田淳（2020）「文法研究と語用論」加藤重広・澤田淳編（2020）『はじめての語用論—基礎から応用まで—』研究社，pp.141－157
- 下谷麻記（2012）「自然談話における二人称代名詞「あなた」についての一考察：認識的優位性（Epistemic Primacy）を踏まえて」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』22，pp.63－96
- 鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波書店
- 滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
- 滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
- 滝浦真人（2016）「社会語用論」加藤重広・滝浦真人（編）『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房，pp.77－103
- 滝浦真人（2020）「対人語用論」加藤重広・澤田淳（編）『はじめての語用論—基礎から応用まで—』研究社，pp.57－76
- 田窪行則（1997）「日本語の人称表現」田窪行則（編）『視点と言語行動』くろしお出版，pp.13－44
- 辻村敏樹（1968）『敬語の史的研究』東京堂出版
- 辻村敏樹（1992）『敬語論考』明治書院
- 日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法7 第12部 談話 第13部 待遇表現』くろしお出版

- 日本語記述文法研究会（2010）『現代日本語文法1 第1部 総論 第2部 形態論 総索引』くろしお出版
- 野元裕樹（2019）「代名詞代用語の意味論」『日本言語学会159回大会予稿集』
pp.486－492
- 文化庁文化部国語課（2011）『平成22年度 国語に関する世論調査 報告書』
- 文化庁文化部国語課（2016）『平成27年度 国語に関する世論調査 報告書』
- 文化庁文化部国語課（2017）『平成28年度 国語に関する世論調査 報告書』
- 宮崎あゆみ（2016）「日本の中学生のジェンダー一人称を巡るメタ語用論的解釈—変容するジェンダー言語イデオロギー—」『社会言語科学』19－1, pp.135－150
- 山崎久之（1961）「「おまへ」「あなた」の発生は待遇表現体系にどんな影響を与えたか」『国語学』45, pp.1－14
- 米澤陽子（2016）「二人称代名詞「あなた」に関する調査報告」『日本語教育』163, pp.64－78
- Bell, Allan (1984) Language style as audience design. *Language in Society* 13 (2), pp.145－204
- Brown Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press. (田中典子・斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳 (2011) 『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』研究社)
- Culpeper, Jonathan (1996) Towards an anatomy of impoliteness. *Journal of Pragmatics*, vol.25, no.3, pp.349－367
- Culpeper, Jonathan (2005) Impoliteness and entertainment in the television quiz show: ‘The Weakest Link’. *Journal of Politeness Research*, vol. 1, no. 1, pp. 35－72.
- Culpeper, Jonathan (2011) *Impoliteness: Using Language to Cause Offence*. Cambridge University Press.

- Culpeper, Jonathan and Haugh, Michael (2014) *Pragmatics and the English Language*. Palgrave Macmillan. (椎名美智・加藤重広・滝浦真人・東泉裕子訳 (2020) 『新しい語用論の世界—英語からのアプローチ—』 研究社)
- Culpeper and Hardaker (2017) *impoliteness*. pp.199-225, In : Culpeper, Jonathan, Michael Haugh and Daniel Kadar (eds.)
- Du Bois, John W. (2007) The stance triangle. In: Robert Englebretson (eds.) *Stancetaking in Discourse Subjectivity, evaluation, interaction*. John Benjamin, pp.139–182
- Grice, H. Paul (1975) Logic and conversation. In: Peter Cole and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. London and New York: Academic Press, pp. 41–58
- Leech, Geoffrey N. (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman.
- Leech, Geoffrey N. (1999) The distribution and function of vocatives in American and British English conversation. *Out of corpora: Studies in honour of Stig Johansson* (eds.) Hilde Hasselgard and Signe Oksefjell, Amsterdam: Rodopi. pp.107–118
- Leech, Geoffrey N. (2007) Politeness: Is there an East-West divide? *Journal of Politeness Research: Language, Behavior, Culture* 3 (2) pp.167–206
- Leech, Geoffrey N. (2014) *The Pragmatics of Politeness*. Oxford University Press. (田中典子・熊野真理・斎藤早智子・鈴木卓・津留崎毅訳 (2020) 『ポライトネスの語用論』 研究社)
- Levinson, Stephen C. (1979) Activity types and language. *Linguistics*, 17 (5-6) pp.365-399 Republished 1992 in Paul Drew and John Heritage (eds.) *Talk at Work*. Cambridge University Press. pp.66-100
- McCready, Elin (2019) *The Semantics and Pragmatics of Honorification: Register*

and Social Meaning. Oxford: Oxford University Press.

Shibatani Masayoshi (1990) *The Languages of Japan*. Cambridge University Press.

Takahara Kumiko (1992) Second Person Deixis in Japanese and Power Semantics. *Intercultural Communication Studies* 2 (1) pp.117–128

用例出典

—自然談話資料—

現代日本語研究会（2011）『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』ひつじ書房

現代日本語研究会（2016）『談話資料 日常生活のことば』ひつじ書房

—映画—

『告白』（2010）

—テレビドラマ—

TBS『半沢直樹』（2013）

日本テレビ『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子』（2016）

—テレビアニメ—

テレビ朝日『あたしんち』（2002～2009）

アニマックス『新あたしんち』（2015）

—バラエティー番組—

HTB『水曜どうでしょう2019—北海道で家、建てます—』（2019）